財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

年報

平成
３年度

1992

㈶愛知県埋蔵文化財センター

序

当埋蔵文化財センターは設立以来７年を経過し、活動はこれまで以上に充実したものとなってまいりました。

近年、調査対象となる遺跡は、三河の山間部から名古屋市内の官庁街という大都市の中央部まで県内の広い地域に及び、これにつれて、旧石器時代の打製石器を出土する豊田市伊保遺跡から江戸時代の城郭の遺跡である名古屋城三の丸遺跡まで、遺跡の性格、出土する遺物もさらに多岐にわたるようになってきました。また、今年度当センターが刊行した遺跡の発掘調査報告書はこれまでで最も多く13冊にのぼり、通算41集に達し、内容も濃いものとなっております。この中には、全国的に有名な朝日遺跡の報告書の自然科学編・木器編が含まれ、当遺跡の資料整理も佳境に入ってまいりました。

以上のような活動の記録をこのたび「年報　平成３年度」として取りまとめました。本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財の保護と活用の上でもお役に立つことができれば幸いかと存じます。

さらに、本書の刊行にあたり、専門委員の方々及び愛知県教育委員会の御指導御助言を頂き、また、建設省、日本道路公団、愛知県土木部・衛生部・警察本部、地元市町村、その他の関係の方々に多大な御協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

平成４年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　高木　鐘三

例　言

1．本書は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの平成３年度事業の概要をまとめたものである。

2．調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県土木部・衛生部・警察本部から、愛知県教育委員会を通じての委託を受けて、本センターが実施した。

3．調査の概要は、各遺跡ごとにまとめたものである。

4．普及活動の概要は、本センターの事業のうち、研修会・埋蔵文化財展などの埋蔵文化財の発掘調査以外の事業についてその概要を掲載した。

5．発掘調査にあたっては、理事・専門委員の各氏及び愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導助言をいただいた。

6．本書の作成にあたっては、阿部小百合、河合明美、岡田智子、五藤そのみ、坪井知江子、古橋佳子、八木佳素実各氏の協力を得たほか、関係各機関並びに、地元作業員の方々には多大な援助を賜った。

7．調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。

8．各調査区の名称はローマ字で表し、昭和63年度までは前にその年の年号による年度を、平成元年度以降は西暦による年度の下２桁を冠する。そのため、平成３年度は92○区となる。

9．文責は各文末に記した。

財団法人　愛知県埋蔵文化財センターの組織

役　員

理事長

高木　鐘三

常務理事

鈴木　正明

理　事

小金　　潔	県教育長
井関弘太郎	中部大学教授
伊藤　秋男	南山大学教授
大参　義一	愛知学院大学教授
坪井　清足	(財)大阪文化財センター理事長
楢崎　彰一	名古屋学院大学教授
稲石　　新	都市教育長協議会会長(蒲郡市教育長)
大溪　紀雄	町村教育長協議会会長(吉良町教育長)
石井　晃一	県土木部長
樋口　康則	県教育委員会社会教育部長
武田　　晋	県清洲貝殻山貝塚資料館館長(清洲町長)
亀井　誠治	県陶磁資料館館長

監　事

磯貝　満洲	県出納事務局次長
倉知　昌視	県教育委員会総務課長

専門委員

考古学	楢崎　彰一	名古屋学院大学教授
文献史学	早川　庄八	名古屋大学教授
地理学	海津　正倫	名古屋大学助教授
建築史学	浅野　　清	愛知工業大学客員教授
動・植物・考古学	渡辺　　誠	名古屋大学教授
形質人類学	池田　次郎	九州国際大学教授
保存科学	江本　義理	東京国立文化財研究所名誉研究員
岩石学	諏訪　兼位	名古屋大学教授
木材組織学	木方　洋二	名古屋大学教授

職　員

事務局長(兼管理課長)　川島　一夫

管理課

主　査	谷　　隆盛	
主　事	伊藤　秀城	後藤　捨成
	村上　寿章	伊藤　晴美

調査課

課　長	加藤　安信	
課長補佐兼主査	森　　勇一	
	山田　　基	
主　査	大橋　正明	鷲見　　豊
	小塚　俊夫	城ヶ谷和広
調査研究員	野本　欽也	遠藤　才文
	小澤　一弘	松原　隆治
	太田　芳弘	都築　暢也
	赤塚　次郎	石黒　立人
	宮腰　健司	酒井　俊彦
	池本　正明	余合　昭彦
	服部　信博	川井　啓介
	小島　廣也	服部　俊之
	鈴木　正貴	蟹江　吉弘
	樋上　　昇	
嘱　託	松田　　訓	岡本　直久
	金子　健一	楯　真美子

目　　次

Ⅰ．平成３年度事業の概要……1
Ⅱ．遺跡調査の概要……7
　調査の理由と工程……8
　遺跡の位置……10
　山中遺跡……12
　西上免遺跡……18
　堀之内花ノ木遺跡……20
　船橋宮裏遺跡……30
　清洲城下町遺跡……32
　外町遺跡……40
　名古屋城三の丸遺跡……44
　松河戸遺跡……48
　室遺跡……50
　岡島遺跡……58
　牛ノ松遺跡……60
　伊保遺跡……62
　三斗目遺跡……64
　跡ノ口遺跡……66
　一色長畑遺跡……67
　不馬入遺跡……68
　高樋遺跡……69
　三本松遺跡……70
　坂口遺跡……71
Ⅲ．清水遺跡発掘調査報告……73
Ⅳ．埋蔵文化財センターの活動……99
　埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会……100
　発掘技術等研修会……101
　資料の貸出・提供……102
　現地説明会……103
　検討会……104
Ⅴ．付篇（受贈図書目録）……105

平成３年度事業の概要

１．はじめに

平成３年度の受託事業は14事業、発掘調査遺跡は18遺跡、調査面積は44,958㎡である。発掘調査面積は、ここ３年間ほど概ね50,000㎡前後を推移し、安定している。まず、今年度に現れた発掘調査をめぐる状況の特徴について、二、三点まとめておきたい。

その第一点は、受託事業及び調査遺跡の変更が異常に多く生じたことである。遺跡数にして３箇所、調査面積14,950㎡が用地未買収などの理由で実施できなくなり、これに替わって７遺跡、調査面積10,080㎡が新たに年度途中で加わってきた。変更面積は、当初面積の30％近くに昇っており、今までにみられなかった非常に変則的な現象でもあったといえる。その最大の理由は、東海北陸自動車道事業関連田所遺跡（一宮市）及び西上免遺跡（一宮市・尾西市）の面積縮小にあった。ここでは試掘調査も実施できず、全体の調査事業量把握という基礎的な作業においても、問題点を残している。このような調査遺跡の年度途中における大幅な変更は、必然的に調査時期と調査研究員の係編成の変更とを引き起こすものであり、ひいてはそれが数字には表れない負担増を招いていることを指摘しておかねばならない。

第二点は、前年度と同様に小規模分散型の傾向が続いていることである。1,000㎡以下の調査が５箇所あるし、また調査遺跡数18箇所はこれまでで最も多い遺跡数であった。小規模調査ではあっても、事前の調整、準備、事後処理などに要する事務量は、規模の大きな調査の場合とさほど変わるところがない点を心得て調査体制を組む必要がある。

第三点目としては、最近の雇用状況を反映し、発掘調査においても人手不足の現象が著しくなってきたことがあげられる。人手不足は、名古屋市のような大都市や東加茂郡などの山間部のみでなく、県下全域でみられ始めた傾向で、このことが地域によっては作業員の高年齢化を招いてもいる。こうしたなかで、名古屋城三の丸遺跡では「三の丸今昔」、西尾市室遺跡では「室遺跡発掘ニュース」、同岡島遺跡では「週間岡島」、豊田市伊保遺跡では「伊保遺跡調査通信」といったパンフレットを作成し、調査成果の速報を通じて作業員との交流を深めたことが、結果的には人離れを防ぐことにもつながっていった。このような試みは、ある意味において「月の輪教室」的とも言えようが、人手不足かつ３Ｋ状況の中で発掘調査を実施していくためには、発掘調査自体が担っている文化事業的役割をより自覚的に捉えて展開していく必要があることを示唆している。

2．発掘調査

さて、本年度の調査成果の概要は時代順に次のようにまとめられる。

縄文時代遺跡としては、矢作川水系の東加茂郡旭町坂口遺跡、豊田市高樋遺跡・三本松遺跡・三斗目遺跡の調査がある。いずれも矢作川の上流域、中でも後三者は小支流仁王川沿いの段丘面に立地している遺跡である。高樋遺跡からは早期の陰陽二種の押型文土器や粕畑式、茅山式土器が少量出土したが、斜面堆積層への流れ込みのようで遺構は捉えられなかった。坂口遺跡では１ｍにも及ぶ厚い遺物包含層中から、早期の茅山、粕畑式、中期の里木式、曽利式、後期の加曽利Ｂ式、晩期の寺津式、元刈谷式などに属する多彩な土器が出土した。ここでも残念ながら住居跡等の遺構は明瞭に検出できなかったが、土器の型式分類から文化の流れはつかめそうである。また、三斗目遺跡からは後期堀之内式期を中心とした集石遺構が発見されている。中央に方形に囲った墓らしい遺構をもつサークル状の遺構もあり、信州、美濃地方との関連が指摘される。

弥生時代遺跡の調査としては、西尾市岡島遺跡、一宮市山中遺跡、稲沢市跡の口遺跡があった。23号バイパス建設に伴う岡島遺跡の調査は３年目最終年度に当たり、今回は集落の南東端を掘り進めたことになる。希薄ながら高蔵式期の土器、１棟の倒壊した竪穴住居が検出され、昨年の調査で発見された集落の端を流れているとみられた自然河道が、弥生時代まで遡らないことも判明した。また、昨年東海地方で初めて前期の方形周溝墓が発見された山中遺跡では、後期山中式期の前方後方形周溝墓が１基検出された。全長13m、後方部の１辺10ｍの小規模な周溝墓で、昭和60年に西春日井郡清洲町廻間遺跡で発見された事例と比べるとまだ定型化が進んでいない。

古墳時代に関する良好な資料は得られなかった。古代ではまず尾張国分寺跡の一部に当たる稲沢市堀之内花ノ木遺跡の調査があげられる。伽藍の南西から南端を画するとみられる幅2.0ｍから2.3m、深さ0.4ｍから0.7m程の溝が検出され、埋土中から創建時の瓦が一括して出土した。これにより尾張国分寺の伽藍規模を推定すると、東西約180m、南北約230ｍほどとなり、従来考えられていた範囲よりも南北方向が相当長い形態となった。尾張国分寺に関しては、続日本紀、日本後紀、文徳実録などに創建後にたびたび洪水にあったり、また火災にあったことが記されている。今回発見された瓦の堆積状況から、伽藍を画する溝は創建当初に築かれたものであり、創建瓦は769年あるいは775年の洪水により流れ込んだものと推察される。この遺跡は資料価値が高いため、県土木側と盛土保存の協議を重ねたのであるが、実現できなかった。

中世の屋敷跡が展開する西尾市室遺跡からは、10世紀前後に築かれたとみられる木樋を伴った導水施設が発見された。標高６ｍの地表面下３ｍ、中世の遺構面下1.5ｍの地点に築

かれていた。これは、発掘調査区の南壁に沿って土層の堆積状況を見るための深掘りトレンチを開けた際に出土したもので、中世の遺構は木樋の廃絶をもたらした洪水堆積による厚いシルト層の上面に築かれていることも判明した。

木樋は、作り替えを含めて合計３基。丸太材を半截しくり抜いた形態で、その内の１基は長さ８ｍ、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mを計る大形のものである。材質はヒノキとクスノキ。これらは自然河道から杭列を伴った溝により水を導き、一旦プール状の大形土坑内に水溜めしてから、乱杭でゴミなどを除去した後にこの木樋を使用して高所へと導水した施設である。出水側は調査区外であるため、どのような遺構と施設が展開しているのかわからないが、大阪府池島・福万寺遺跡（弥生時代末）の出土例や中世の荘園に設置された例からすると、水田遺構が広がっているものとみられる。少なくともこの種の遺構は本県では初例で、貴重な資料を得ることができた。木製品の保存が今後の課題である。

中世から戦国時代の調査遺跡としては、上記室遺跡、稲沢市舟橋宮裏遺跡、清洲城下町遺跡がある。室遺跡では方形区画の屋敷跡が５軒発見された。時期は12世紀から15世紀。石組で曲物をもつ井戸が確認されたが、建物配置の形態は捉えられなかった。12・13世紀代の灰釉系陶器は渥美窯産で、破片資料ながら龍泉窯製品などの中国陶器が比較的多い点は注目される。また、これまで知立市西中遺跡群や安城市加美遺跡、西尾市志貴野遺跡で発見されている火葬施設が22基検出されている。このような火葬施設の時期、墓地・集落との関係、被葬者の社会的位置などが研究課題となっている。舟橋宮裏遺跡でも中世墓地の一角が検出された。ここでは尾張平野に多い方形の土坑墓が主体で、火葬施設は小形の円形を呈し、少例である。

昭和61年度から始まった五条川改修に伴う清洲城下町遺跡の調査は最終段階に入った。今年度は現在の護岸堤防下が調査対象となったため、盛土で保存されていた江戸期の面を含めて、城下町前・後期の計３面調査となった。江戸期では18世紀に行われた五条川瀬替え以前の資料を少量得ている。また、戦国期では1586年の天正地震を前後して建て替えが行われたとみられる礎石建物群をもつ広大な屋敷跡が検出された。廃棄土坑から、発掘調査では珍しく狛犬も出土している。

近世以降の遺跡調査としては、名古屋城三の丸遺跡、西春日井郡新川町外町遺跡、額田郡幸田町不馬入遺跡があった。名古屋城三の丸遺跡の調査は本センターとしては４地点目であり、特に今回は３万石を拝領していた尾張藩の上級家臣竹腰家他二軒の屋敷地に該当していたこともあって、江戸期を通じた大量の日常雑器類の出土があった。それぞれの屋敷地境が溝から柵列、石垣土塀へと変わっていく姿が捉えられたのも今次調査の成果の一つにあげられる。しかし一方、攪乱もひどくて建物配置、その変遷、井戸・地下室・庭・

ゴミ穴などの関係はうまくつかめていない。

江戸期の整地層の下から、戦国期の見事な薬研堀、竪穴状の建物遺構１基が検出されたことも特筆に値する。これはおそらくは那古野城の遺構の一部に当たるものとみられ、「金城温古録」に現在の二の丸付近にあったとしるされている那古野城がいよいよそのヴェールを脱ぎ始めたといってもいい過ぎではない。そして、過去２箇所で江戸期の整地層の下から検出された同類の大形溝の位置をも合わせて考えてみると、戦国那古野城の形態は単一の方形区画で周りに堀を巡らした単純な形態ではなく、既に複数の郭をもつ複雑な構造をしていたと考えられるようになってきた。

外町遺跡では、美濃街道沿いの町屋に関する陶器類、また不馬入遺跡からは小さな街道沿いの建物遺構が発見されている。

３．整理及び報告書・年報の作成

今年度は、12遺跡の調査報告書作成、２遺跡の資料整理を進めた。年間の報告書作成冊数としてはこれまでで最高である。このため、作成は遅延を重ね、難渋を極めた。

「朝日遺跡」の報告書は、４年計画の第２年目に当たり、自然科学分析編と木製品・骨角製品・金属製品編の２編を作成した。特に、前者では朝日遺跡の古環境復元、年代測定、石器・土器の素材分析、獣骨や貝類などの自然遺体分析など、様々な自然科学的分析法を駆使して遺跡の全体像理解に迫ることができた。そのうちの一つの課題として、稲作をめぐる問題がある。朝日遺跡ではこれまでの調査で水田遺構は発見されていないが、今回、昭和54年度までに行われた県教育委員会の調査によって採取されていた竪穴住居内埋土のプラント・オパールを調べたところ、明らかにイネ科と断定される化石が相当数発見されたのである。このことは周辺に稲作水田が展開していたことを確証付けている。

「清洲城下町遺跡」及び「朝日西遺跡」の２冊の報告書はいずれも清洲城とその城下町に関する貴重な資料を提示している。朝日西遺跡は総構えの内に位置し、まさに城下町遺跡そのものなのであるが、昭和56年の調査当初、城下町遺跡としての認識が全く欠落していたため、発掘調査により戦国期の遺構面が広い面にわたって破壊されてしまったという情けない経緯を背負った遺跡でもある。両者は、近年、研究の進展が著しい戦国期城下町の都市構造と都市民の生活を考える上で参考になるだろう。

「山中遺跡」は弥生前期末の方形周溝墓が発見されて話題を呼んだ遺跡である。遠賀川式系土器と条痕文式系土器との接点、方形周溝墓の東日本への波及についても言及している。「勝川遺跡Ⅲ・Ⅳ」では、既に刊行した「同遺跡Ⅰ・Ⅱ」の成果を踏まえて、弥生期における木製品加工、地方における古代の墨書土器使用法などについて論じている。

「上万場遺跡」「上の平遺跡」は、矢作川及び豊川上流域の縄文時代遺跡を扱っているが、

どちらも遺構・遺物が希薄であるため若干の土器論に留まっている。しかし、前者からは灰釉系陶器類、また後者からは高蔵式期の弥生土器が出土しており、問題を縄文期の土器の動きのみでなく豊川最上流域への農耕文化の波及、あるいは山家三方衆に代表される中世土豪の活動にまで拡大していくことができるように思われる。

「名古屋城三の丸遺跡Ⅲ」と「吉田城遺跡」は、近世名古屋城と吉田城における武家屋敷跡の調査報告書である。ここでは様々な出土遺物の分析から武士階級の生活の実態を明らかにすると共に、もう一つの方法として、遺構に表れた屋敷区画の溝または塀による屋敷割と絵図及び系図に示された拝領者とを対比する方法を駆使して、具体的に入居者そのものを割り出すことを試みている。これを厳密に行っていくと、土坑などのゴミ穴に捨てられた生活廃棄物を使用していた家庭そのものまで割り出していくことができるわけで、今後、江戸時代の武家屋敷の発掘調査を進める場合の興味深い方法になろう。

「年報」作成の中でひとつ残念に感じるのは、今年度は事実報告にのみ終わり、研究論考が１編もなかったことである。次年度に期待したいが、このことは現地調査、報告書作成がきつくて、十分な時間が取れない状況をも反映している。

４．普及・啓発活動、その他

例年通り、県教育委員会との共催による基礎研修会、専門研修会、埋蔵文化財展、埋蔵文化財講演会の開催、埋蔵文化財情報と埋蔵文化財愛知の発行を行った。これらは、定型化した行事・内容であるが、それだけに絶えず見直しを図っていくことが求められる。

西尾市資料館と県埋蔵文化財調査センターを会場として行った埋蔵文化財展の期間中に、今回初めて催し物として古代の塩作り実験を行ってみた。それぞれ200名近くの見学者を得て好評を博したが、一種の仮説実験とはいえ、催し物は確たる学術的、資料的根拠に基づいて実施していく必要があることを反省として得た。このことは、展示会、パンフレットに使用するイラスト類の作成についても言えることである。

また、期間は１週間程度であったが、両会場ともに入場者は1,300名弱とやや少なく、現地説明会に参集される多くの人々に比しやや少ない感がする。この点も今後の課題であろう。

教育委員会の雑誌「教育愛知」特集号に朝日遺跡が取り上げられたことも、普及活動の一つとして挙げてよい。調査担当者自らが遺跡の持つ歴史的価値を分かりやすく記述していくことは大切なことである。　　（加藤安信）

遺跡調査の概要



調査の理由と工程

1．発掘調査

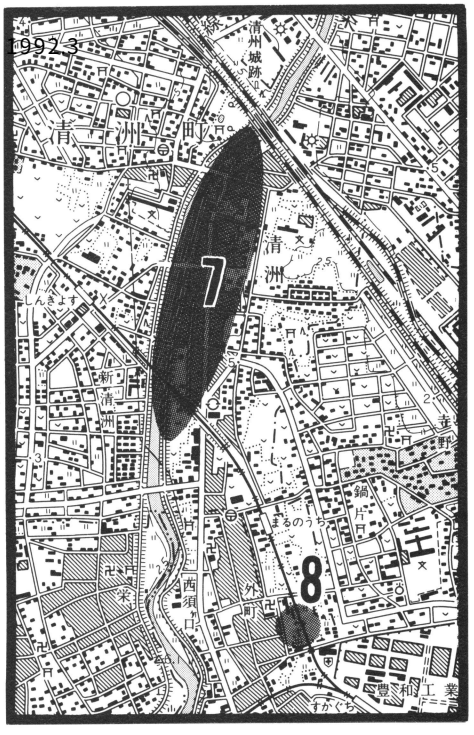
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
建設省	名古屋環状2号線	松河戸遺跡	A	636	91. 8～91. 9	岡本・楯
日本道路公団	(1735㎡)		B	1099	91.10～91.11	岡本・服部
建設省	国道23号バイパス	岡島遺跡	A	1250	91.12～92. 1	大橋・野本・池本
		(2500㎡)	B	1250	92. 2～92. 3	大橋・野本・池本
		室遺跡	A	4400	91. 4～91. 7	山田・大橋・都築・川井
		(8800㎡)	B	4400	91. 8～92. 1	山田・大橋・都築・川井
		牛ノ松遺跡		500	91. 7～91. 8	大橋・野本
	(12100㎡)	不馬入遺跡		300	91. 4～91. 5	大橋・野本・松田
日本道路公団 愛知県土木部	東海北陸自動車道	西上免遺跡		1270	92. 2～92. 3	小塚・太田・赤塚
愛知県衛生部	尾張看護専門学校増築	山中遺跡		1300	91. 9～91.11	石黒・服部
愛知県土木部 (都市整備課)	新川甚目寺線	外町遺跡	A	195	91. 4～91. 5	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			B	595	91. 4～91. 5	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			C	600	91. 6～91. 7	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(1890㎡)	D	500	91. 6～91. 7	城ヶ谷・鈴木・小嶋
(道路建設課)	新川清洲線	清洲城下町遺跡	A	500	91. 8～91. 9	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(847㎡)	B	347	91. 8～91. 9	城ヶ谷・鈴木・小嶋
	名古屋祖父江線	堀之内花ノ木遺跡	A	500	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			B	350	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			C	1400	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			D	600	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			E	1700	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			F	700	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			G	350	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
		(7100㎡)	H	1500	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
	加納東保見線	伊保遺跡	A	875	91.12～92. 3	鷲見・岡本
		(1750㎡)	B	875	91.12～92. 3	鷲見・岡本
	島崎豊田線	坂口遺跡		366	91.10～92. 1	松田・野本

調査委託者	調査の理由	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
(河川課)	国道23号線拡幅	不馬入遺跡		100	91.4～91.5	大橋・野本・松田
	馬飼井堀線	跡ノ口遺跡		2560	91.4～91.7	石黒・服部
	(3440㎡)	一色長畑遺跡		880	91.6～91.7	石黒・服部
	稲沢祖父江線	舟橋宮裏遺跡		1600	91.10～92.1	小塚・赤塚
	坂上花沢線	高樋遺跡		500	91.12	石黒・余合
	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	1800	91.12～92.3	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			B	1800	91.12～92.3	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(4820㎡)	C	1220	91.10～91.11	城ヶ谷・鈴木・小嶋
	仁王川河川改修	三斗目遺跡		1600	91.12～92.3	石黒・余合
	(2540㎡)	三本松遺跡		940	92.2～92.3	石黒・余合
愛知県警察本部	総合科学センター建設	名古屋城三の丸遺跡	A	1800	91.6～91.8	遠藤・鷲見・余合・岡本・酒井
		(3600㎡)	B	1800	91.9～91.12	遠藤・鷲見・余合・岡本・酒井

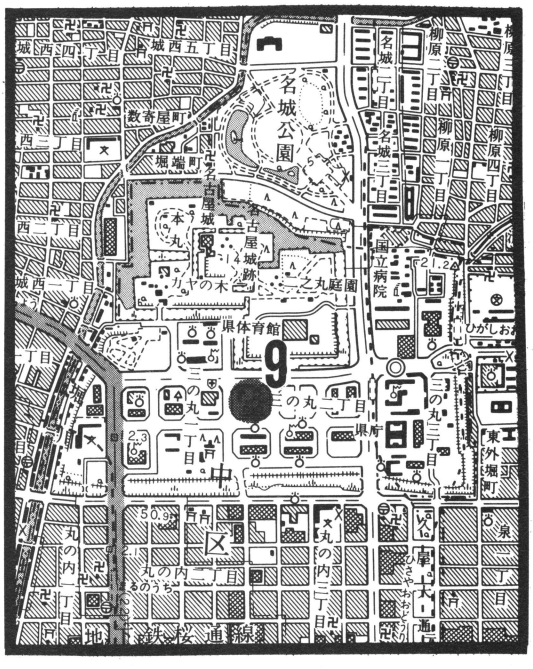
2．報告書

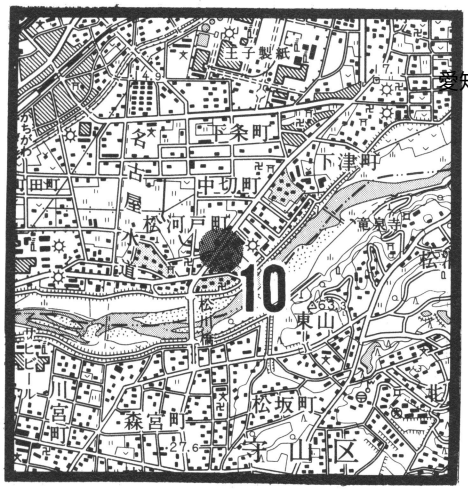
調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	清洲城下町遺跡	17.231㎡	昭和59～昭和60年度
		朝日西遺跡	13.919㎡	昭和58～昭和60年度
		勝川遺跡	6.607㎡	昭和62～平成2年度
		朝日遺跡	49.624㎡	昭和56･60年度～平成元年度
建設省	名古屋家庭簡易裁判所・合同庁舎建設	名古屋城三の丸遺跡	2.800㎡	平成2年度
	23号バイパス	岡島遺跡	19.250㎡	平成元・2年度
愛知県土木部 (道路建設課)	瑞浪大野瀬線	上万場遺跡	4.500㎡	平成2年度
	蒲郡碧南線	東光寺遺跡	10.000㎡	平成元・2年度
	萩原多気線	岩倉城遺跡	10.470㎡	昭和62～平成2年度
	勝川土地区画整理	勝川遺跡	6.375㎡	昭和59～平成2年度
愛知県衛生部	尾張病院改築	山中遺跡	3.500㎡	平成2年度
愛知県民生部	老人ホーム建設	上の平遺跡	3.750㎡	平成2年度
愛知県警察本部	豊橋警察署改築	吉田城遺跡	600㎡	平成2年度
住宅都市整備公団	水野土地区画整理	小田妻古窯跡群	2.000㎡	平成元年度

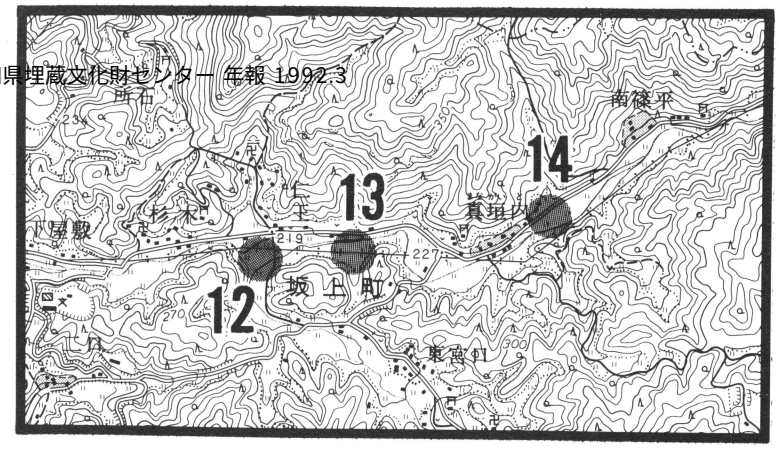


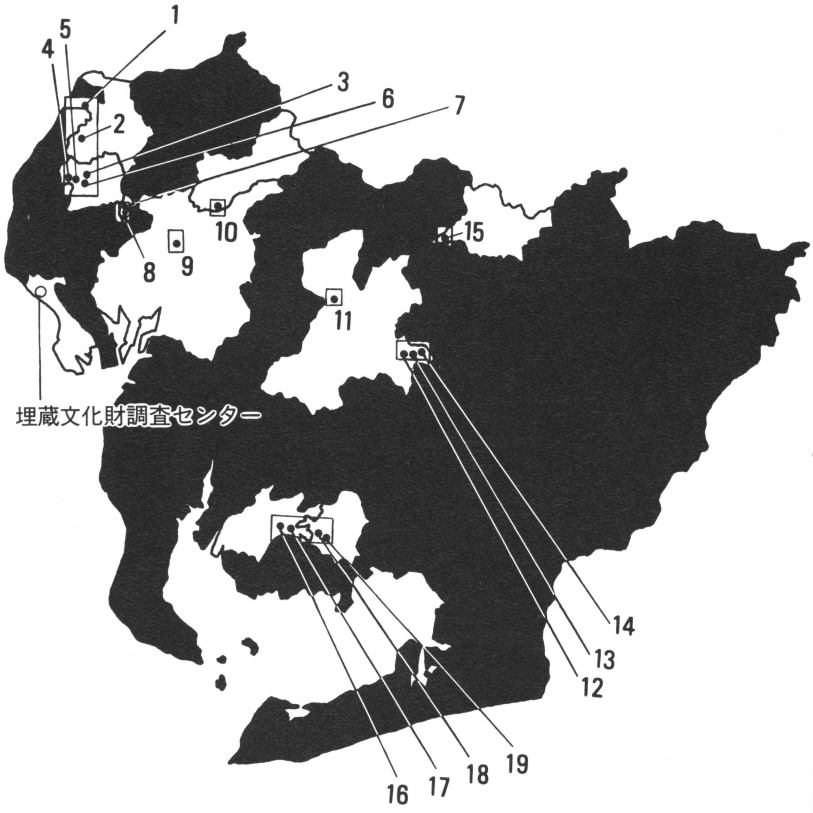


1．西上免遺跡
2．山中遺跡
3．船橋宮裏遺跡
4．跡ノ口遺跡
5．一色長畑遺跡
6．堀之内花ノ木遺跡
7．清洲城下町遺跡
8．外町遺跡
9．名古屋城三の丸遺跡



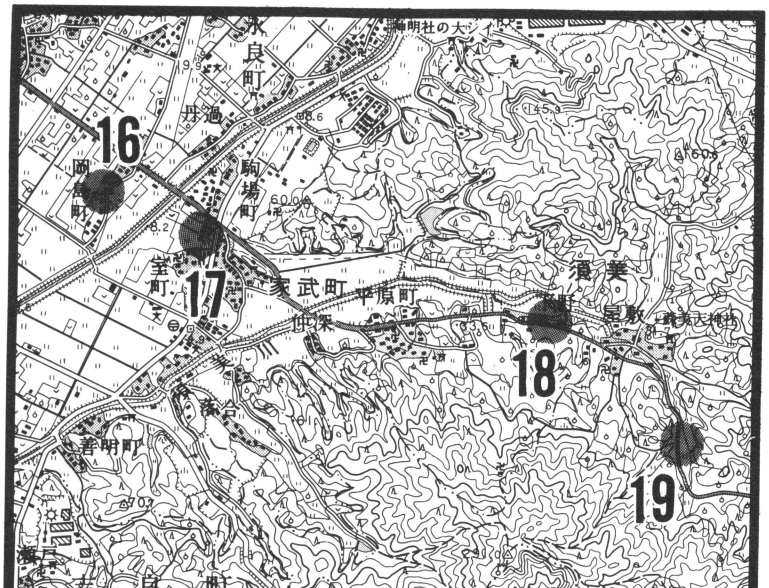








10. 松河戸遺跡
11. 伊保遺跡
12. 三斗目遺跡
13. 三本松遺跡
14. 高樋遺跡
15. 坂口遺跡
16. 岡島遺跡
17. 室遺跡
18. 牛ノ松遺跡
19. 不馬入遺跡

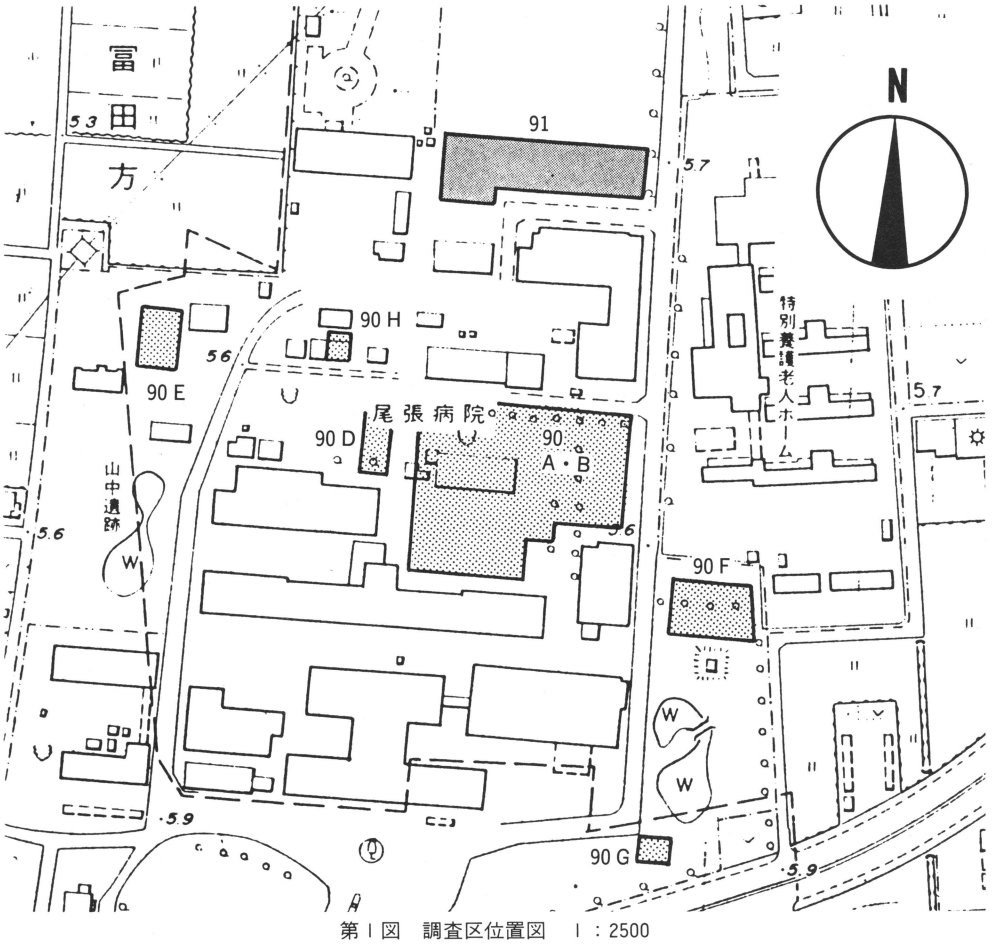




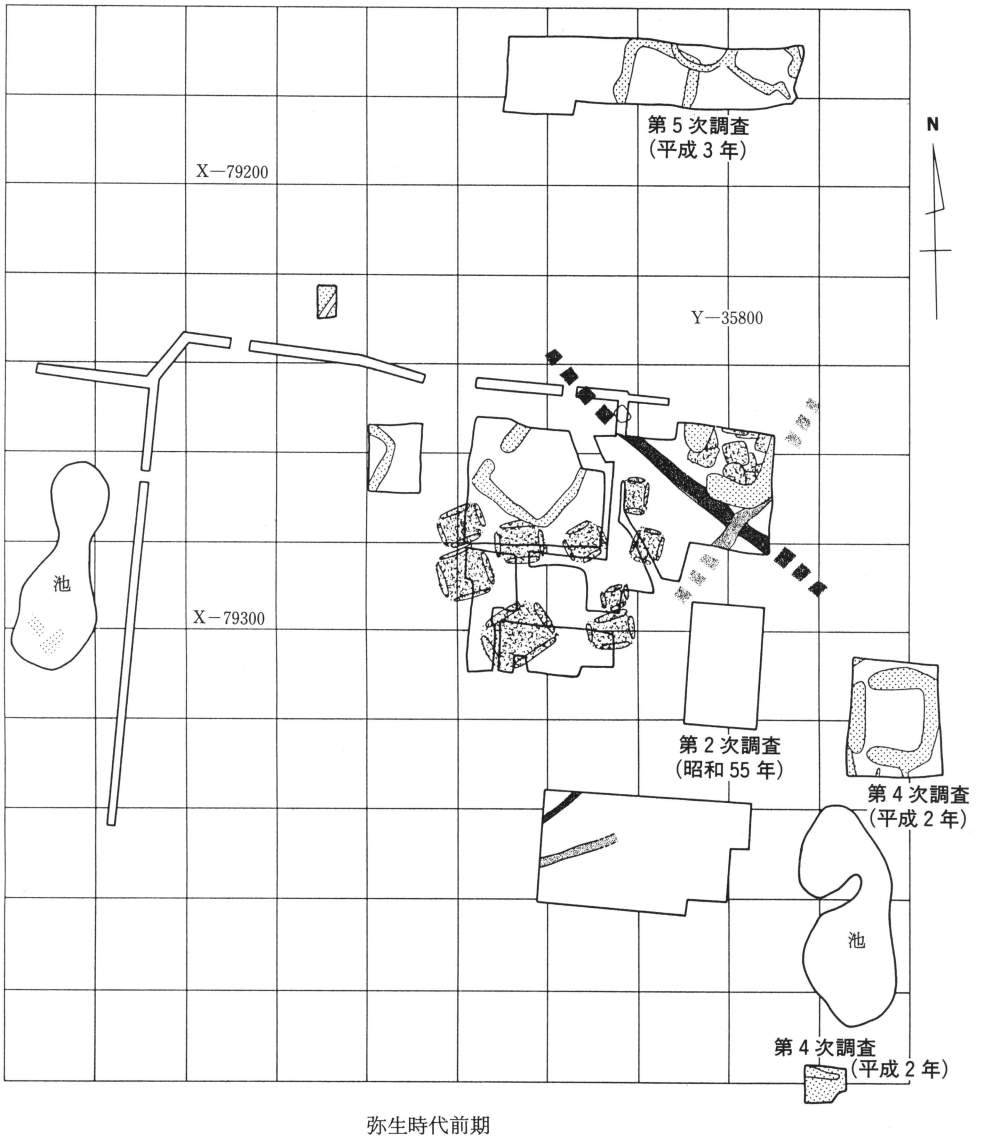
山中（やまなか）遺跡

調査の経過

濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が湧き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできた。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、木曽川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡と、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。なかでも、山中遺跡は弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡る。県立尾張病院建築、改築に伴い昭和34年に第一次調査、昭和55年に第二次調査、続く昭和56年に第三次調査が行われ、縄文時代晩期から弥生時代全般にわたる遺構・遺物が検出されている。



第Ⅰ図　調査区位置図　1：2500


第5次調査
(平成3年)
N
X−79200
Y−35800
池
X−79300
第2次調査
(昭和55年)
第4次調査
(平成2年)
池
第4次調査
(平成2年)
0
40m
弥生時代前期
墓・住居
大溝
弥生時代中期
大溝
弥生時代後期～古墳時代
墓・水田

第2図　主要遺構配置図

昨年度、県立尾張病院の改築に伴い、第四次調査を実施した。調査の結果、竪穴住居・方形周溝墓・水田などをはじめとする縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。特に弥生時代前期にまで遡る方形周溝墓の発見は特筆すべきものである。

今回、県立尾張看護専門学校の増築に伴い第五次の発掘調査実施されることになった。調査面積は1,300㎡である。（小塚俊夫）

調査の概要

本年度の調査では、①弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓３基（うち１基は前方後方形周溝墓）、②古墳時代後期の円墳１基、③古代の溝、④中世村落の北西端と墓域が検出された。このうち、①の「前方後方形周溝墓」（ＳＺ03）の検出が注目される。①ＳＺ03は南溝と北溝の一部を検出した。周溝のつくる平面形は、後方部が東西方向が長い五角形をなし、五角形の頂部1.5ｍを残して周溝は途切れて開口部をつくっている。南北の溝はそれぞれ外側に折れ「ハ」字状に開いて張り出し部（前方部）を形成している。平面形はやや不整形だが、いわゆる「前方後方形周溝墓」に含まれるものと考える。主体部は東辺寄りに１基検出した。供献土器は南溝から壺が大形１個、小形３個出土した。時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と推定される。昨年度の調査でも周溝をつくり替えた古墳時代前期の前方後方形周溝墓が検出されていたが、今回はそれより時期が遡る資料となる。

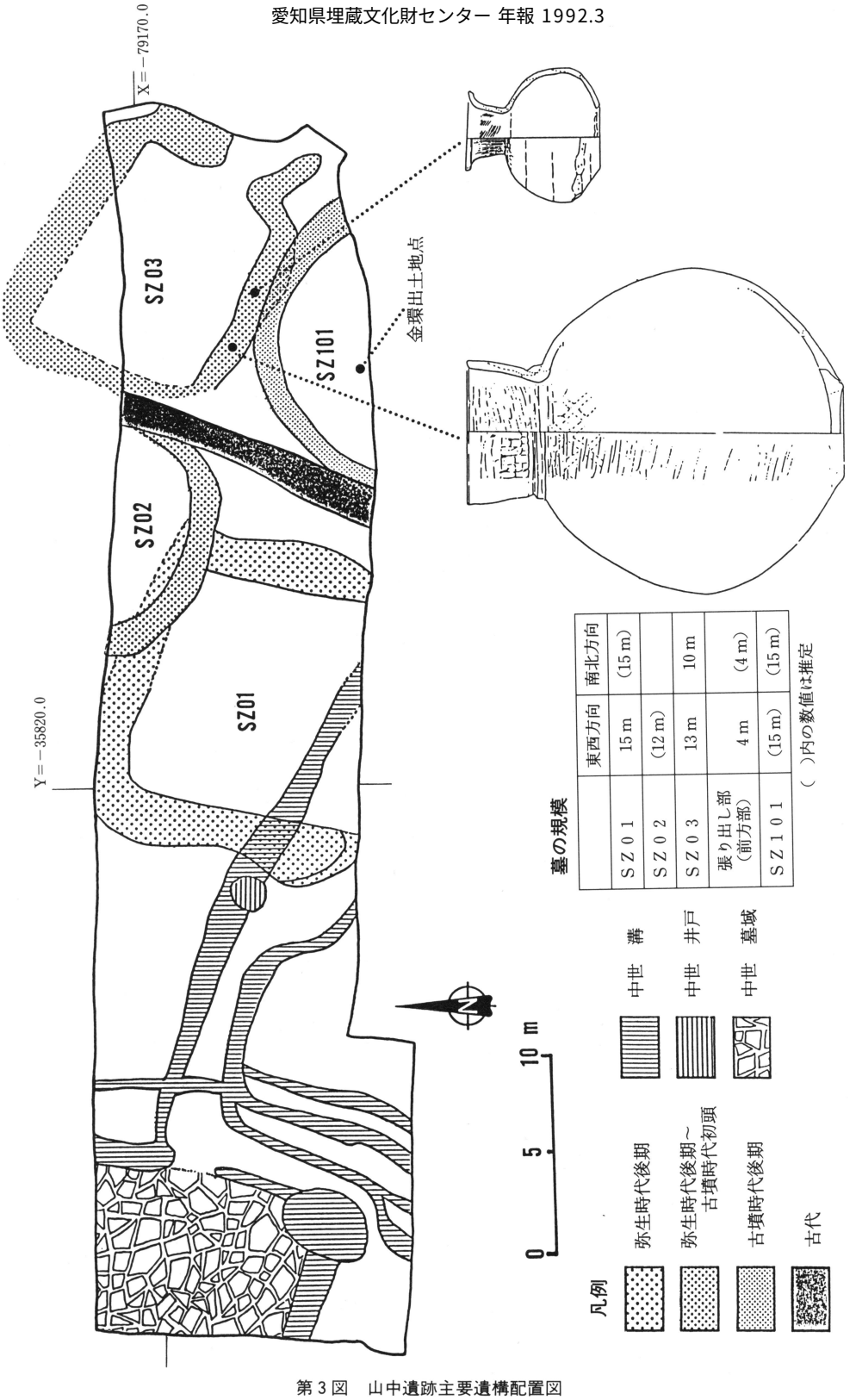
方形周溝墓３基のうち一番古い弥生時代後期中ごろのＳＺ01は調査区内において東西の溝と北溝の一部が検出されたが、南溝は調査区外にある。溝の外縁は膨らむなどして不定形だが、内側は直線的で方形になっている。おそらく南に２ヶ所の土橋をもつと推測される。遺体を葬った主体部は不明。供献土器など遺物はほとんど出土していない。



発掘区東部



ＳＺ03供献土器



第３図　山中遺跡主要遺構配置図

ＳＺ02はＳＺ01の北端の一部に重複して周溝が掘削されている。全体の３分の１程度の検出にとどまった。周溝はゆるく曲線を描きながら巡っており、内側も曲線的でＳＺ01のようにはなっていない。ＳＺ01の周溝がかなり埋没してから溝が掘削されていること、平面形が方形でなく円形に近いことから、時期的には新しくなるものと推測される。周溝からは土器と鉄製品が出土した。

②ＳＺ１01は６世紀代の円墳の周溝部分を検出したものである。昨年度も同時期の須恵器を出土したがその由来は不明であった。今回それが古墳に伴うものであることが判明したとともに、他にもまだ存在している可能性が高いものとなった。遺物としては、直接古墳に伴ってはいなかったが、周溝のつくる円弧の内側（墳丘側）の地山直上から金メッキの耳飾り（金環）が１点出土した。副葬品であったかもしれない。

③古代の溝は９世紀前半に属する。性格は不明。

④中世の遺構としては、調査区西部で検出したア：平行して走る複数の溝、イ：大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝などがある。

ア．鍵状に屈折しながら平行している西に走る溝は通路の側溝と推測される。南側溝は南北方向に平行して走る細い溝を３条分岐させている（うち中央１条は調査区を南北に横断している）が、これらは同時期ではなくつくり替え（拡張）によるものである。そして東西方向の溝にくらべて南北方向の溝の規模が小さいのは、それらが柵の根固めをするための溝であって、おそらく以南が集落内部である。北側溝は北へＬ字状に折れるが、これより以北には畝溝状の部分もあるので耕作地（畠）であった可能性が高い。

イ．大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝は上部が再掘削されて、北へＬ字状に折れる溝が設けられている。この溝は北側溝が北へ折れた部分と軸線を一致させており、アの通路部分では途切れて出入りを行うことができる「区画」をつくっている。溝に堆積した灰色粘土からは完全な形をした皿や骨片、炭などが出土した。骨片は火葬人骨片と推測される。この区画北部には埋土の断面が斑状をなす長方形の土坑が二つあり、これも墓（土坑墓）と考えられることから、Ｌ字状溝より北西の区域は墓域であった可能性が高い。

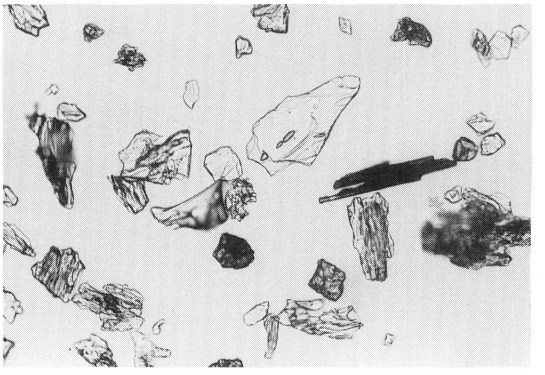
以上、通路を挟んで南北に集落と耕作地、その西に墓地という、村落景観の一端を明らかにしたといえよう。（石黒立人）

山中遺跡の層序

人の生活の場として山中遺跡の形成過程を地質学的な見地から検討するため、トレンチにより地下層序の確認を行った。（第４図）これにより確認できたのは、約5.5m分（＋0.5mまで）の範囲である。地層を構成する砂層、シルト層などの堆積物の堆積環境の解明は今後の研究課題となるが、今回、＋1.07m付近の暗褐色腐植質シルト中より火山灰層が発

見されたので、ここに紹介しておく。

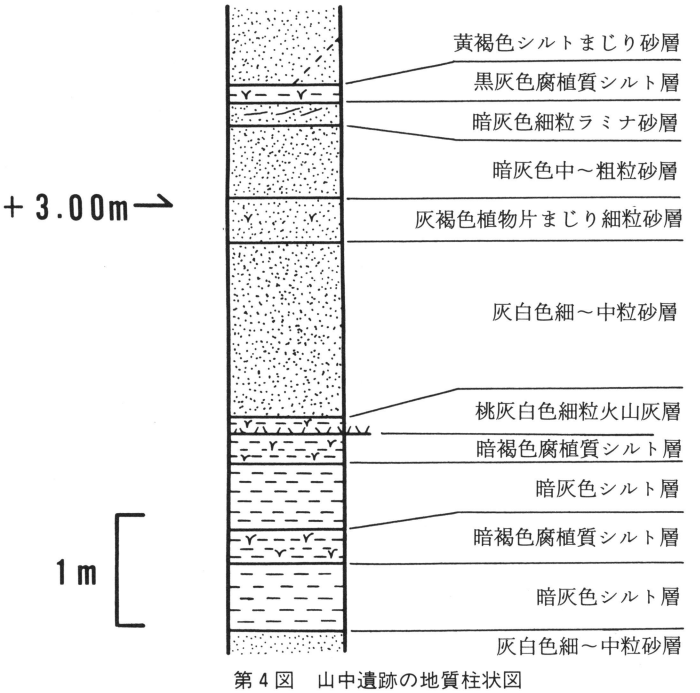
この火山灰層は、厚さ最大1.5cmの桃色がかった灰白色の細粒ガラス質火山灰層で含まれる火山ガラスの形状は、吉川（1976）のTb型が多い。層位的には、森ほか（1990）の松河戸火山灰層（MT）に対比される可能性が極めて高い。松河戸火山灰層（MT）は、三瓶・太平山火山灰層を含む山陰に起源をもつ火山灰層との対比が有力視され、その降灰年代は3120年前、縄文時代後・晩期の境界付近に位置するとされている。これにより、古くから知られている広域テフラの姶良Tn火山灰層（AT）、鬼界アカホヤ火山灰層（K－Ah）などとあわせてより正確な時間軸を設定する鍵層として注目されよう。特に、尾張低湿地での発見は今回が初めてであるが、これを機に、各地での発掘調査、ボーリング調査などの際に確認されれば同一時間軸を使った考古学的考察、地質学的考察に有効な火山灰層となり得よう。（服部俊之）



火山灰の顕微鏡写真（×60）

引用文献

吉川周作1976　大阪層群の火山灰層について．（地質学雑誌82,497-515.）
森　勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣1990　愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について．（『第四紀研究』29,17-23.）



第4図　山中遺跡の地質柱状図

西上免遺跡（にしじょうめん）

調査の経過

西上免遺跡は一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明にかけてひろがる複合遺跡である。現況は標高７ｍの水田および畑地であり、弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されている。昨年度、初めて調査が行われ、古墳時代から鎌倉時代にかけての溝・土壙などの遺構が検出された。今年度も、1992年２～３月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内で実施し、調査区は昨年度調査区の南側を92Ａ区、北側を92Ｂ区と設定し、計1270㎡を調査した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、耕作土層・褐色シルト層・黒褐色粘土層・黄褐色シルト層である。調査区内で確認しえた遺構は、出土遺物により４期に分けて考えることができる。主要遺構は以下のとおりである。

弥生時代中期～古墳時代初頭	溝５条
奈良時代	溝４条・土坑４基
鎌倉時代	溝６条・井戸６基・掘立柱建物２棟
室町時代	土壙31基

今回の調査において、確認できた遺構の性格を上記の時期別に概観すると、弥生時代中期から古墳時代初頭においては、溝を中心とするためその性格は不明の点が多い。しかし、調査区南に展開すると推定される弥生時代の集落との関係でまずはとらえておく必要があろう。奈良時代においては、大溝等の配置からその南に集落が拡がっていた可能性が考えられよう。また、鎌倉時代においては掘立柱建物・井戸の組み合わせにより、数カ所に屋敷地が想定される。そしておおよそ14世紀初頭には終焉し、室町時代においては方形土壙群が配置された墓域となる様子が窺える。

遺物については、南側の91Ａ区からの出土量と北側の91Ｂ区からの出土量には大きな差があり、91Ｂ区が遺跡の北端部であることが推定される。遺物の大部分は灰釉系陶器であり、その他美濃須衛産の須恵器の出土が見られた。また、石鏃が４点、研磨に用いたと思われる軽石３点、縄文晩期の土器片１点も出土している。（太田芳巳）



91 A 区全景

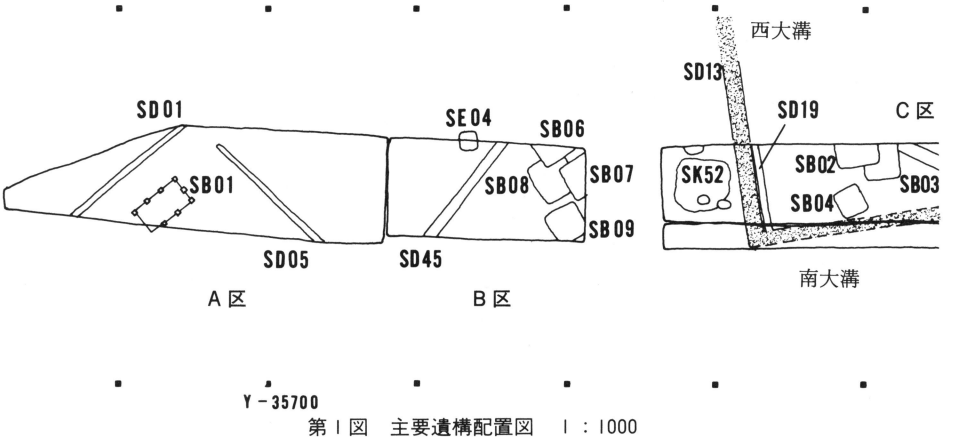
堀之内花ノ木遺跡

調査の経過

堀之内花ノ木遺跡（稲沢市遺跡番号５－４）は木曽川の分流、三宅川が形成した自然堤防の左岸に位置する。行政的には稲沢市堀之内町に在り、「尾張国分寺」の石碑が存在する矢合町の南に隣接する。

遺跡周辺では、昭和36年、中日新聞社が中心となり、愛知県、稲沢市などの協力事業として発掘調査が行われ、尾張国分寺の塔の心礎および金堂とみられる基壇の一部が確認されている。[1] その後、昭和59年に南門推定地を流れる用水路の護岸改修工事にともなって稲沢市教育委員会が発掘調査を行った。[2]

今回、県道名古屋祖父江線の建設にともなう事前調査を、愛知県教育委員会から委託を受け４月より行ってきた。調査面積は7100㎡におよび、東西約450ｍの細長い調査区を西より８つの調査区に分割し、調査を行った。Ａ～Ｃ区を４月から、Ｄ～Ｆ区を８月から、Ｈ区を11月から調査を開始し、１月にすべての調査を終了した。調査の結果、本遺跡は、尾張国分寺関連遺構を中心とし、弥生時代後期から中近世にいたる幅広い時期の複合遺跡であることが確認された。



第１図　主要遺構配置図　１：1000

調査の概要

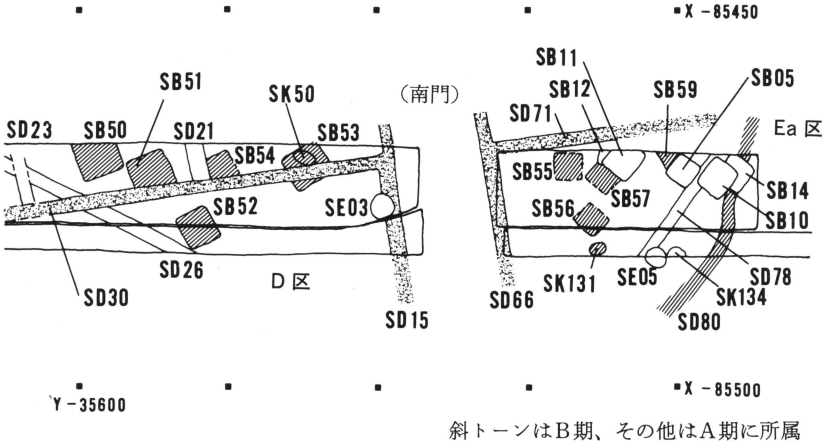
調査区は三宅川左岸の微高地に立地し、標高は約2.5mである。基本層序は、第１層：耕作土、第Ⅱ層：褐～暗褐色シルト層、第Ⅲ層：黄褐色砂およびシルト層である。

遺跡は、出土遺物により、Ａ期：弥生時代後期から古墳時代前期、Ｂ期：奈良から平安時代、Ｃ期：中世、Ｄ期：江戸時代と４期に分けて考えることができる。ここでは、紙面の都合上、Ａ期およびＢ期を述べるのみとする。

Ａ期　この時期の遺構はＣ・Ｄ区の東半部からＥ・Ｆ区の西半部にかけてと、Ｈ区の中央部に見られる。Ｃ・Ｄ区からは弥生時代後期の竪穴住居５棟が検出できた。ことにＳＢ53内の土坑ＳＫ50からは多くの遺物が出土した。Ｅ・Ｆ区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居４棟、溝１条を検出した。Ｈ区からは古墳時代前期の２基の土坑よりパレス壺、Ｓ字甕などの多くの遺物を出土した。

Ｂ期　遺構は調査区全域に散在するが、Ｂ区からＥ・Ｆ区の西部に集中して見られる。Ａ区からは、奈良時代の建物跡と屋敷地を画する溝を検出した。Ｃ・Ｄ区からは幅2.2m長さ約12mの南北方向の溝、幅2.0m長さ約72mの東西方向の溝を検出した、出土遺物、規模からして、尾張国分寺の寺域を画する溝の可能性が高い。その他、土坑、井戸、住居跡等多数の遺構を検出した。Ｅ・Ｆ区からは、竪穴住居４棟の他、溝、土坑、井戸を検出した。

（太田芳巳）

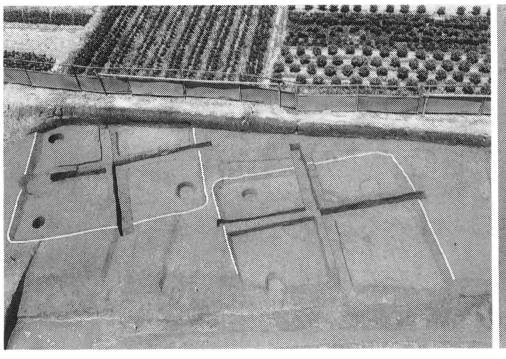


斜トーンはＢ期、その他はＡ期に所属

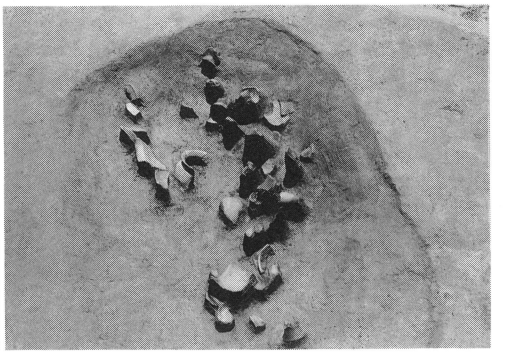
A期（弥生時代後期・古墳時代初頭）

遺構　C・D区東半部からEa・Fa区にかけて、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構を集中して検出することができた。これらの遺構が広がる地点は、堀之内花ノ木遺跡が所在する微高地西端に位置することから、さらに西低地部を耕地として取り込んだ、一つの単発的な小集落を想定できよう。またその関連では南側に所在する琵琶戸遺跡も考慮に入れる必要がある。さて今回検出できた主要遺構は、竪穴住居9棟。土坑及び土器集積が3ヶ所であった。出土土器から山中式後期[3]をもって集落が開始され、廻間Ⅰ式前半期をもって集落は消失したと推測でき、その中心はおおよそ山中式後期にあり、その段階でほとんどの住居が築かれているようである。ところで竪穴住居は全て方形プランをもち、SB50・51は検出面で約方5mを測る。SB52（廻間Ⅰ式1段階）は4.5×4mで、四隅に主柱穴（西南は攪乱）を確認し、中央やや南よりに土坑が存在する。また全体に炭化物の堆積が認められ、土器の集積が伴なっていた。Ea区の展開する住居は古代・中世の遺構との重複が著しく、形態の把握ができない。SK131は皿状の土坑で、SD80は幅1m深さ約0.4mの溝である。なおこの溝を境に、その東には住居は存在しない。SX03はSD80よりさらに45mほど東に位置する土器集積で、周囲には数基の土坑が営まれていた。SK50はSB53内に掘削された楕円形状の土坑で、2.2m×1.3m、深さ0.35mを測る。土坑内より一括して土器が出土している。

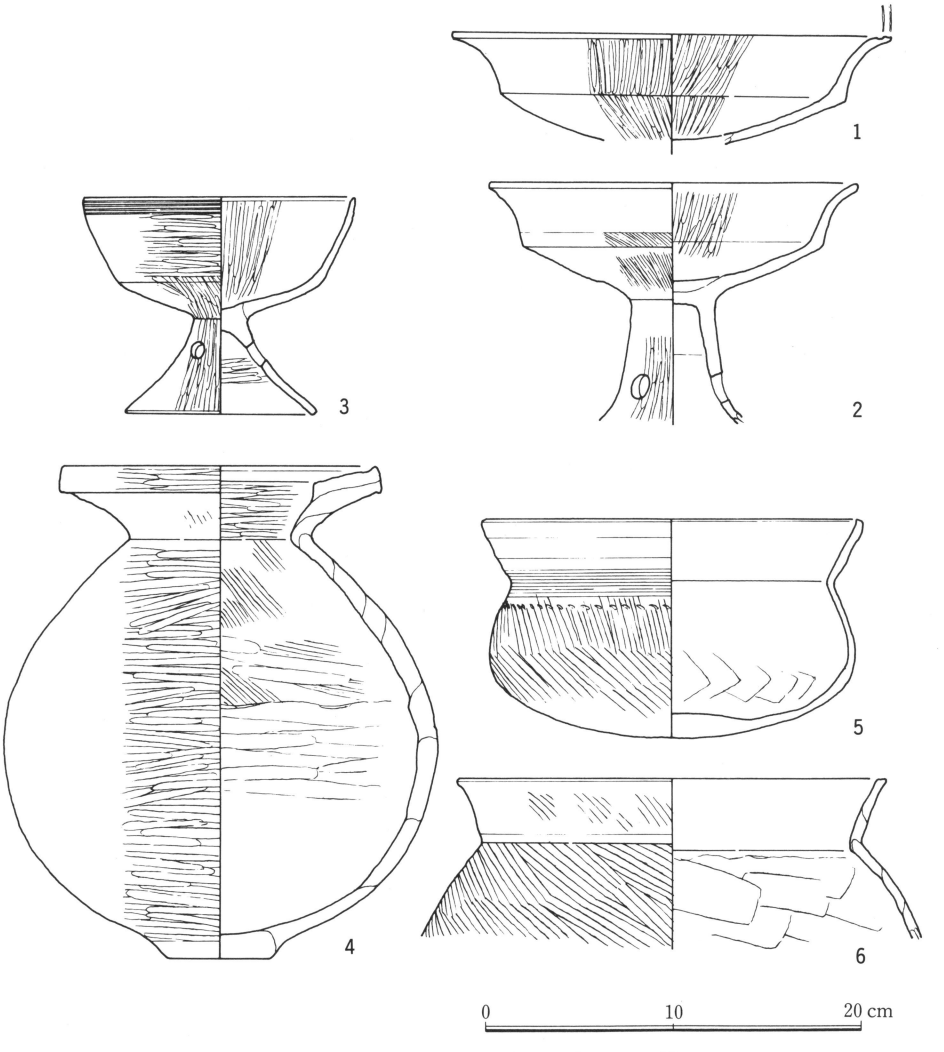
遺物　第3図はSK50出土土器。7は受口系甕で、口縁外面に刺突文、体部上位に横線文とやや不揃いながら刺突文を施す。8・9は口縁端部に刺突文を施す台付甕。12・13・14は有段高杯で、12・13は杯部外面上位に波状文が見られ、口縁端部には2条の擬凹線が巡る。14はミガキ調整による高杯。15は鉢で、口縁部には有段の痕跡を残す。16はパレス壺の口頸部で、内面文様帯以外は全面ベンガラ塗布。17～20は中・小型壺。その内19・20は、土坑最下部より出土した。これらの資料は一宮市苗代第Ⅱ地点出土土器のものと類似するも、やや新しい様相を留めるものといえよう。山中式4段階の良好な一括資料である。第4図はSB52出土土器で、その内注目される資料としては、25のS字甕であろう。その形状と調整技法からS字甕0類と考えてよく、21・22の受口系甕や26・27の台付甕との共伴が興味深い。23は鉢の口頸部。34・35は器台の大・小で、35は中空形態を留める。これらの資料は廻間遺跡SB75と類似するも、さらにやや古い様相を留め、廻間Ⅰ式1段階古相の良好な資料と考えられる。第2図3～6はSX03出土土器であり、3の資料は有稜高杯、5は有段が省略され長頸化した鉢。4は口縁内面に平坦面をもつが文様は施されていない。こうした資料は廻間Ⅰ式1段階に所属する資料である。　（赤塚次郎）



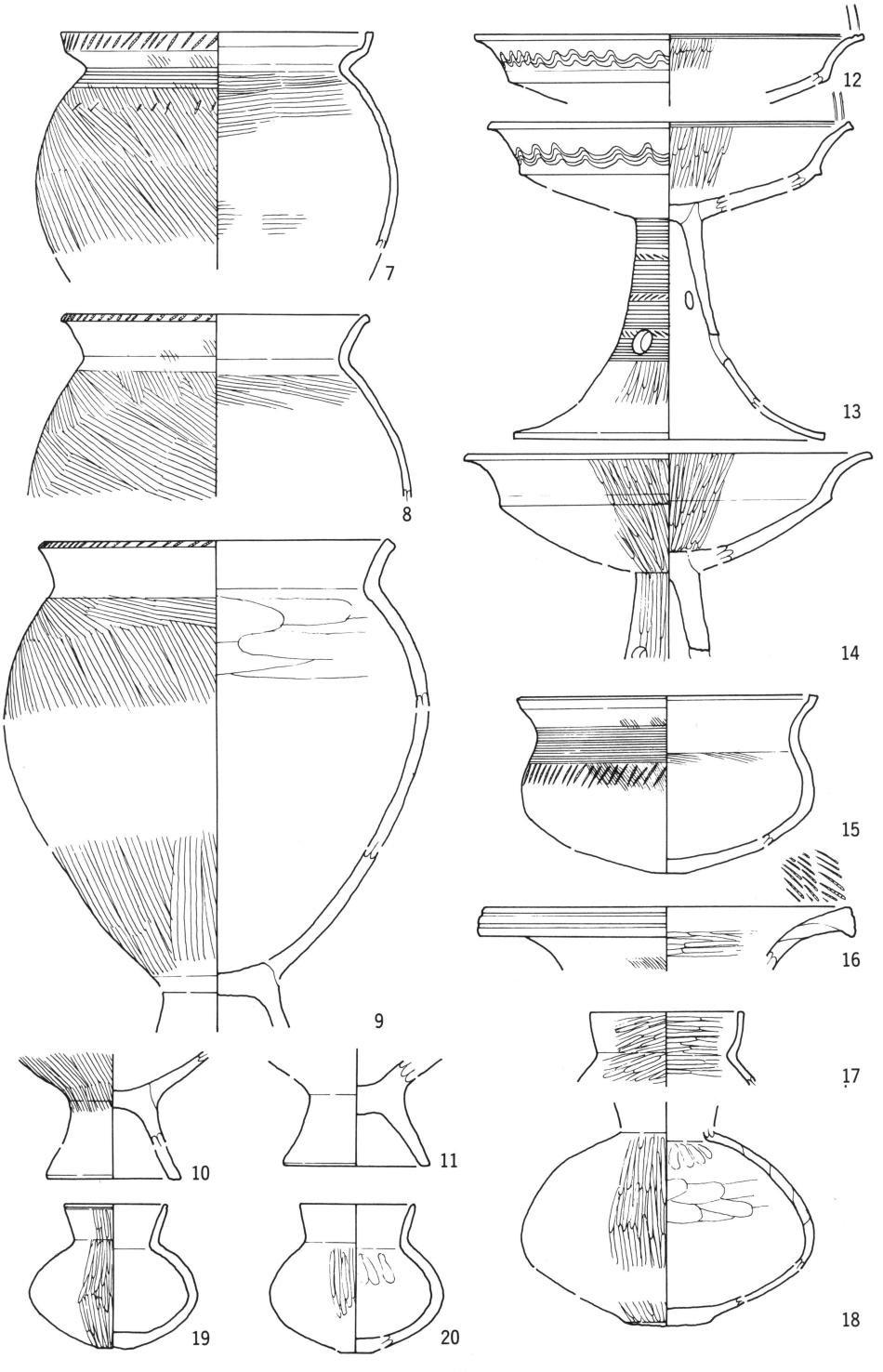
S B50・51



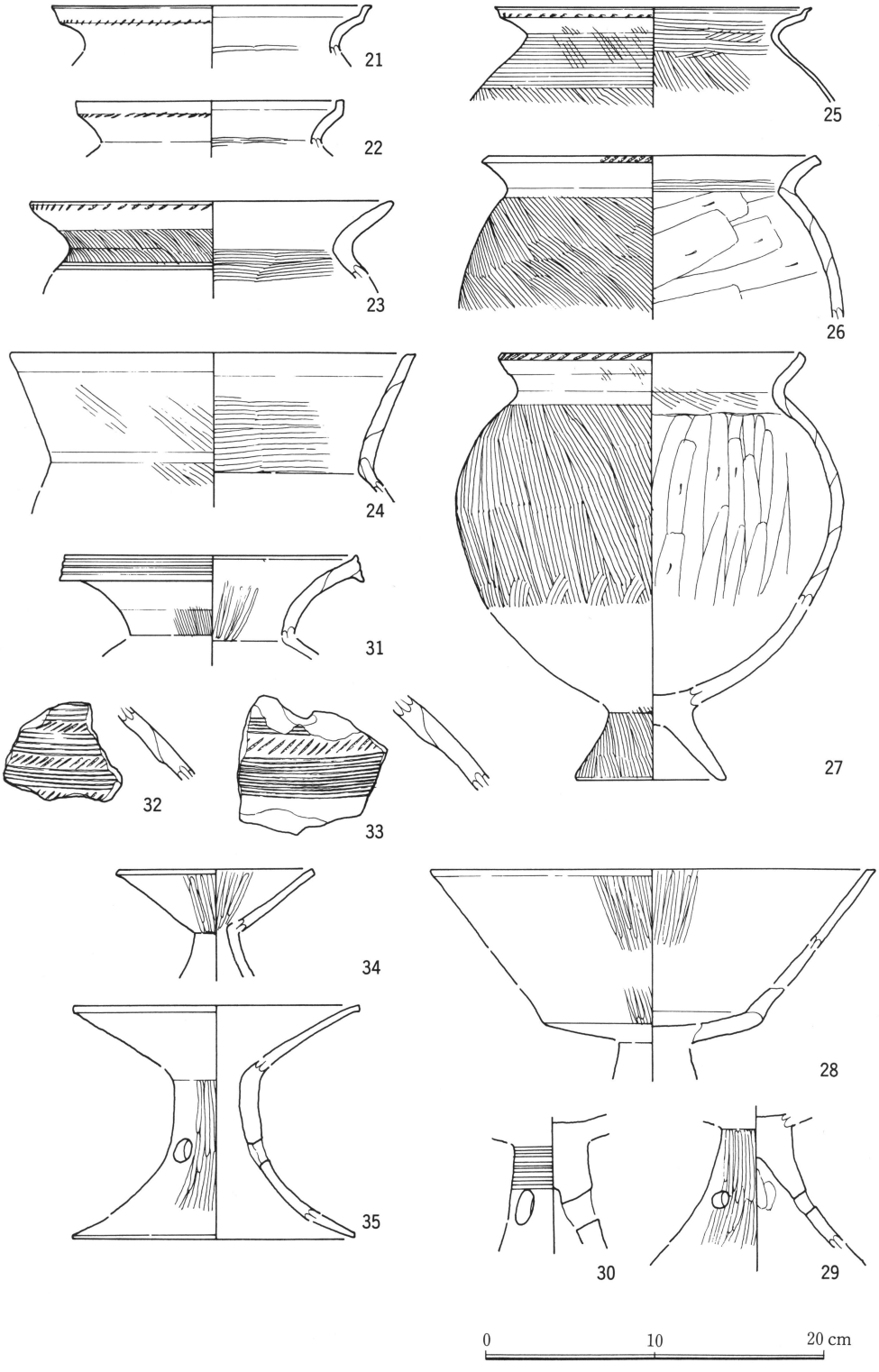
S K50



第2図　S B54（1・2）　S X03（3～6）出土土器　1：4



第3図　ＳＫ50出土土器　Ｉ：４



第4図　ＳＢ52出土土器　Ⅰ：4

Ｂ期（奈良・平安時代）

遺構　今回検出し得た主要遺構は、掘立柱建物１棟、竪穴住居11棟、溝13条、井戸３基、土坑２基などである。Ｃ・Ｄ区西端で検出されたＳＤ13は須恵器を中心とした遺物を出土し、幅2.2～2.3m、深さ0.7～0.8mを測る。Ｃ区で検出されたＳＤ30は須恵器に加え多くの灰釉陶器を出土し、幅1.5～2.0m、深さ0.4～0.47mを測る。この２条の溝はその交わる部分に中世の溝が重複していたが、ほぼ直交するものと思われる。ＳＤ30はＣ区東端でＳＤ15と直交する。ＳＤ15は須恵器、灰釉陶器を出土し、幅2.1m、深さ0.36mを測る。またＳＥ03はＳＤ15が廃絶した後に掘削された井戸である。径2.99mの掘形、深さ1.04mを測り内部にほぼ正方形（0.81m×0.82m）の横板組木枠と径0.5mの曲物１段が確認され、木枠の裏込めとして尾張国分寺使用瓦が集積されていた。なおＡ・Ｂ区、Ｃ区西端で検出された住居群（ＳＢ01～04・06～09）、井戸（ＳＥ04）、溝（ＳＤ01・05・45・26）は８世紀前半に所属し、Ｅａ区東端の住居群（ＳＢ05・10～12・14）は９世紀後半に所属する。

遺物　ＳＤ13中層より良好な須恵器の一括遺物が得られた（第６図１～13）。１は風字硯で上部が欠損している。２は盤の脚部で透孔を有する。３・４は高台を有する杯。５は高台を有する椀。６・７は高台を有する盤。８は杯蓋。９・10・11は高台を有しない杯で、底部から腰にかけて回転ヘラ削りが施される。12・13は無高台の椀で、底部は糸切り痕がそのまま残されている。以上のような様相からこれらの遺物は猿投窯編年における折戸10号窯式を中心とする時期に所属するものと思われる。またＳＥ03出土の遺物（第６図15～27）は15の土師器甕、24の須恵器杯を除いて全て灰釉陶器である。16は耳皿で底部に糸切り痕を残す。17・18は長頸壺。19は段皿。23は杯蓋。20・21・22・25・26・27はいわゆる三日月高台を有する椀で、20～22は内面体部に灰釉が刷毛塗りされている。以上のような様相からこれらの遺物は、猿投窯編年における黒笹90号窯式に属すると思われる。なお14は猿形陶製品で、底部は本体から離脱した痕跡を残しているが全体の形状や用途については不明である。軒瓦（第７図１～13）については、１～５がＳＤ13出土、６・７がＳＤ30出土、８～11がＳＥ03出土、12・13がＳＤ45出土である。尾張国分寺出土瓦の型式に当てはめれば[4]、１がＭⅢ、２・13がＭⅤ、３・４・５がＨⅡ－Ｂ、６がＨⅡ－Ｃ、７がＨⅡ－Ａ、８がＨⅧ、９がＨⅥ、10がＨⅣ、11がＨⅢ－Ａ、12がＨⅡ－Ｂである。なお現在のところ１と３・４・５が創建瓦と考えられており、７については平城宮6712Ｄ型式と同笵である可能性が高い[5]。

以上のような遺構、遺物の状況からＳＤ13はＳＤ30とともに尾張国分寺の寺域を区画する大溝であると考えられ、ＳＤ15の東側に「南門」の存在を想定できる。またＳＥ03は尾張国分寺廃絶後に掘削された井戸であり、『日本紀略』に見られる884年の尾張国分寺焼失

記事と整合する可能性が高い。

まとめ

今回の調査成果をまとめておくと以下の２点になる。

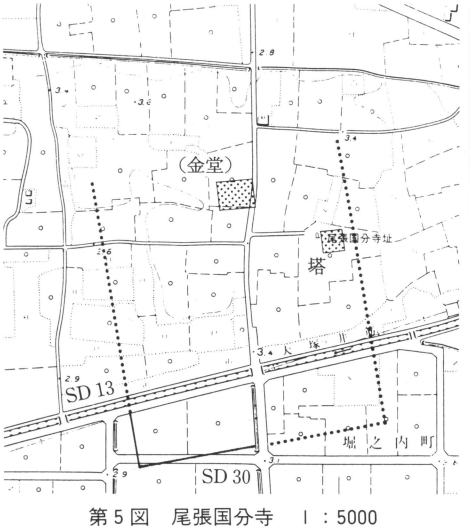
１．Ｃ・Ｄ・Ｅａ・Ｆａ区から山中式後半期を中心とする竪穴住居を検出した。

２．尾張国分寺の寺域を区画すると考えられる溝ＳＤ13・ＳＤ30は昭和36年に調査された「塔」跡や「金堂」跡の中軸線の方向と概ね一致する。また想定される寺域の東西規模は約166ｍとなり、従来考えられていた寺域よりも東西幅がやや短く、南北幅が大きく拡大する可能性が高くなった。（第５図参照）　　（蟹江吉弘）

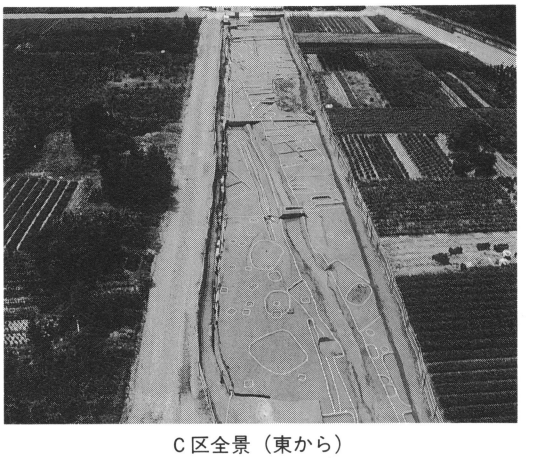
註

１）浅野　清編1968『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会
２）日野幸治他1983『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』稲沢市文化財調査報告ＸⅨ
３）赤塚　次郎1992「山中式土器」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第40集
４）註１に同じ。
５）梶山　勝　1991「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要』第14巻

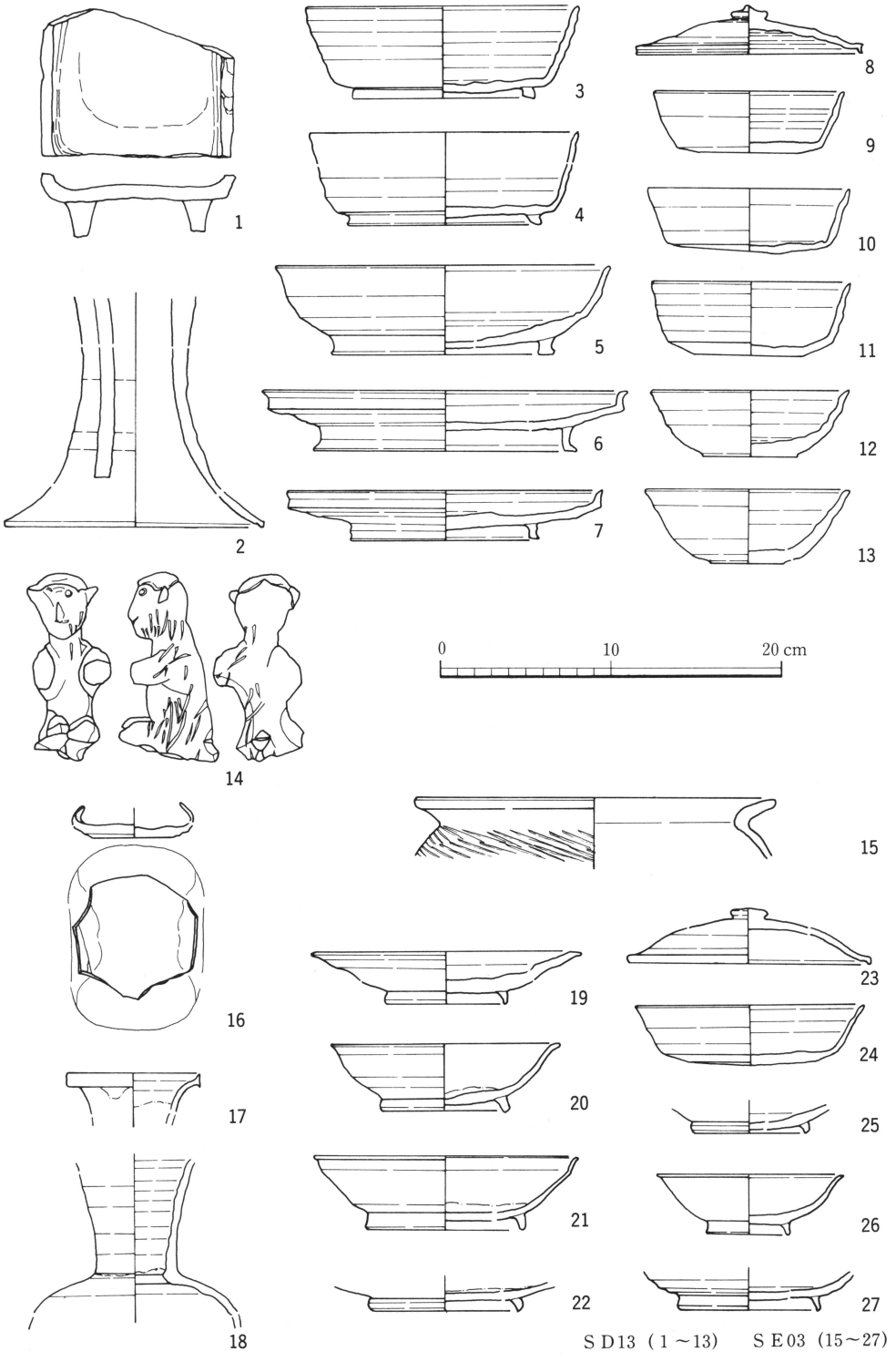
なお、調査の過程において楢崎彰一、大参義一、梶山　勝、斎藤孝正の各氏には有益な御教示を頂いた。文末ではあるが謝意を表する次第である。



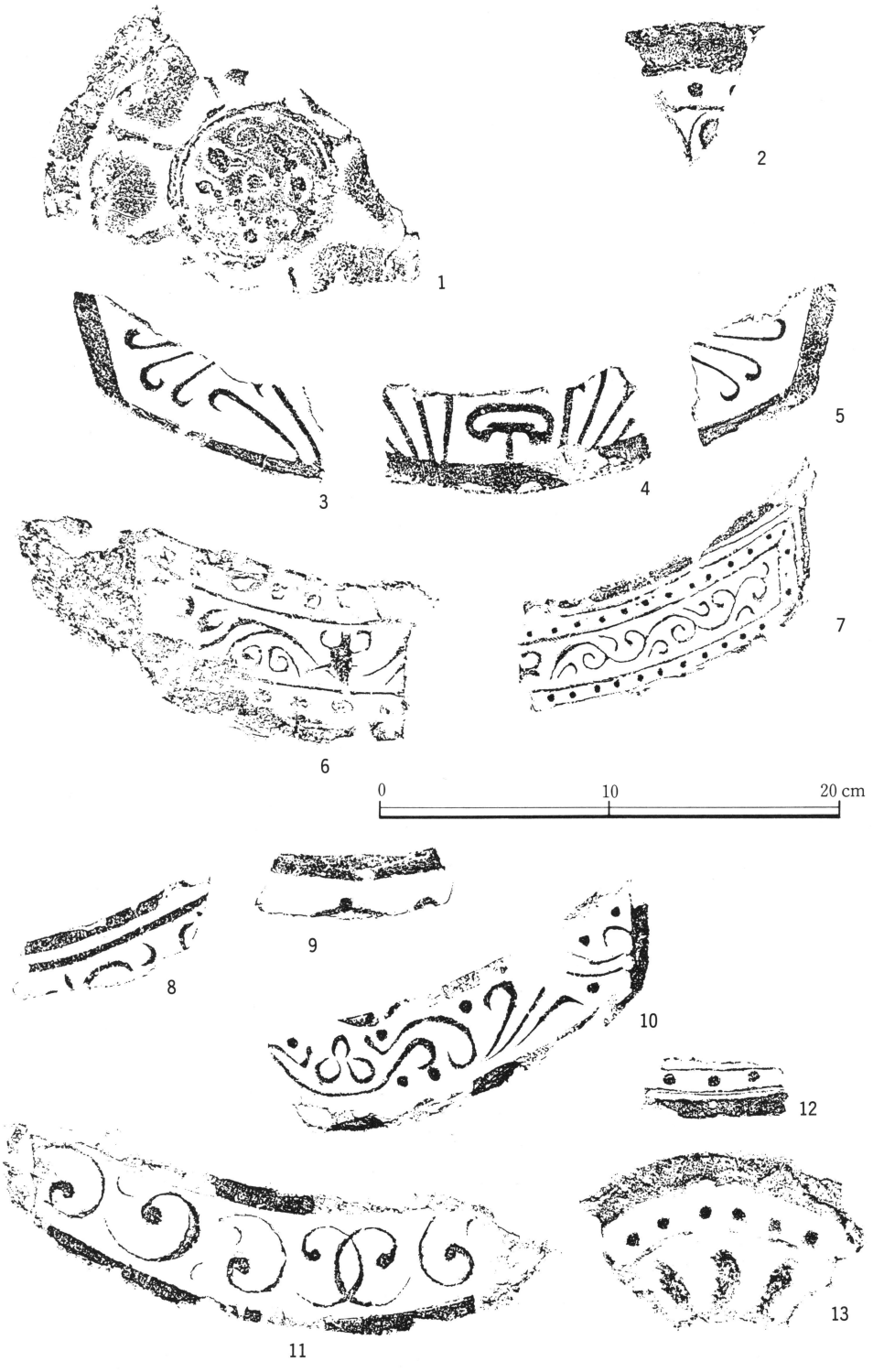
第５図　尾張国分寺　１：5000



Ｃ区全景（東から）



第6図　B期の遺物　1：4（ただし14は1：2）



第7図　軒瓦　1：3　　SD13（1～5）　SD30（6・7）
SE03（8～11）　SD45（12・13）

船橋宮裏遺跡（ふなはしみやうら）

調査の経過

船橋宮裏遺跡は稲沢市船橋町花の木・宮裏・市場にかけてひろがる遺跡であり、現状は標高３ｍの水田及び畑地である。遺跡の東側は「重本横地遺跡」が所在する微高地に連続している。また南には三宅川をはさんで「矢合城跡」が所在する。船橋宮裏遺跡は古代から中世の遺物散布地として稲沢市遺跡番号4－54として登録されているが、しかし本格的な調査は今回がはじめてである。調査は1991年11月～1992年１月にかけて県道稲沢祖父江線建設予定地内において実施した。調査面積は1600㎡であるが、工程の都合上Ａ・Ｂの調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、大きく３層からなる。第Ⅰ層は耕作土。第Ⅱ層は褐色シルトで、遺物を包含する。第Ⅲ層は黄褐色砂質シルトである。しかし、水田耕作地では第Ⅱ層の褐色シルトが削平されている。調査で確認された遺構・遺物は、そのほとんどが14世紀後半から15世紀前半のものであった。以下、今回の調査の中心となったＡ区の概要を述べる。

Ａ区は、調査区全域にわたって土壙群が点在しており、その分布は数基単位で一つのまとまりが存在する。調査区東半の土壙群は主軸を南北方向に置き、東西２群のまとまりをもつ。調査区西半の土壙群は東西に主軸を置いたもので、やはり２群のまとまりが存在する。これらの土壙はそのほとんどが隅丸長方形であるが、円形プランをもつものも数基確認され注目される。いずれの土壙も出土遺物をほとんど確認できなかったが、ただ１基のみ頸部を欠損した古瀬戸の壺を伴出している。この壺はほぼ直立状態で検出され、副葬品の可能性が高い。土壙の埋土は、層位堆積をもたず、若干の土質の差異は認められるもののいずれも斑土が充塡されていた。これは、人為的埋め戻し作業を想定させるものである。

土壙以外の遺構として溝数条、井戸２基、大型土壙１基、火葬施設５基等を検出した。溝のうち調査区中央付近の１条は、コの字状に屈曲して掘削されており、特定の原則に基づいて土壙群を区画したものと考えられる。調査区南東の大型土壙は、他の土壙に比べ楕円形でしかも長大で、長軸8.56ｍ、短軸3.20ｍ、深さ1.12ｍを測り層位堆積を有する。火葬施設は、長軸90㎝、短軸60㎝、深さ20㎝程度の小型のもので、骨片、炭化物、焼土で埋まっていた。この性格等については今後の課題である。以上の諸点から、この地は、14世紀後半から15世紀前半にかけて、近接する集落の墓域として存在したと考えられる。

（小塚俊夫）



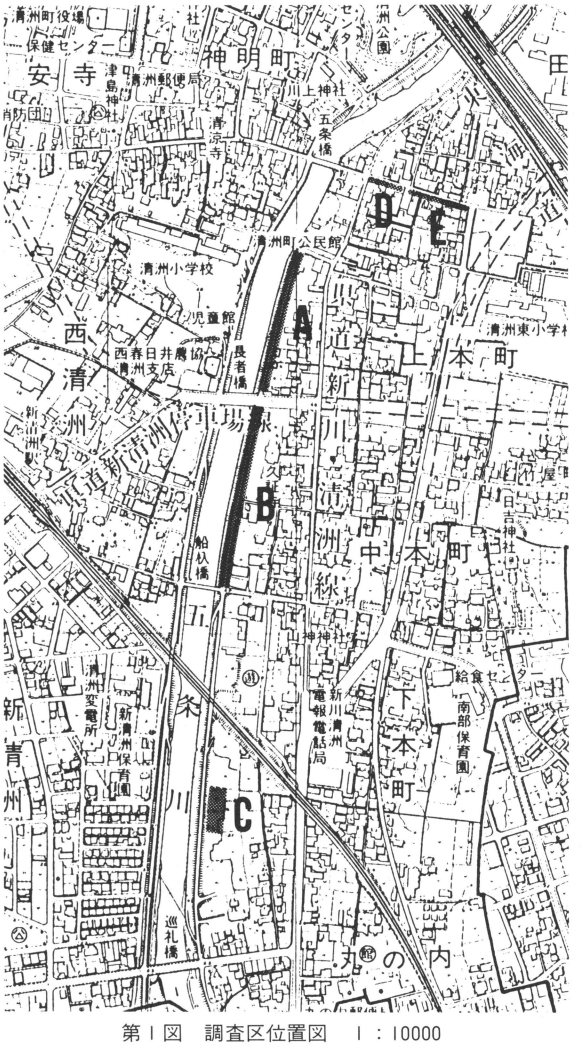
91 A 区全景

清洲城下町遺跡

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の中央を南流する木曽川水系五条川の中流域に形成された自然堤防及び後背湿地上に展開する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は、昭和57年に名古屋環状２号線関連調査として開始されて以来、既に10年を経ようとしている。今年度は五条川改修関連調査（Ａ～Ｃ）4820㎡、県道新川・清洲線関連調査（Ｄ・Ｅ）847㎡の合計5667㎡について実施した。

五条川改修関連調査は、調査開始以来６年目を迎えるが、今年度は昨年度から着手した現堤防下の調査が本格化し、築堤以前の様相がかなり明らかとなった。遺構は、近世宿場町、清洲城下町前・後期の３時期に認められ、Ａ・Ｂ区では近世の溝や畑地、城下町後期の礎石建物などが検出された。また、Ｃ区では城下町外縁部の様相を垣間見ることができた。



第１図　調査区位置図　１：10000

一方、５年目を迎える県道新川・清洲線関連調査では、昨年同様、前述の３時期に加え奈良～室町時代の遺構・遺物が確認された。調査区が長狭なため、遺構の全形を確認することはできなかったものの、城下町期の礎石建物や奈良～室町時代の竪穴住居などが検出された。また、城下町期の焼土面や地震による断層・噴砂も確認されるなど、五条川東岸部の様相解明に向けて、数多くの知見を加えることとなった。　　（金子健一）

五条川河川改修関連（A・B・C区）

本年度の調査のうち、A区とC区について調査区ごとに概要を述べる。

A区　A区は清須城中堀の直ぐ南に位置し、現在の堤防下の部分を調査した。基本層序は、上位からⅠ層：表土、Ⅱ層：1794年の瀬違えに伴う堤防本体の砂層、Ⅲ層：清須城廃城以降の盛土層、Ⅳ層：天正地震による噴砂層、Ⅴ層：城下町期前期の包含層（このなかには幾度かの洪水による堆積層が確認される）、Ⅵ層：ベースであるシルト層と堆積する。調査は、Ⅲ層（盛土層）の上面で宿場町期前期、Ⅳ層（噴砂層）の前後で城下町期後期および城下町期前期の後葉、Ⅵ層（ベース）で城下町期前期の遺構群をそれぞれ確認した。ここでは、城下町期後期・宿場町期前期の2時期について記述する。

城下町期後期の遺構としては、礎石建物、配石遺構、溝、井戸、廃棄土坑などがある。礎石建物は調査区のほぼ全域で確認され、空白地には廃棄土坑が掘削されている。礎石建物の中には、柱間がおよそ60cmの3間×5間の総柱建物が1棟存在し、付近の廃棄土坑から狛犬が出土したことからこれは祠跡と推定できる。また、これまでの調査例で検出したような屋敷割りの溝・堀・柵列は明確に確認できなかった。この地点の性格は現在検討中の課題である。

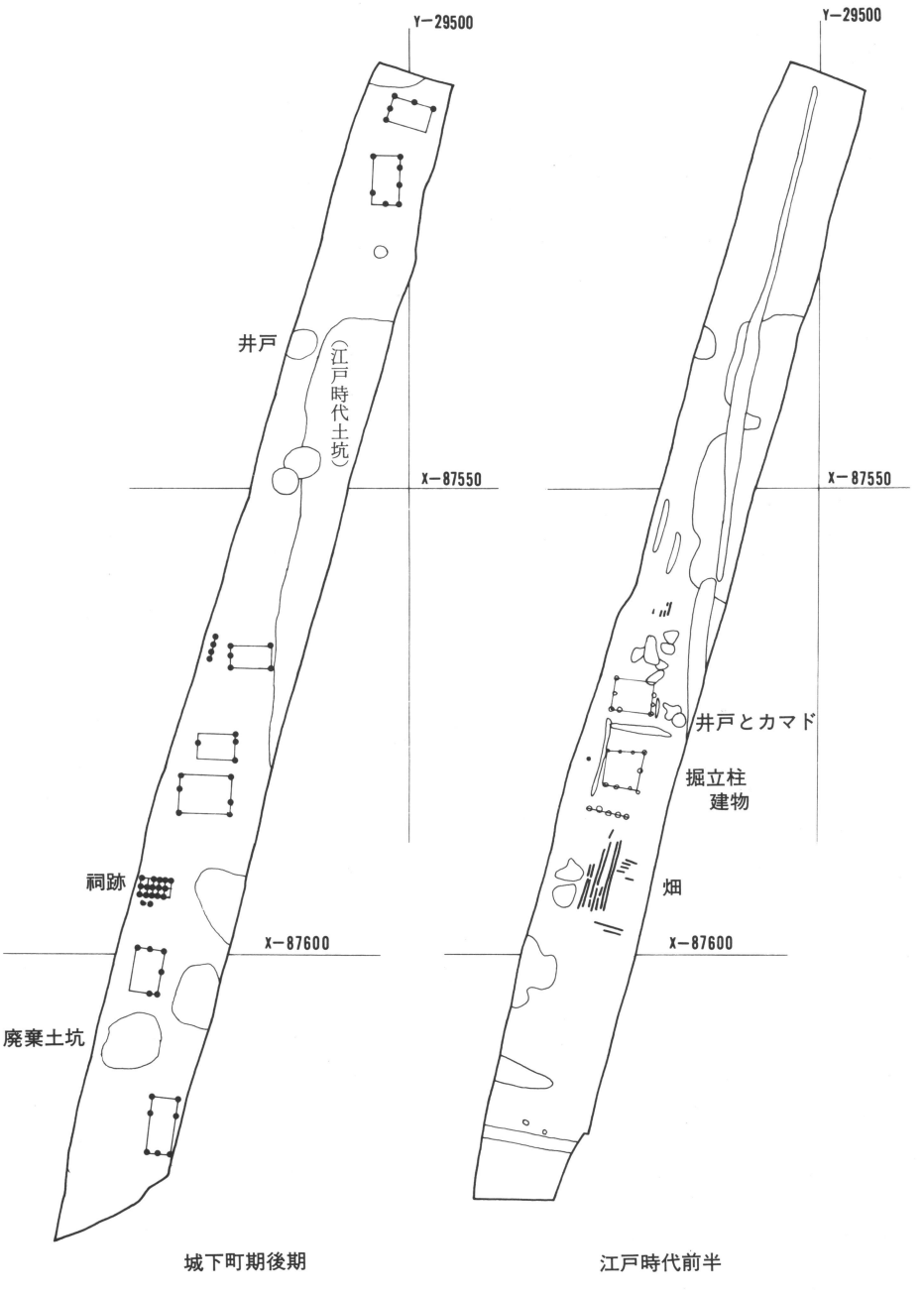
宿場町期前期の遺構には、掘立柱建物、溝、井戸、畝状遺構、廃棄土坑などがある。区画を現す溝は、現流路にほぼ平行する方位とほぼ南北に走る方位の2者に分けられるが、これらは道路の側溝の可能性が考えられる。また、この区画溝に直交する形の区画溝・柵列も存在し、これらの境界で区分された区画には、掘立柱建物・井戸・廃棄土坑が配置される区画と畝状遺構が展開する区画の2種類が認められる。遺構の在り方から短冊型地割を形成していたと想定できる。また、最大長が30mを越える不定形の巨大な廃棄土坑も確認でき、この中から18世紀後半の遺物や礫などが出土している。性格は不明。



A区全景



A区宿場町期の屋敷


Y−29500
井戸
（江戸時代土坑）
X−87550
祠跡
X−87600
廃棄土坑
城下町期後期
Y−29500
X−87550
井戸とカマド
掘立柱
建物
畑
X−87600
江戸時代前半

第２図　Ａ区遺構図

C区

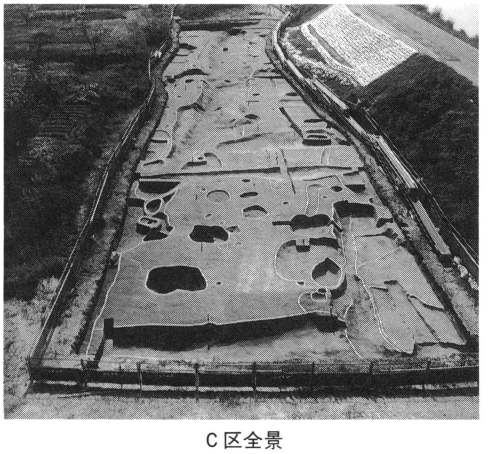
調査区は清須城本丸跡から約1.5km南に位置し、城下町の南端部に該当する。遺構は城下町期後期と鎌倉時代のものがある。

城下町期後期の遺構は井戸、溝、廃棄土坑、ピットなどがある。溝は東西方向に走るものが2条（SD01、SD02）存在し、その間隔は14mを計る。また、これに直行する溝も一条検出されており、この3本の溝で囲まれた区画が認められる。この区画の内部には、柱穴と思われるピットが数基、中央部に井戸が2基、区画溝に隣接した場所に廃棄土坑などが配置されている。この区画はこれまで調査した地点と合わせて考えると、東西方向に長い短冊型地割の屋敷地の一部分であると言えよう。

東西方向に走る溝SD01の南は、不定形の土坑などがみられる。この土坑からは円礫、陶磁器などのほかに骨片が出土している。特に、SK22では、散在する径20cm程度の円礫の直下から骨片が発見されている。骨片は白色で非常に細かい破片となっており、焼骨の可能性も考えられよう。この部分では、井戸や建物など生活の痕跡を示す遺構が無いことも考え合わせると、墓域となっていた可能性が高い。

鎌倉時代の遺構は幅5mの溝が1条存在するのみである。平面形は直線的ではなくやや不定形で、南から北に向かって水が流れるように傾斜している。最下層から12世紀中頃の灰釉系陶器の椀が出土しており、この段階に掘削されたものと考えられる。またこの溝の埋土上に天正地震の噴砂が堆積しており、16世紀には埋積したものであろう。中世における開発に伴う用水路という性格が想定できよう。

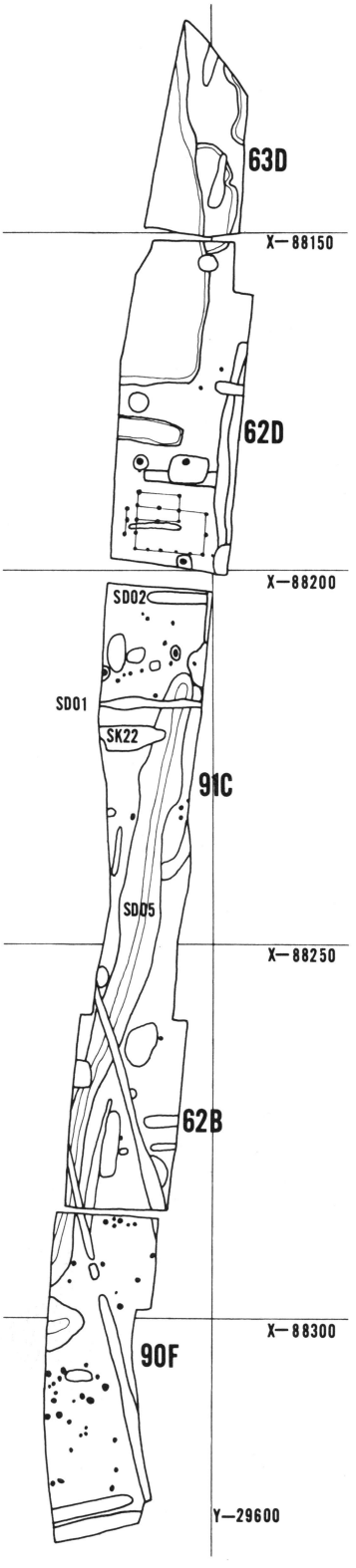
出土遺物は、城下町期後期に位置付けられるものが大半を占める。1は天目茶椀、2は長石釉の皿、3は内面に同心円文の入った無釉の皿、4は染付の皿、5・6は向付、7・8は土師器の鍋、9は擂鉢である。



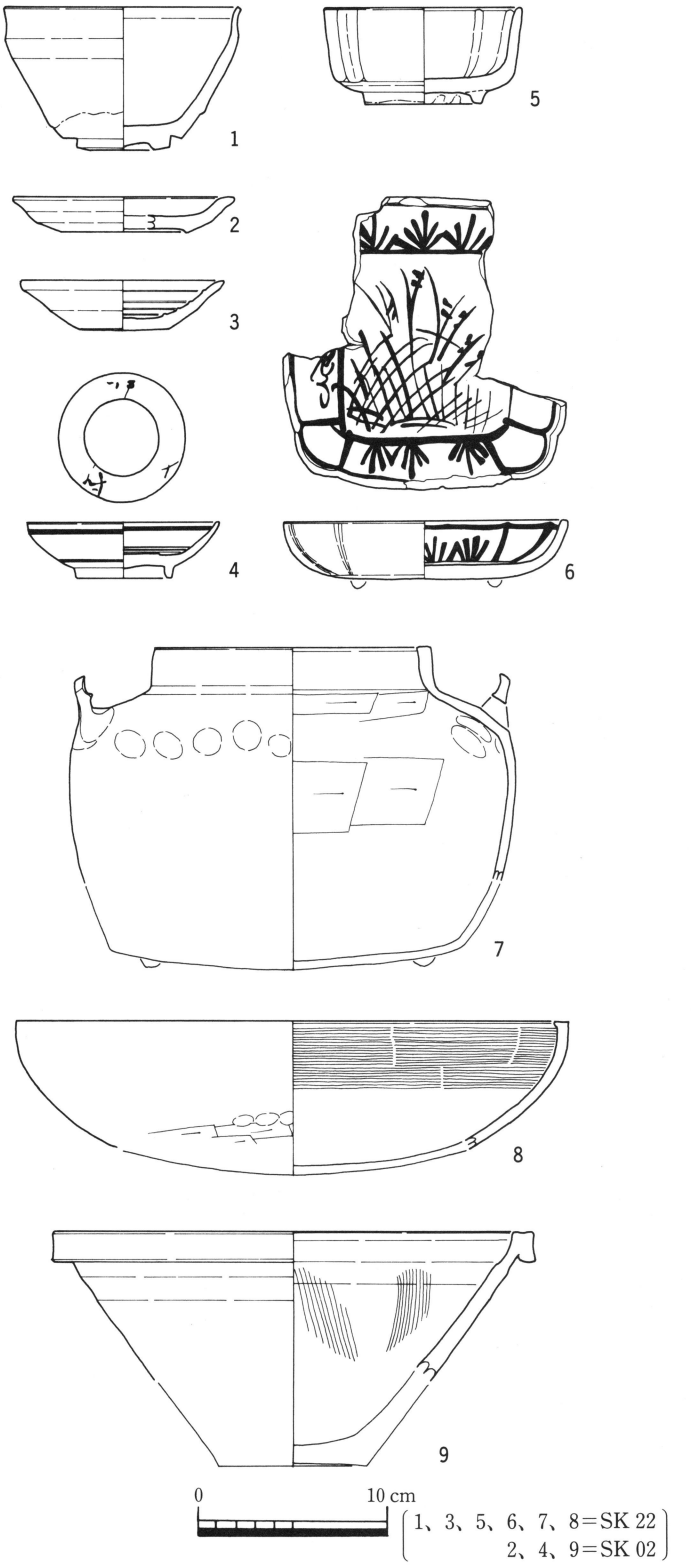
C区全景



C区骨出土状況



第 3 図　遺構図



1、3、5、6、7、8＝SK 22
2、4、9＝SK 02

第 4 図　出土遺物

県道新川清洲線関連（D区・Ea区・Eb区）

調査区は、五条川の流路に対して垂直にトレンチを掘削した形となった。流路に近いD区では旧五条川が検出され、最も遠いEb区では五条川左岸の安定した自然堤防が形成されていた。旧五条川は16世紀中頃に埋積したものと考えられ、戦国時代後半以降の遺構は調査区全域に見られた。しかし、D区や自然堤防の縁辺部にあたるEa区では、戦国時代以前の良好な生活面や遺構は存在しなかった。

検出した遺構は、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、城下町期前期（戦国時代）、城下町期後期（戦国時代～江戸時代）、江戸時代後期の5時期に大別できる。

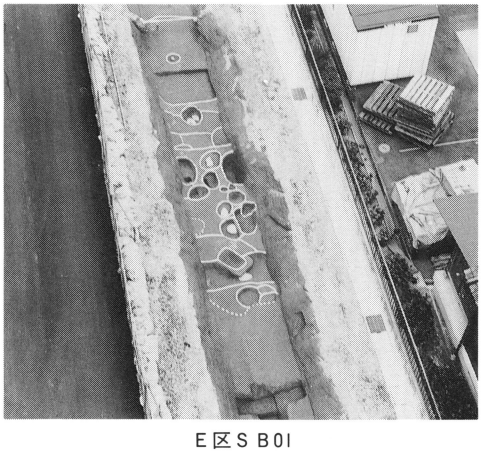
奈良・平安時代の遺構はEb区で竪穴住居8棟、溝3条、土坑などが確認された。竪穴住居は切り合い関係を持ち、複数の時期に細分が可能である。SB302からは須恵器杯蓋（1）・杯身（2）・土師器甕（3）が出土し、8世紀中頃に比定できる。

鎌倉・室町時代の遺構としては、Eb区の東端部でピット群を検出した。現在の地割に平行する形で配列するものも見られ、掘立柱建物あるいは柵列が存在していたものと推定される。14世紀代の灰釉系陶器が出土している。

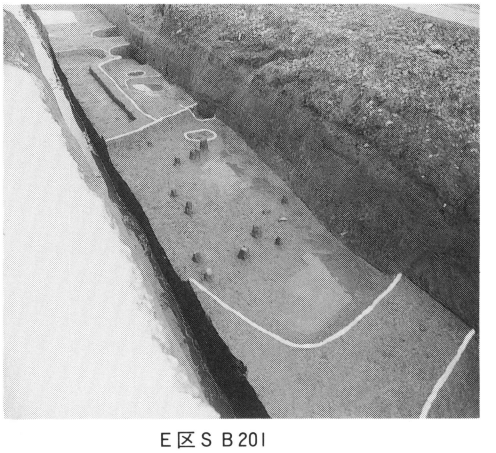
城下町期前期は、更に旧五条川埋積前後で時期細分が可能である。旧五条川埋土中からは窖窯後期～大窯II期の遺物が出土した。旧五条川埋積後には礎石建物1棟・区画溝1条・廃棄土坑などが存在する。なお、この生活面は天正地震の噴砂に覆われ、1586年よりも遡ることが確認できる。

天正地震の噴砂を覆う形で焼土面が一部で検出され、城下町期後期の廃棄土坑などがこの面から掘り込まれている。しかし、建物や屋敷割りの遺構は確認できなかった。

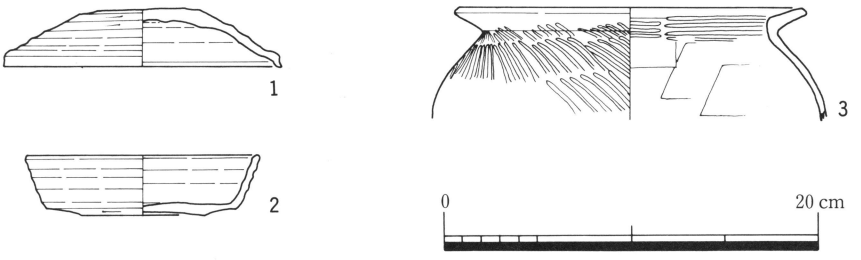
江戸時代の遺構は、D区で井戸と推定される土坑が若干認められた。宿場町期後期の時期に該当するものと思われ、町屋復元の一助となるであろう。



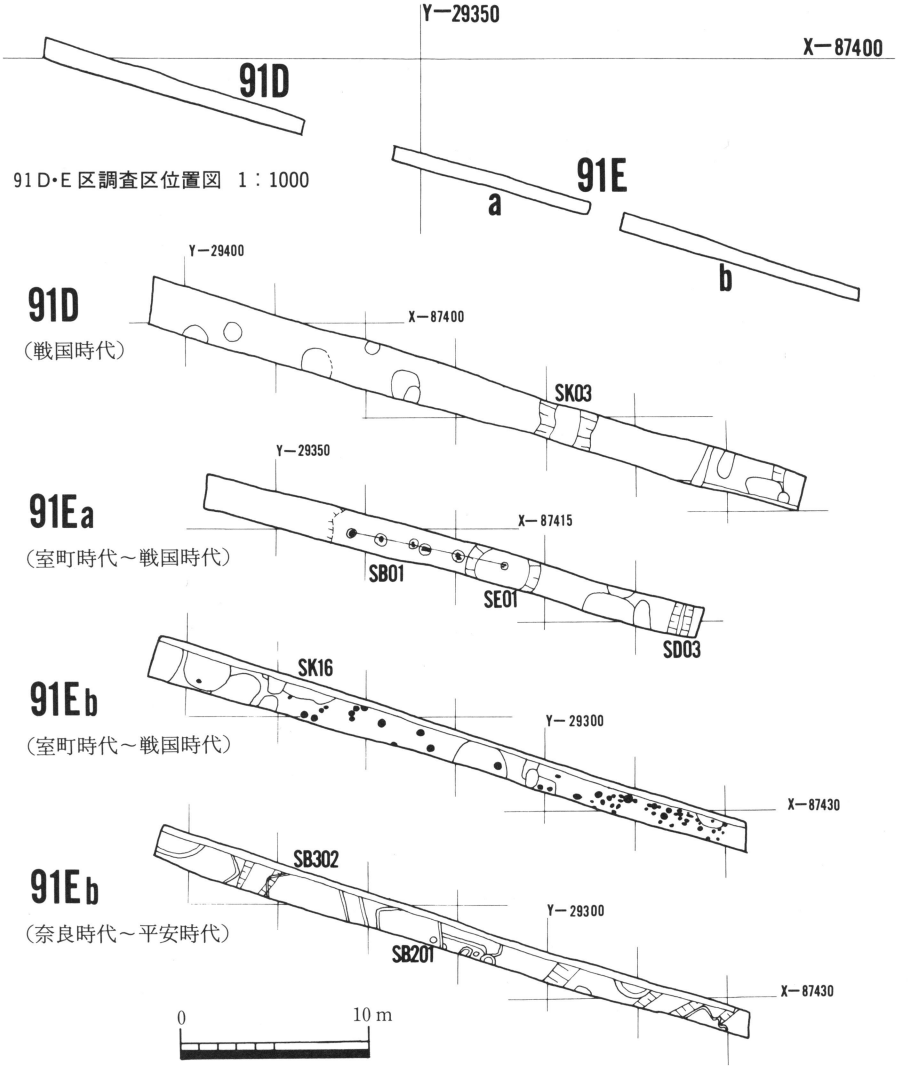
E区SB01



E区SB201



第５図　ＳＢ302出土遺物



第６図　91Ｄ・Ｅ区遺構図

まとめ

今年度の清洲城下町遺跡の調査は県道新川清洲線関連の調査（847㎡）と五条川改修関連の調査（4,820㎡）である。前者の調査区はほぼ東西方向で幅が約４ｍ前後と狭いものであったが、長さが150ｍにわたって設定された。一方、後者の調査区は３地点に分かれているが、五条川左岸に沿ってほぼ南北方向に計500ｍの長さにわたって設定された。その結果、清洲城下町の南半分を縦横に断ち切って調査した形となり、種々の興味深い事実を得ることができた。

県道新川清洲線の調査区においては古代から近世までの連綿とした人間生活の痕跡を見い出すことができた。下層では古代・中世の集落が見つかった。城下町期では調査区の西端で天正地震（1586年）と思われる噴砂に覆われる形で旧五条川の川岸を検出したが、当初の予想よりかなり東側に入り込んでいたことが確認された。

五条川関連の調査区ではＡ区、Ｂ区が現在の堤防下ということで、五条川瀬替え（18世紀末）以降の攪乱を全く受けておらず、きわめて良好な形で遺構を検出することができた。特筆されるのはＡ区における城下町後期の様相である。Ａ区ではこれまでの調査区でなかったような所見がいくつか見られた。一つには数棟の礎石建物群を検出したことである。礎石建物群は方向もほぼ同一で、かなり規則性を持っている。そのうちの１棟は総柱建物で、すぐ南の廃棄土坑から狛犬等も出土していることから「お堂」の様な建物とも考えられる。出土する遺物も従来の調査区のものと違い、廃棄土坑などからは志野、織部といった瀬戸・美濃産の茶陶類に加えて東南アジア産と考えられる陶器や中国・朝鮮産の白磁・染め付けなどかなり質の高い陶磁器がまとまって出土している。さらに、今までの調査区でよく検出されている区画溝がほとんど見られない点も特異である。一つの大きな区画の中なのか、区画する必要のなかった場であるのか興味深いことである。位置的には中堀の虎口（出入口）を出たすぐ正面に当たることなどから、従来考えていたような通常の屋敷地とは違った空間であった可能性が高い。それ以外に、城下町前期では多数の井戸と一辺約45ｍの区画溝で囲まれた武家屋敷地をいくつか検出している。

南のＣ区では屋敷を区画する溝が数条検出されているが、それより以南は不定形の土坑などが見られ、中には円礫と共に骨片などが入っているものもあった。

今年度の清洲城下町遺跡の調査は今までの中で最も広い調査区を調査し、種々の興味深い事実を得た。これで、五条川関連の調査面積はすでに４万㎡を超え、予定面積のほとんどを終了したこととなる。この間、検出した多数の遺構・遺物の一つ一つがそれぞれの時代の人々の営みの断片を豊かに想起させてくれる。今や、これらの断片をつなぎ合わせ、生き生きとした人間生活を復元する時期にきていると言えよう。　　（城ヶ谷和広）

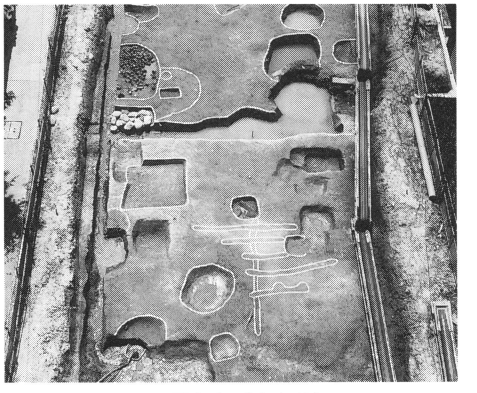
外町（そとまち）遺跡

調査の経過

外町遺跡は、尾張平野の中央部を南流する五条川左岸の標高約３ｍ前後の自然堤防帯上に立地し、行政的には、西春日井郡清洲町・新川町の境界付近に位置する。遺跡は中世以降の美濃街道に面しており、北方には清洲城下町遺跡が広がる。

今回の発掘調査は、県道新川・甚目寺線建設に伴うものであり、平成３年４月から８月まで、1890㎡にわたって調査を進めてきた。

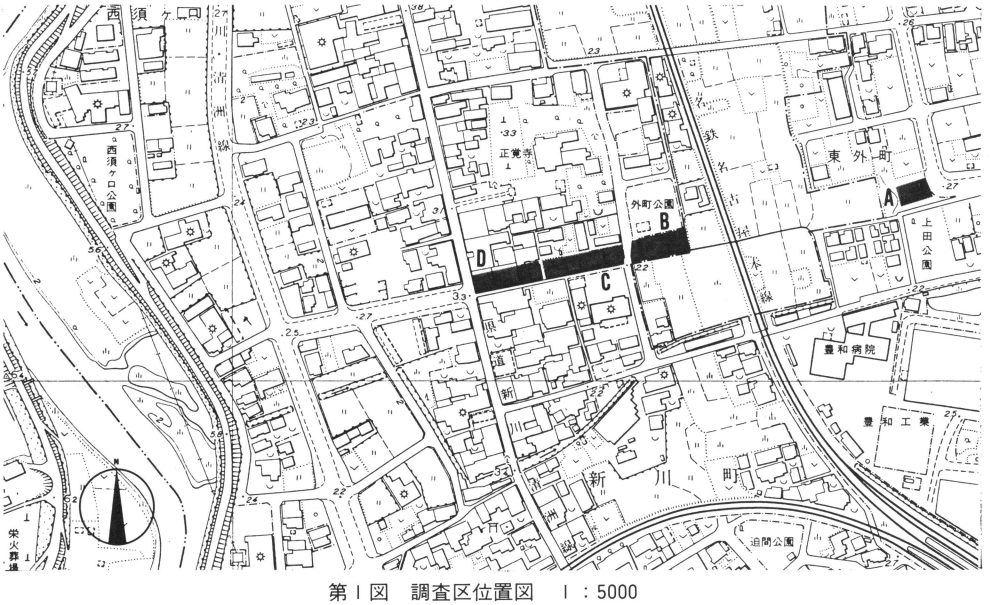
調査は、地下水位の上昇期にあたり夥しい湧水に悩まされ、作業は難航したが、その結果、Ａ区では、城下町後期に属する溝を、Ｂ～Ｄ区においては、18世紀代を中心とした良好な遺構・遺物の出土をみた。　（服部信博）



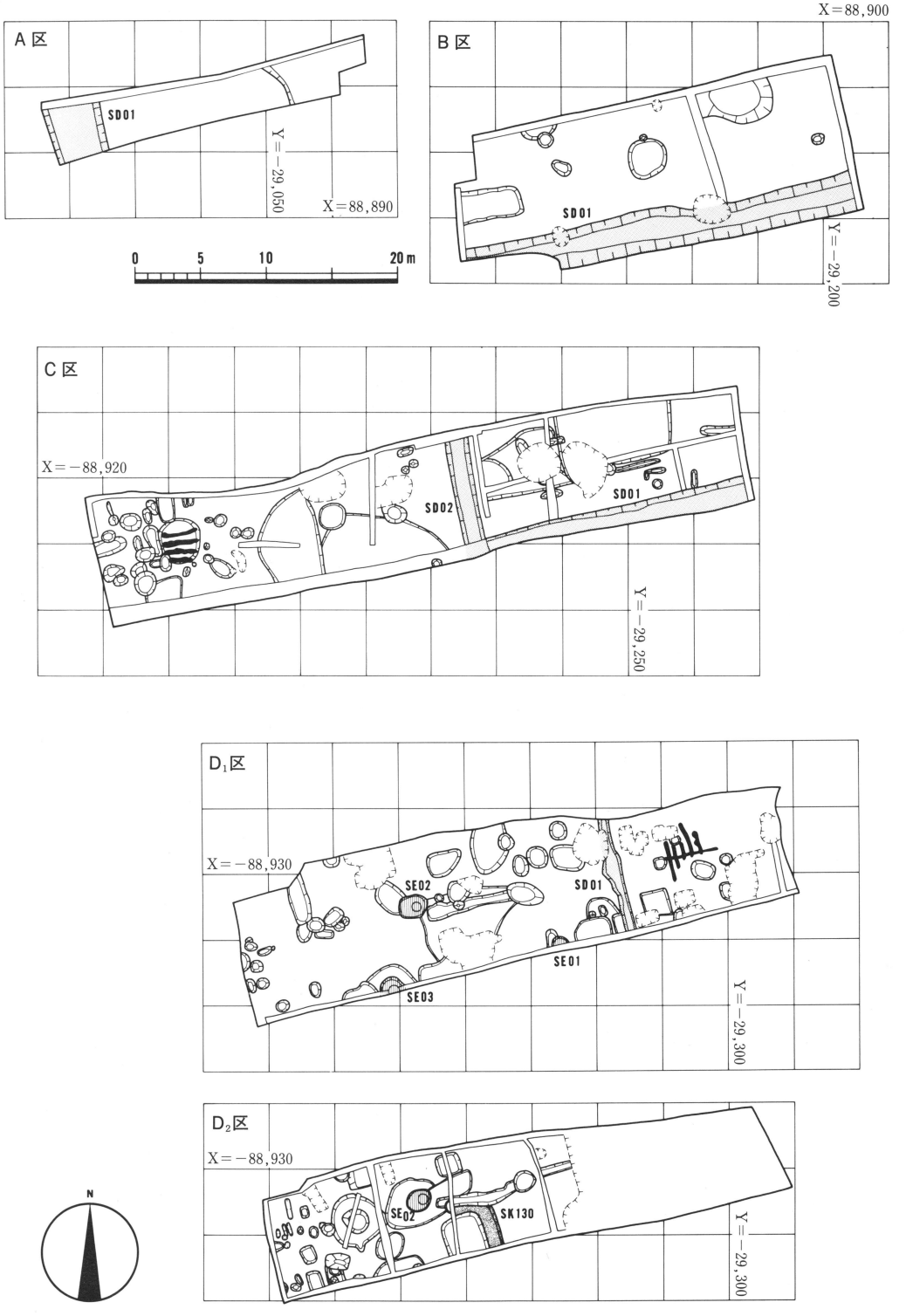
D_1区東半（東より）



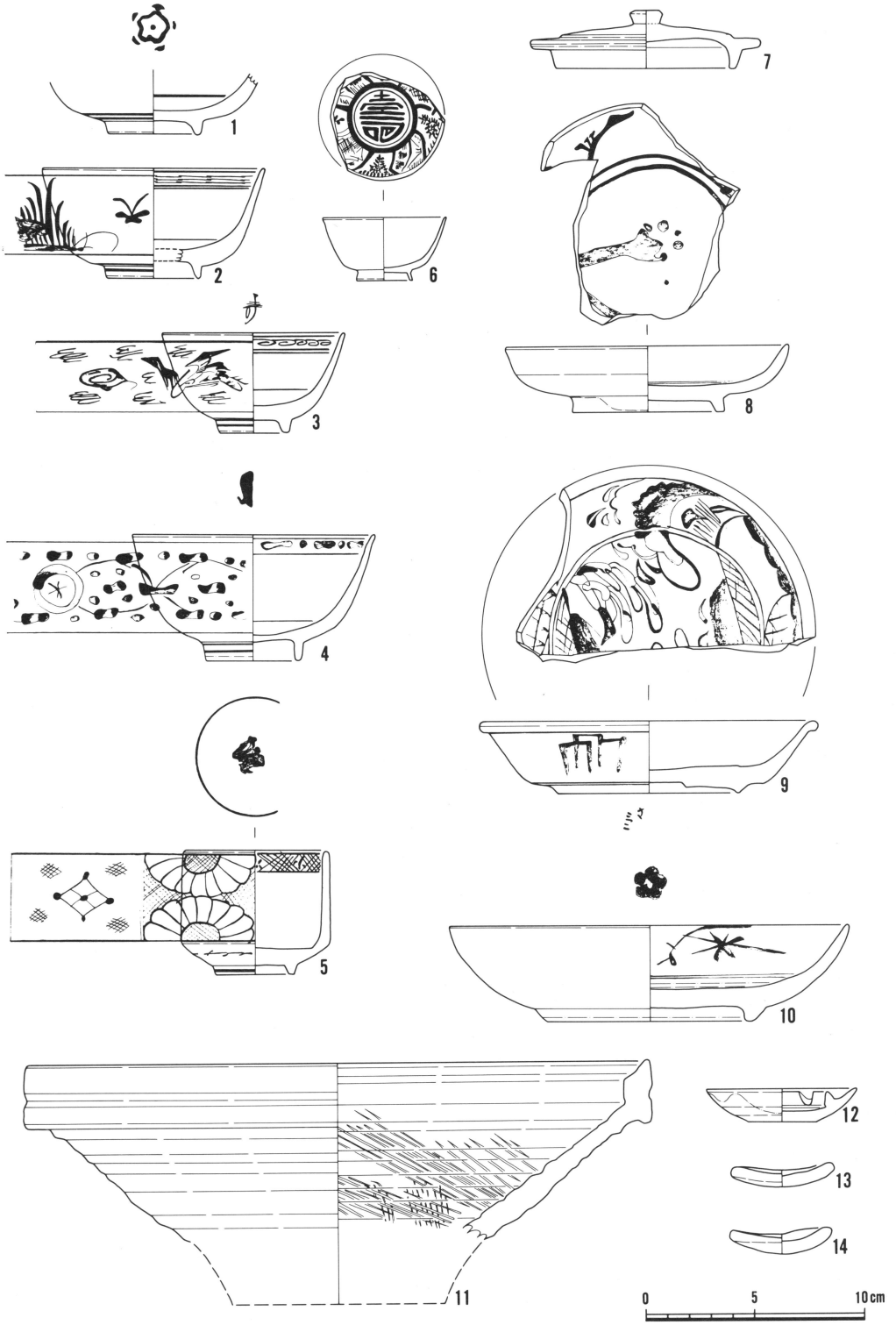
D_2区全景（西より）



第Ⅰ図　調査区位置図　Ⅰ：5000


A区
SD01
Y=−29,050
X=88,890
0 5 10 20m
X=88,900
B区
SD01
Y=−29,200
C区
X=−88,920
SD02
SD01
Y=−29,250
D1区
X=−88,930
SE02
SD01
SE01
SE03
Y=−29,300
D2区
X=−88,930
SE02
SK130
Y=−29,300
N

第2図　遺構配置図



〔1～10、12はB区SD01
11、13、14はA区SD01〕

第3図　出土遺物

調査の概要

今年度はA～D区の4調査区にわたって調査を行った（第1図）。

遺構（第2図）

A区　清洲城下町最末期頃（17世紀初頭）と思われる溝1条を検出した。

B区　江戸時代後期（18世紀末～19世紀前半）の溝1条・土坑7基・ピット2基を検出した。SD01は、用排水路と思われる。

C区　この調査区は、攪乱が多く正確に遺構を掴みきることが難しかった。江戸時代後期頃と思われる溝10条・土坑59基を検出した。そのうちSD01・02は用排水路と考えられ、調査区西端では畑の畝と思われるものも検出された。

D区　現在の美濃街道に面したこの調査区は、住居跡などの遺構が期待されたが攪乱が多く明確には確認できなかった。上面（D_1区）では、江戸時代後期頃の井戸3基・溝8条・土坑48基を検出した。そのうちSD01は用排水路と考えられ、調査区東端では畑の畝と思われるものも検出された。上面検出面より約1mの包含層の下の下面（D_2区）では、新たに江戸時代中頃（17世紀末～18世紀前半）の溝3条・土坑39基・ピット2基を検出した。特にSK130では、山茶椀の破片が出土し室町時代の土坑であることが確認された。

遺物（第3図）

出土遺物としては、江戸時代後期を中心とした瀬戸・美濃産の陶磁器類が大多数を占めている。1～4は染付けの椀、5は染付けの筒型湯呑椀、6は内面に模様をもつ小椀、7は灰釉のかかった陶器の蓋、8～10は染付けの皿、12は鉄釉のかかった灯明皿である。

また、A区では清洲城下町最末期頃の遺物が出土しており、11は備前焼の擂鉢、13・14は土師器の皿である。

その他、甕・蓋・杯などの須恵器も、表土や包含層、遺構内から出土している。

まとめ

A区では、清洲城下町最末期頃の溝が確認されており、北方に広がる清洲城下町が拡大膨張して外堀の外側にも町を形成していた可能性が高いと思われる。

B区～D_1区では、江戸時代後期頃の町の様子を伺うことができる。D_1区SD01以西は井戸を検出しており居住地と、D_1区SD01以東C区SD02以西までは畝を検出しており畑地と、C区SD02以東B区までは田地であったのではないかと考えられる。

D_2区では、江戸時代中期には人々の住んでいた形跡がみられるが、約1mの盛土が18世紀後半に行われているようであり、『清洲町史』にみられる五条川瀬違え（1794）と時期が一致しており、この時期この地域に瀬違えに伴う町割りの再編という人為的な造成のあったことが想定される。　（小嶋廣也）

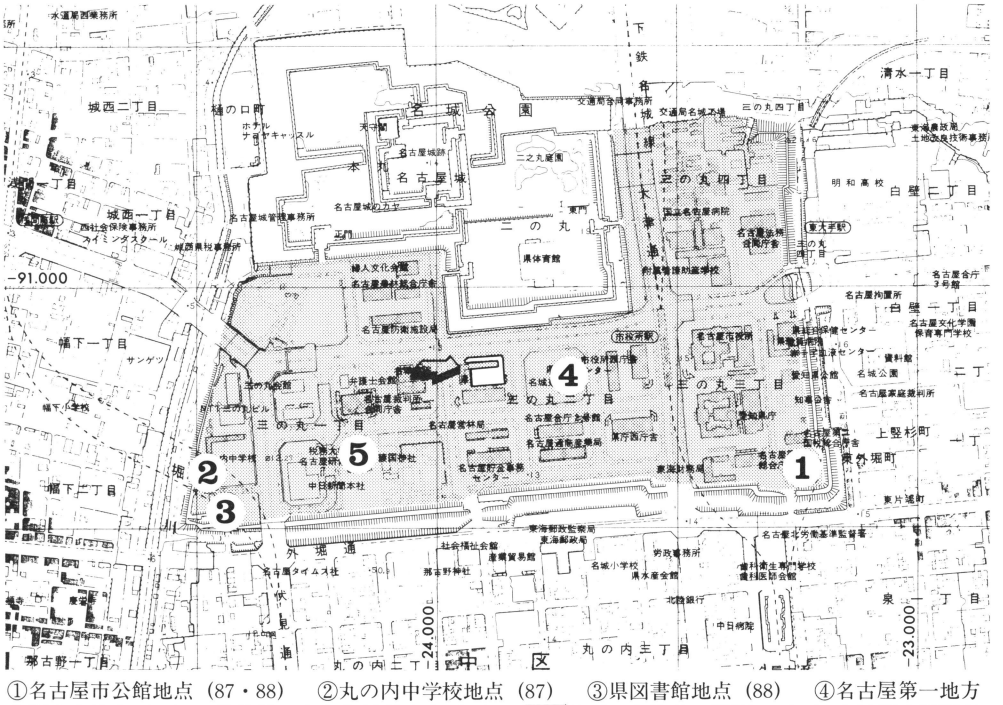
名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸地内に所在する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。これまでに、第１図の５地点で発掘調査が実施された。平成３年度の調査は、愛知県警察本部内の、総合科学センター建設予定地3,600㎡で実施された。調査の結果、上下２面にわたる遺構が検出され、下面では戦国期の那古野城の一画が、上面では近世尾張藩における上級家臣の武家屋敷地が確認された。

戦国時代の遺構

戦国時代の主な遺構としては、堀・柵列・井戸・方形竪穴建物跡などがある。縦横に走る堀は全部で６条あり、大きいものでは幅４ｍ・深さ3.5m、小さいものでも幅2.5m・深さ２ｍを測る。いずれも断面形が鋭いＶ字状を呈する薬研堀で、堀際には土塁を伴っていたと考えられる。このような堀と土塁の配置構成や出土遺物などの検討から、これらは名古屋城二の丸にあったとされる、織田信秀・信長父子が居城した那古野城の一画を構成する郭群と考えることができる。また、円筒状に掘り込まれた桶組み井戸や、貯蔵庫か台所と思われる焼失した方形竪穴建物跡も確認され、注目された。　　（鷲見　豊）



①名古屋市公館地点（87・88）　②丸の内中学校地点（87）　③県図書館地点（88）　④名古屋第一地方合同庁舎地点（88）　⑤簡易・家庭裁判所地点（90）　□は三の丸遺跡の範囲　（　）内は調査西暦年

第１図　三の丸遺跡と今回の調査地点（矢印）



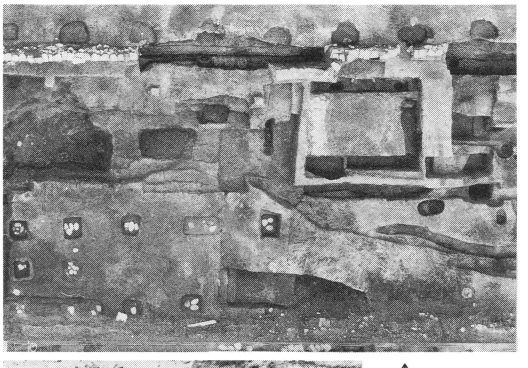
第2図　戦国時代の遺構略測図

江戸時代の遺構・遺物

今回の調査区は、尾張藩上級武士の屋敷地であり、調査によって屋敷境Ａ～Ｃが検出された。屋敷境Ａは、17世紀半ばに家老の竹腰氏が屋敷を構える以前に、この土地を東西に分けていた境界施設で簡単な柵列である。屋敷境Ｂは、竹腰氏の屋敷地の南境と考えられるが、簡単な柵列から塀と溝、さらに支柱をもち一部には石積み基礎をもつ瓦葺きの土塀へと変化したと思われる。屋敷境Ｃは、家老職級の家臣山澄氏の屋敷地と、幕末には熊谷氏が拝領していた屋敷地の境で、深く箱掘りされた溝である。これらの屋敷境の構造とその変化は、江戸時代の武家屋敷での境界に対する意識を考察する資料となろう。また屋敷境周辺から発見された井戸・廃棄土坑・建物跡などは、屋敷内の土地利用の有りかたを考える手掛かりを与えた。

遺物は、陶磁器・瓦類を中心にコンテナ1,000箱以上が出土した。中でも、三ツ葉葵の一部をかたどった金箔、漆器にほどこされた美しい蒔絵細工、家紋の入った瓦などは、膨大な量の陶磁器類とあわせて、江戸時代に三の丸に居住していた上級武士の暮らしぶりや経済力を伝えるものである。

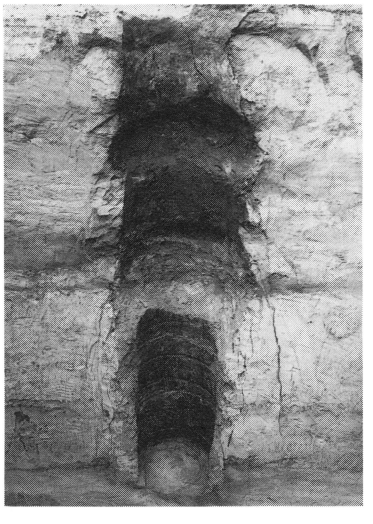
（余合昭彦）



↑
瓦葺き建物及び
土蔵の基礎

屋敷境の石組基礎と溝→

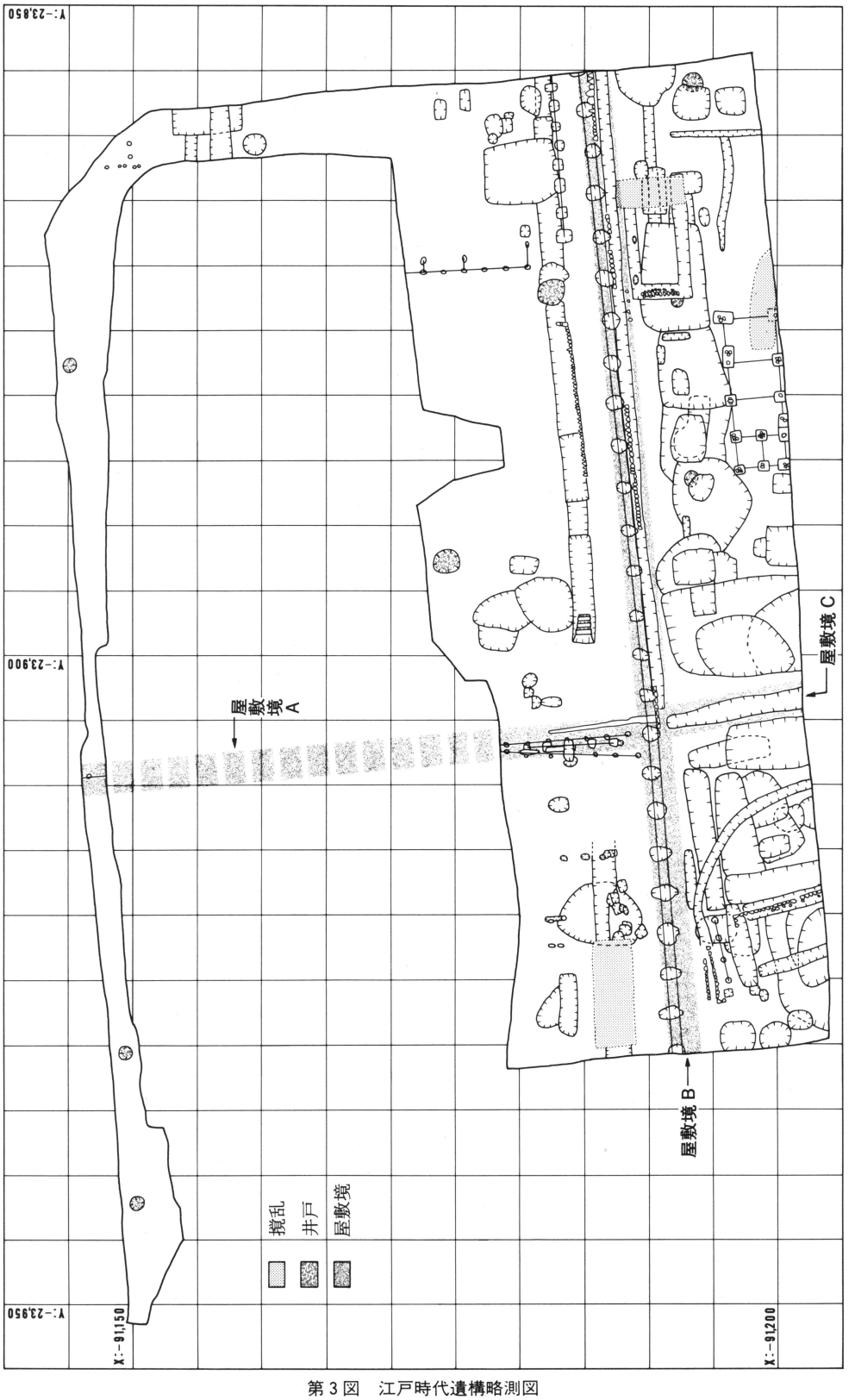




戦国時代の桶組み井戸←

方形竪穴建物跡
↓





第3図　江戸時代遺構略測図

松河戸（まつかわど）遺跡

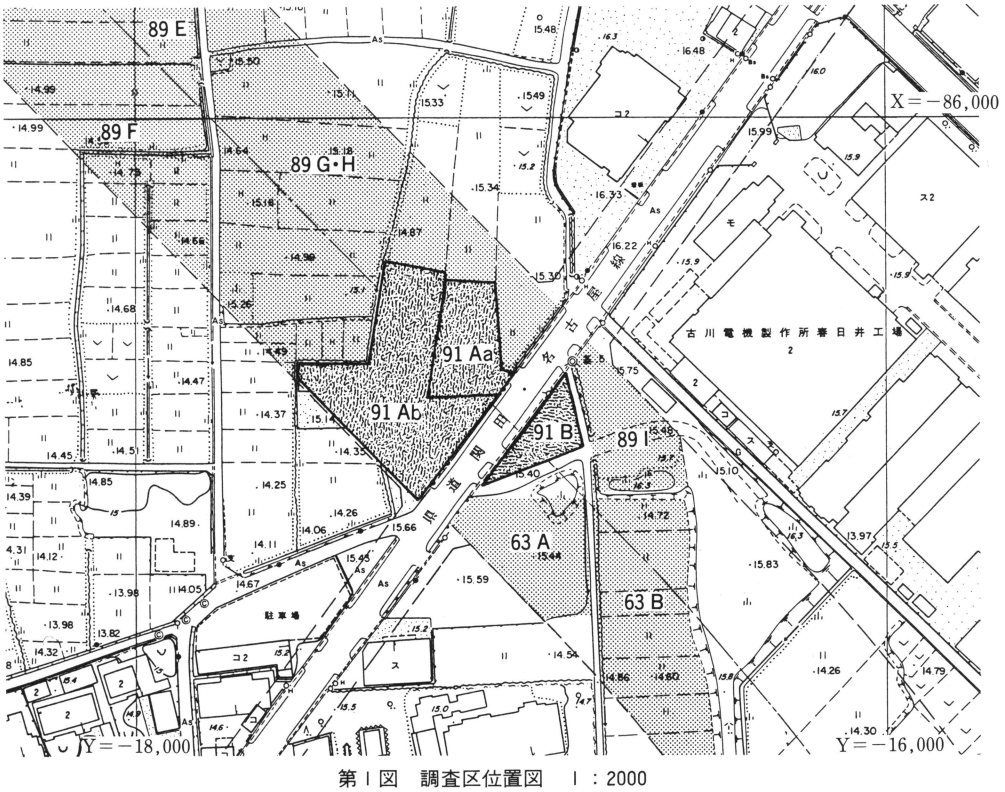
調査の経過

松河戸遺跡は春日井市南東部、庄内川右岸の沖積地に立地する。この一帯は古代条里制の残存する地域と推定されており、名古屋環状２号線建設に伴い条里制遺構究明を目的として昭和62年度から始まった発掘調査は、５年目となる今年度を以て終了した。これまでの調査によって本遺跡を、Ⅰ期：縄文時代早期～後期、Ⅱ期：縄文時代晩期後半～弥生時代前期、Ⅲ期：古墳時代、Ⅳ期：中世、Ⅴ期：近世の５時期に区分している。

調査の概要

今年度の調査は県道関田・名古屋線を挟んで西に91Ａ区、東に91Ｂ区の２調査区が設定されたが、91Ａ区は都合上２分割（91Ａａ区、91Ａｂ区）した（第１図）。

調査は上下２面で行った（第２図）。上面はⅤ期で、水田遺構を主とするが、攪乱が激しくＡａ区を除き検出できなかった。Ｂ区では溝１条（ＳＤ03）を検出している。下面はⅣ期の屋敷跡を検出した。ＳＡ01を屋敷地南限としその南に井戸（ＳＫ02）を配置し、さら



第Ⅰ図　調査区位置図　Ⅰ：2000

にその南では溝（ＳＤ02）により区画されている。12世紀後半～13世紀前半に比定される。その他、本遺跡の時期区分に該当しない遺構としてＳＤ01（７～11世紀　仮にⅢ′期とする）がある。埋土に粗砂層を数枚持つことから水路と考えられる。

まとめ

名古屋環状２号線建設工事が調査区両脇まで迫り、時に競合する場合もあり、決して満足のいく調査ができたとは言いがたい。また、遺構面の攪乱が激しく、屋敷跡の様相が摑みにくくなっていたことが残念でならない。本遺跡の調査は67,000㎡を越える調査面積の全てを終了し多くの成果を上げた。今後の整理報告に期待したい。　　（岡本直久）



第２図　遺構配置図

室（むろ）遺跡

調査の経過

建設省中部地方建設局名四国道工事事務所により国道23号線の交通量緩和を目的として国道23号線バイパスの建設が計画された。それを受けて愛知県教育委員会文化財課は、昭和62年に建設予定地内で試掘調査を実施した。その結果、室遺跡は、西尾市の東部、駒場町と室町にまたがる広田川左岸の自然堤防上（標高5.5m）に立地し、古代から中世にかけての遺跡であることが明らかになった。調査は、建設省名四工事事務所の委託を受け、平成３年４月から４年３月までの予定で8,800㎡を発掘した。発掘区はほぼ東西にわたり、幅40m、長さ220mである。（山田　基）

調査の概要

上層から①耕作土層②近世の遺物をわずかに包含する明褐色土層③平安時代後期から中世にかけての遺物を多量に包含する暗茶褐色土層の順に堆積し、これが調査区全域に通有の基本層序である。暗茶褐色土層の下は、調査区東半部では自然河道のもたらした褐色砂層や流木を含む腐食土層が厚く堆積するに対し、西半部では平安時代前期から中期の遺物をわずかに含む黄褐色シルト層と青灰色シルト層があり、ついで無遺物層である黒色粘土層が堆積し、様相を異にする。中世の基盤面は褐色砂層と黄褐色シルト層の上面であり、木樋はこのシルト層と粘土層の間で検出された。

以上の層序と遺構の構造を考えて次の画期を設定した。すなわちⅠ期（平安時代前期から中期）、Ⅱ期（平安時代後期から中世）、Ⅲ期（近世）の３期である。

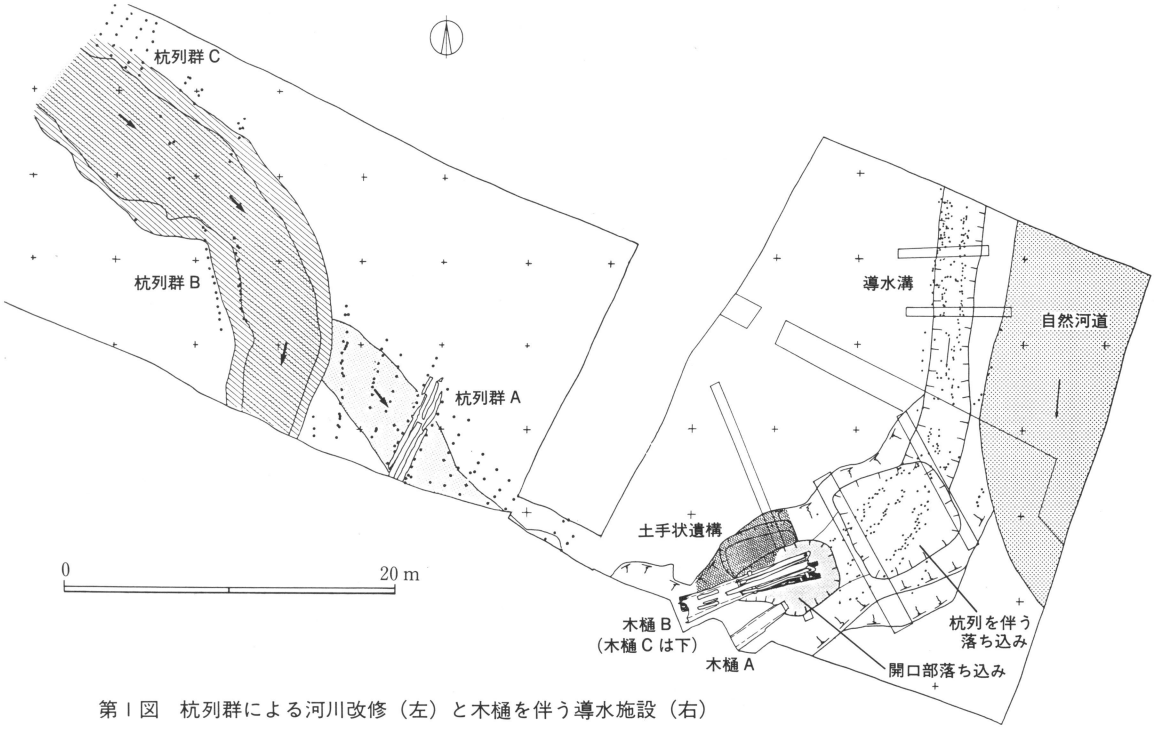
〈Ⅰ期〉　この時期に属する居住に関わる遺構は明らかにされていない。しかし、「木樋を伴う導水施設」と「杭列群による河川改修」が遺跡の西部で検出された。

「木樋を伴う導水施設」とは、３本の木樋と木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み、木樋北の土手状遺構、木樋北東の杭列群を伴う落ち込み、それに接続する導水溝で構成される（第１図）。

［木樋］木樋Ａは、長さ3.9m以上（西の一端は調査区外に伸びているので全長は不明）、幅0.9m、内法0.8m、深さ0.2mの規模をもち、他の２基と同じく丸太を半割にしてＵ字形にくりぬいてあるが、蓋はない。埋土も白色砂が堆積している。開口している東端部には、えぐり込みによる段差があり、組み合わせ式になっていたと考えられる。開口部では開口部方向に傾斜し下がっているが、西半部は反対方向にやや傾斜している。材はクスノキ。

木樋Bは、長さ8.7m、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいている（土圧のため側壁部と中央部で縦に割れている）。側壁部の上端部には4ヶ所のえぐり込みを入れ、合計8本の横木を渡し、その上に板材5枚を縦方向に敷いて蓋としている。板材の中には転用材もある。木樋の中の土は周囲と同じ青灰色シルトで砂はない。内部より「田」と墨書された須恵器椀の破片が出土した。木樋Aと同じく開口部方向に傾斜（約5°）し下がっているが、木樋に沿って打たれた木樋を留めるための杭の先端のレベルを見るとほぼ同じであることから、本来は水平か水平に近かったと思われる。材はヒノキである。

木樋Cは、木樋Bの真下にほとんど長軸を一致させて設置してあり、長さ8.6m、幅は開口部で1.1m、出水口部で0.8m、深さは開口部で0.1m、出水口部で0.4mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいているが、開口部では極めて浅くフラットに近い。側壁部の上端部に5ヶ所のえぐり込みを入れ合計4本の角材の横木を渡し、その上にまるみをもたせた板材3枚を縦方向に敷いて蓋としている。規模はやや小振りであるが、形状は木樋Bと極めて酷似している。ただし、木樋Bより丁寧に作られているとの印象を受ける。木樋内部の土は灰褐色砂である。出水口部から中央まで開口部方向に強く傾斜して下がっているが、中央部から開口部まではほぼ水平である。材は木樋Bと同じでヒノキである。（第2図）



第1図　杭列群による河川改修（左）と木樋を伴う導水施設（右）

[木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み] 木樋Ｂ・Ｃの開口部を取り巻いて、幅９ｍ、長さ６ｍ、深さ1.7ｍの規模を有する落ち込みがある。木樋Ｃを設置した時点で掘り込まれ、木樋Ｃの開口部は完全にこの落ち込みの中にある。この落ち込みには、木樋の開口部を囲むように、不規則な杭群とそれに絡んだ加工痕の見られない自然の丸太材が見られる。杭の中には長さ２ｍ、直径20㎝と太いものもあるが、その他はおおよそ10㎝前後の太さである。「万」と墨書された灰釉陶器の皿がこの乱杭の中から出土している。

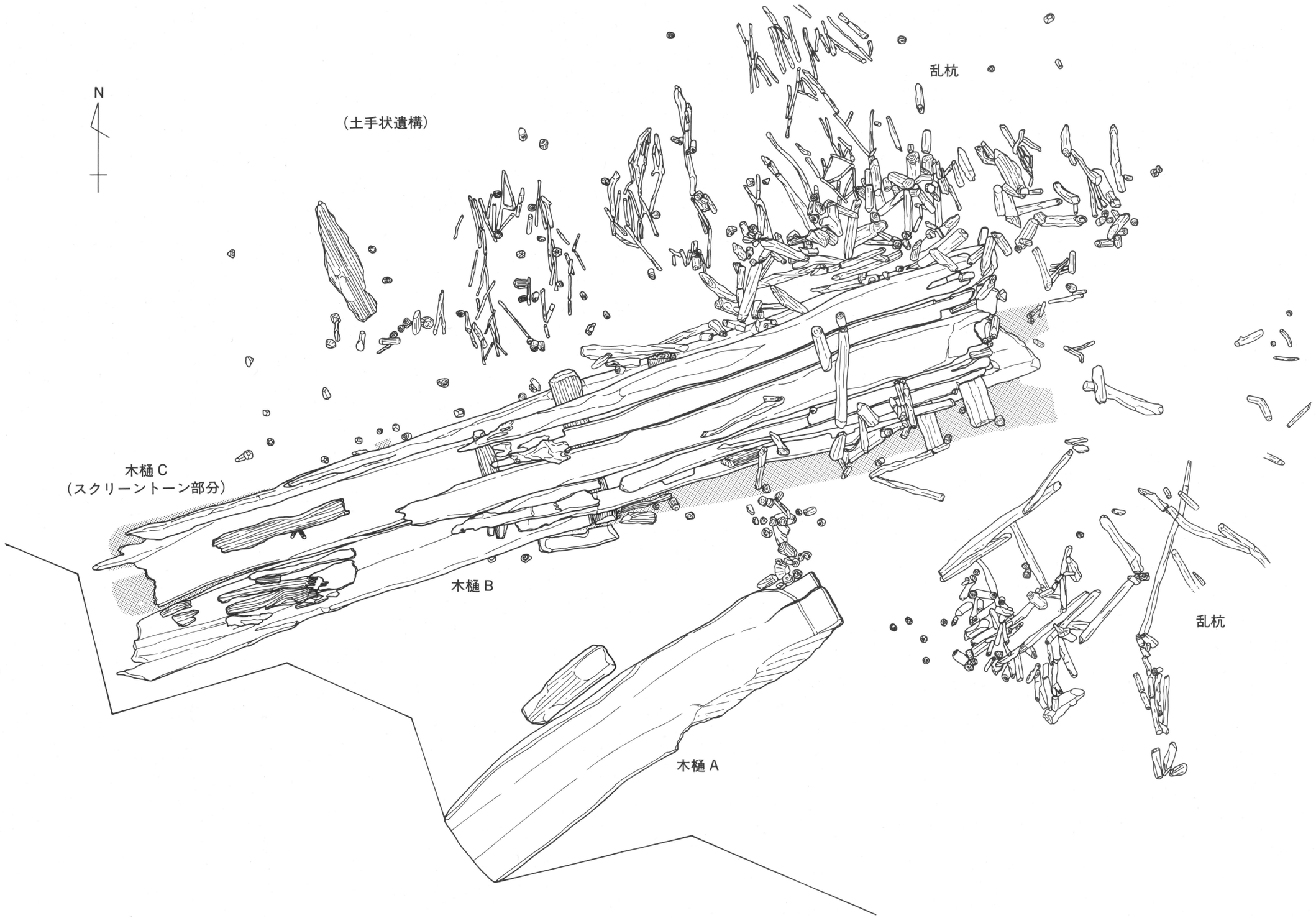
[土手状遺構] 木樋Ｃの北に、木樋の長軸に直交する方向に、小枝のない細い枝やヨシ・アシの類が同じ方向で、水平に（木樋に近づくにしたがって傾斜しながら）、少なくとも12層以上（高さ0.5ｍ）が、灰色土と交互に敷かれ、版築状に堆積している。またこれを留める機能を持つと思われる杭が打ち込まれている。一部は木樋Ｂと木樋Ｃの間や落ち込み内にも存在する。木樋Ｂの掘り方によって破壊されていることから、この遺構は木樋Ｃに伴う土手状遺構と考えられる。ちなみに木樋Ｂに伴う土手遺構は削平されたため検出されていない。

[杭列を伴う落ち込み] 開口部の落ち込みの東に、東西6.6ｍ、南北６ｍ、深さ1.6ｍの規模を有する急に深くなる落ち込みがあり、その中に杭列が打たれている。杭列は５列と見られ、東の２列は短いが、西の３列は長く、特に中央のは２本セットで南北に弧状に貫いていて、北の導水溝の杭列につながっている。杭は先端のみ削ってとがらせ、残りは樹皮を残している丸太杭がほとんどで、太さも10㎝前後が圧倒的に多い。杭の先端は落ち込みの底には届かず、落ち込みが掘削された時期と杭列が打たれた時期に差があることを示している。

[導水溝] 杭列を伴った落ち込みにつながる溝は、幅2.5ｍ、深さ0.9ｍの規模で、自然河道に沿ってほぼ南北に16ｍ走り、調査区外に続いている。この溝は掘り直しが少なくとも１度行なわれ、新しい溝には護岸用の杭列が両肩に見られ、南の落ち込み部に打たれた中央の杭列につながっている。

木樋内部および周辺で検出された須恵器や灰釉陶器からみて、木樋Ａ・Ｂの築造時期は平安時代中期（Ｏ－53）であり、木樋Ｃも木樋Ｂと構造が類似することからそれほど時期が下るとは考えられない。

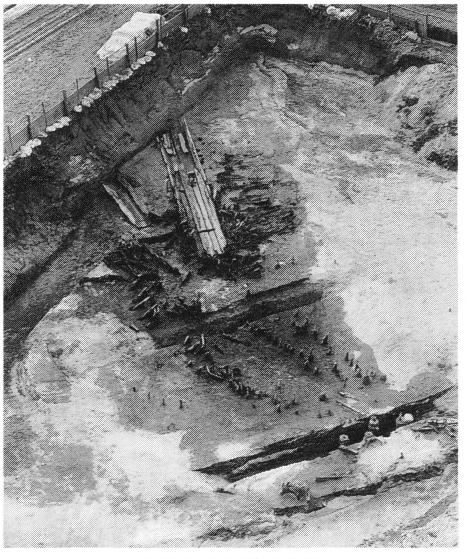
さて、この木樋を伴った導水施設の機能を整理しておくと、[導水溝] によって北から南に水を導き入れて、いったん [落ち込み部] に貯水したのち、[土手状遺構] で水位を高めて水をオーバーフローさせ、[乱杭] で流木・葉・ごみなどを除去してから [木樋] を通って南の高所に送水したと考えられる。ただし、出水側について



第 2 図　木樋平面図　1：40

は調査区外であるため内容は分からないが、遺物の量が極めて少ないことから集落とするよりは水田である可能性が極めて高い。

木樋が検出された発掘区の西において、自然河川の流れを変えるためのものと考えられる杭列群が検出された。杭列群は大きく3群に分けることができる（第1図）。杭列群Aは自然河川を横断して打たれており、杭にはつる状の植物・小枝が「しがらみ」状に絡んでいる。また、杭列と杭列の間には自然木が敷きつめられ、特に中央部では太い丸太が3列横たえられ、動かないように杭でとめられている。西端の杭列は他と比較して密度がもっとも高い。杭列群Bは、自然河道がL字状に曲がるコーナーの川肩に沿って打ち込まれており、「しがらみ」はなくつる状の植物が数条水平に渡してある。また杭の密度は高い。杭列群Cは自然河道に直交して半分ほどかかり、杭にはつる状の植物・小枝・ヨシアシ類が「しがらみ」状に絡んでいる。これらのことから次のように考えられる。本来自然河川は北西から南東にまっすぐに流れていたが、何らかの理由で、流れを南に変える必要が生じたために、杭列群Aで流れを堰き止め（締め切り）、杭列群Bを護岸として南に方向転換させた。また、杭列群Cは、水流を制御する機能があったと推定される。



木樋を伴う導水施設



杭列群による河川改修

これらの杭列がいつ打たれたかは、杭列群A付近で平安時代に属する土器小片が出土しただけで詳細は不明であるが、土層堆積から見ると木樋とほぼ同時期と考えて誤りはないと考えられる。

〈II・III期〉 中世の集落の構造として、数条の溝によって区画される屋敷地が５ヶ所確認された。うち２ヶ所は一部が明らかになっただけであるが、他の３ヶ所はほぼ全体像を把握することができた（第３・４図）。屋敷地や溝などから13世紀から15世紀中頃の遺物が出土している。

屋敷地Ａは25ｍの正方形を呈する溝に区画される小規模な屋敷地で、東半部では溝が掘り直され外へ拡張されている。屋敷地内部には井戸を持たず、遺物も極めて少ない。屋敷地Ｂは、東西55ｍ（南北は不明）の規模を有し、膨大な数の柱穴と土坑が検出され、出土遺物の量も多く、石組の井戸と素掘りの井戸を持ち、この集落内で主体となる屋敷地と考えられる。屋敷地Ｅは、２本の溝が不整方形に巡り、内側の区画は東西25ｍ、南北20ｍの規模を持つ。内部からは建て替えられた掘立柱建物２棟、叩き締められた土間状遺構と方形の竪穴を伴う建物、石組の井戸、土坑などが検出された。

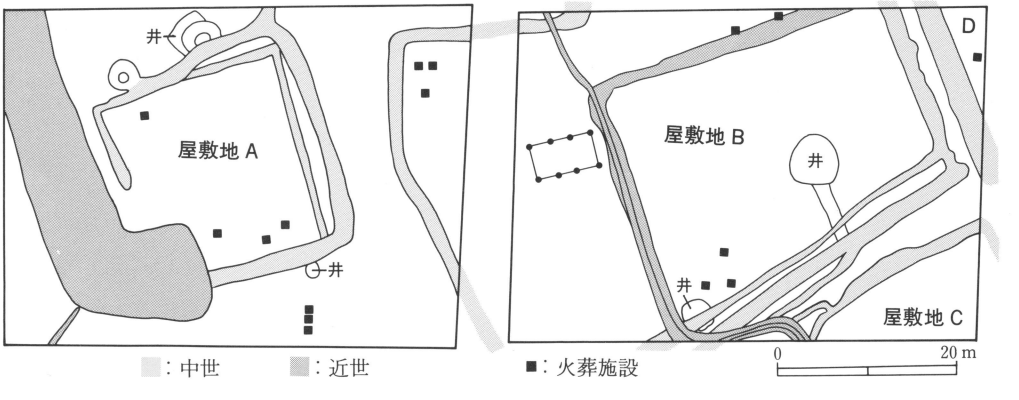
以上の中世の集落が廃絶した後に、火葬施設が発掘区全域に多くても３基ほどのブロッ



屋敷地Ｅ

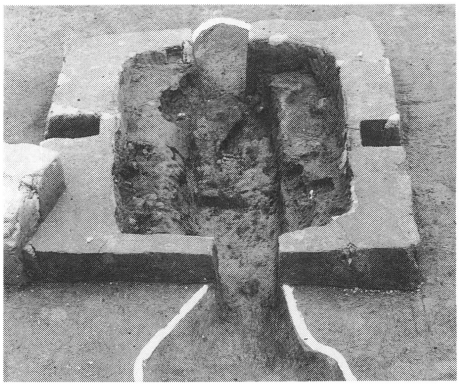


石組井戸



第３図　II・III期遺構配置図（左：Ａ区　右：Ｂ区）

クにまとまって点在する。検出総数は22を数える。良好に残存するものを見ると、一辺1m前後、深さ30cmほどの長方形の燃焼部と中央部に長軸にそって通風溝を有する構造が明らかになった。燃焼部の壁面は熱を受けて赤く焼けており、内部から炭化物、灰に混じって骨片と歯根が検出されている。しかし、土器が伴出しないため時期は明らかでないが、堆積した土壌を考慮すると、中世末期から近世初めであると考えられる。



火葬施設

調査区西部で、常滑産の甕と桶を伴った江戸時代末期の小規模な水田址を検出した。この水田の南西隅では、常滑産の土樋（土管）を使った排水施設も明らかになった。

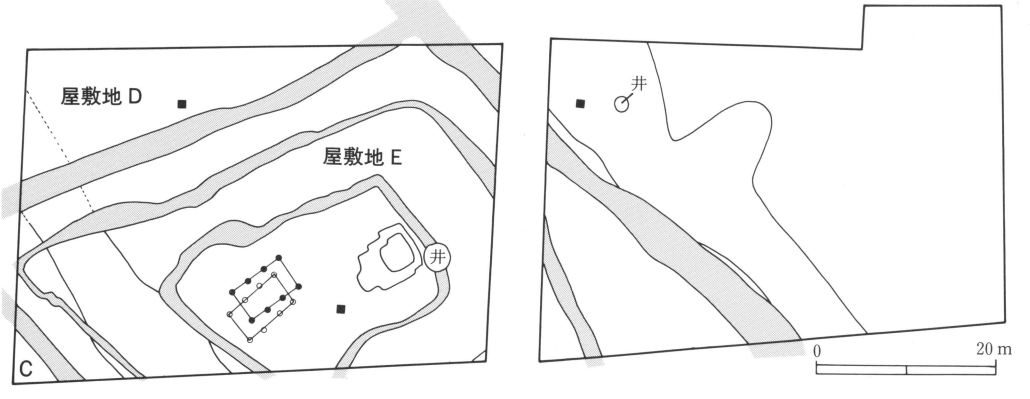


江戸時代末期の土樋

まとめ

平安時代の大型の木樋を使った灌漑施設は、全国で初めての検出されたものである。杭列による自然流路の改修も含め、地方での水田開発を具体的に明らかにできる非常に重要な資料となるであろう。また、中世の灰釉系陶器、瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の焼き締め陶器に混じって200点以上の貿易陶磁片が出土するなど、中世の集落の構造とその性格を解明するうえで極めて良好な遺跡でもある。

（都築暢也）



第4図　II・III期　遺構配置図（左：C区　右：D区）

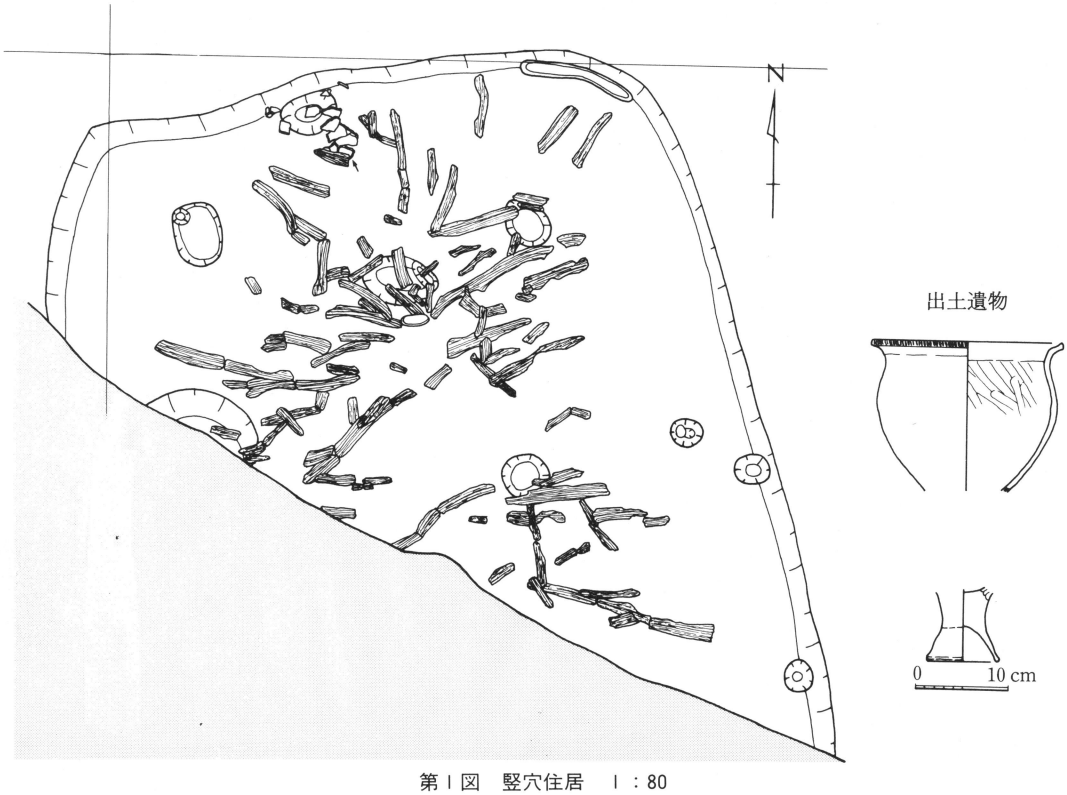
岡島（おかじま）遺跡

調査の経過

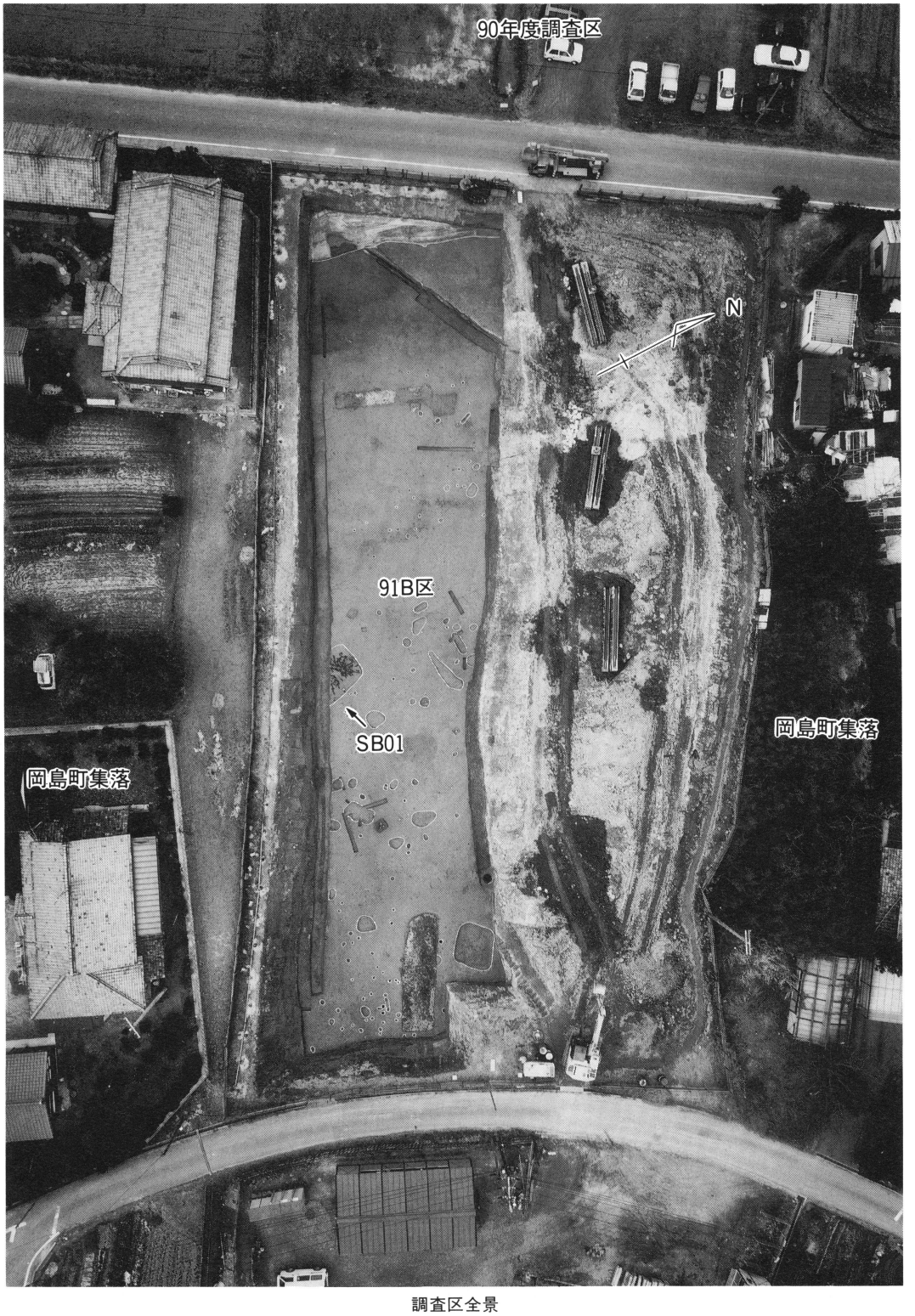
岡島遺跡は、矢作川左岸の沖積低地上の微高地に所在する弥生時代を中心とした集落遺跡である。今回の調査は、平成元年度から開始された国道23号バイパス建設に先立ったもので、面積は2,500㎡である。

調査の概要

本年度の調査区は平成２年度調査区の東方にあたる。調査にあたっては、排土置き場の確保などの理由からＡ・Ｂの２地区に分割した。なお、今回の報告は、本稿を執筆している現在（１月下旬）も調査が継続中である関係上、91Ｂ区の紹介にとどめる。今回の調査で検出された遺構は竪穴住居１棟、土坑90基などがある。このうち特筆すべきは竪穴住居の存在で、プランは長方形を呈するものと考えられる。規模は、確認できた１辺が5.6m。床面では２基の柱穴と炉のほか、放射状に炭化材が分布し、これは垂木などの上部構造材である可能性を持つ。出土遺物には下図に示す台付甕がある。　（池本正明）



第Ⅰ図　竪穴住居　Ⅰ：80



調査区全景

牛ノ松遺跡

調査の経過

幡豆山地の頂部をなす茶臼山（標高290m）から北に伸びる低丘陵は、額田郡幸田町大字須美地内で緩やかな勾配をなして台地へと続き、さらに須美川に至る。牛ノ松遺跡はこの台地上に立地する遺跡で、地籍は大字須美字牛ノ松である。

今回の調査は、国道23号線バイパス建設に伴う事前調査として、500㎡を平成３年６月～８月にかけて実施した。この地は、平成２年２月にも、今回の調査区の東に隣接する場所で調査が行われている。

調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、近世～現代の溝数条、中世の溝数条と掘立柱建物１棟、井戸状遺構１基、多数の土坑である。遺構の分布を見ると、ＳＤ18を境にしてそれ以西には見られない。この溝は、屋敷を囲む溝であった可能性も考えられる。

出土遺物の主なものは、灰釉系陶器（椀・小皿）が大部分であり、土師器（皿）、常滑（甕）、青磁、それに若干の近世陶磁が混じる。平成２年の調査では、これらのものに加えてフイゴの羽口、鉄滓、「上」と書かれた墨書土器が見られる。これらの出土遺物の諸特徴から考えて、この遺跡は鎌倉時代後半期を中心とする集落址と考えられる。

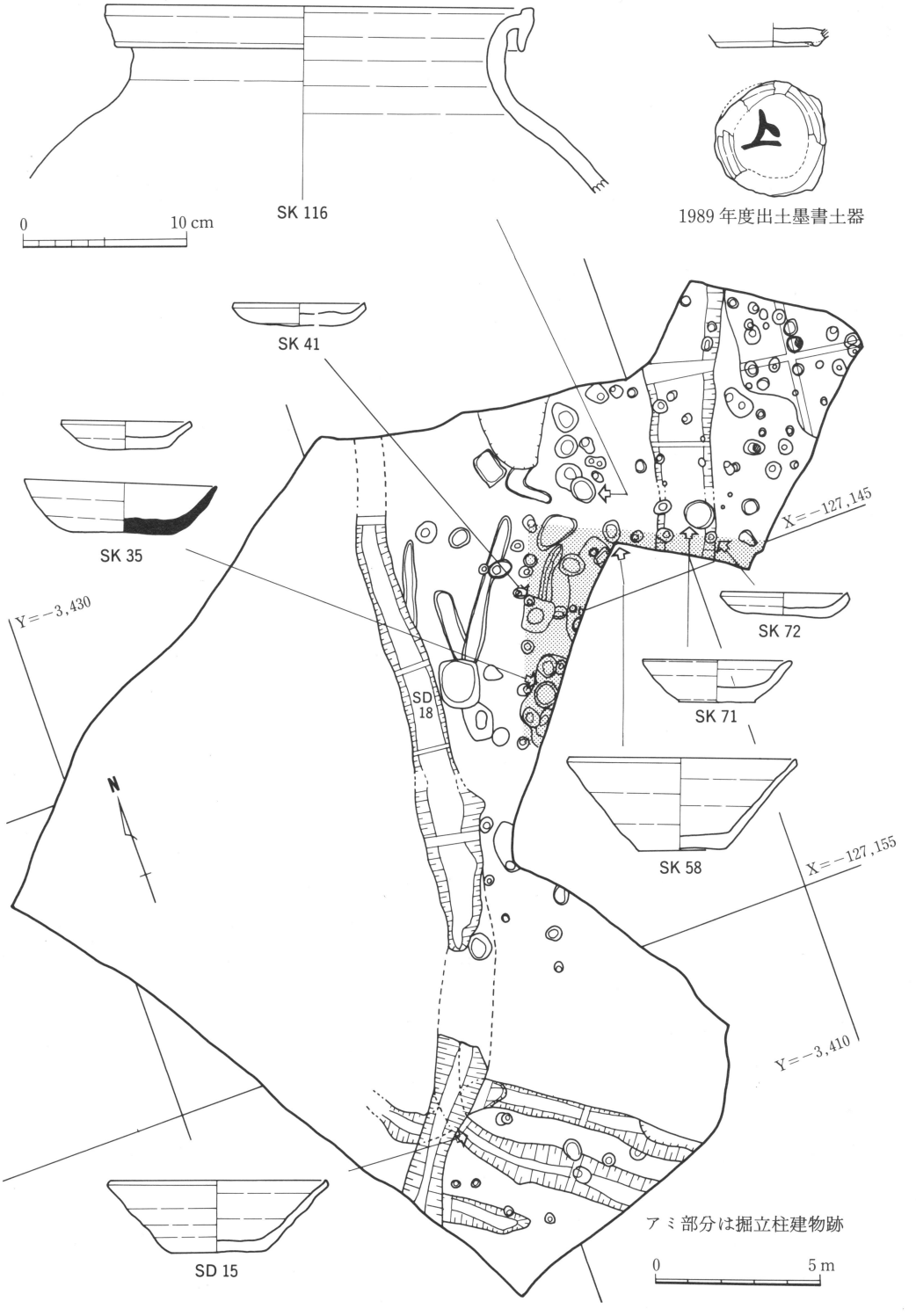
鎌倉時代の初めより、この地は「蘇美御厨」として伊勢神宮領になっており（『伊勢大神宮神領注文』）、権門勢家の地方進出を具体的に追求する上で今回の調査結果は意義を有するものである。より広範囲の遺跡調査及び結果が待たれる。（大橋正明）



調査区全景



井戸状遺構（ＳＫ71）



第 I 図　中世遺構図及び主な出土遺物

伊保（いぼ）遺跡

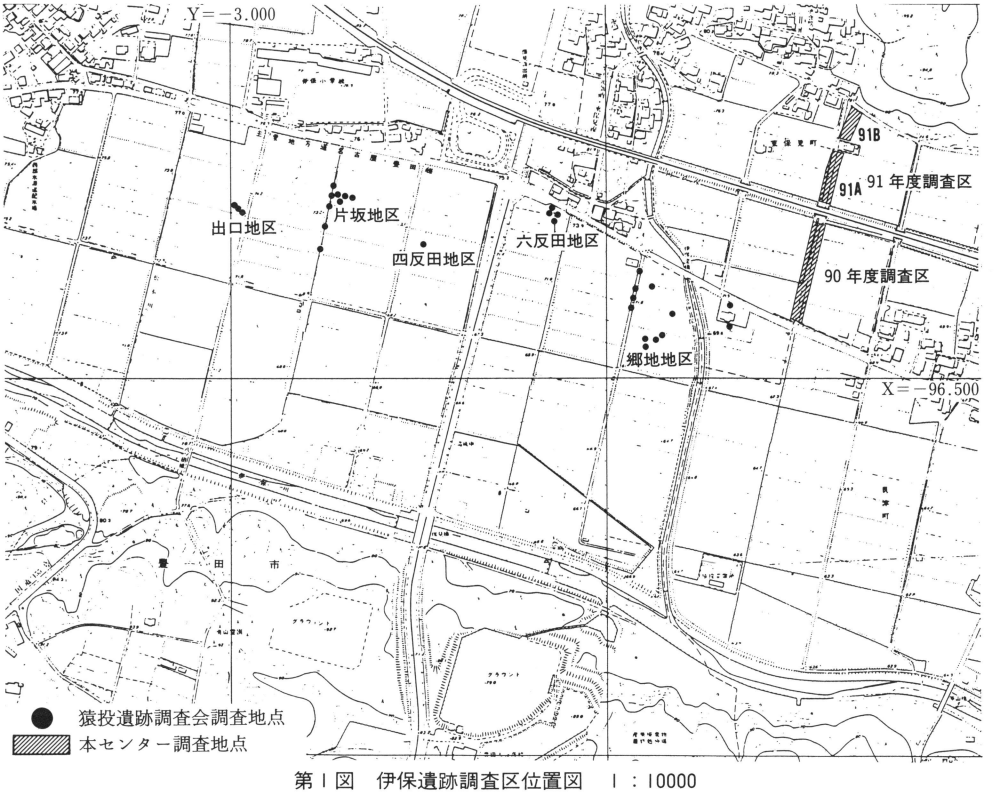
調査の経過

伊保遺跡は豊田市保見町、東保見町に所在し、猿投山から南に伸びる舌状台地南端に東西に細長く立地する。昭和44年に猿投遺跡調査会により調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物、奈良・平安時代の遺物を採集している。

調査の概要

今回の調査は県道加納東保見線建設に伴う事前調査で、東保見町抱六地内において昨年度より継続して行っている。今年度は2調査区（91A・B）を設定したが、91B区は排水溝が調査区の中央を横断しているため、さらに2分割（Ba・Bb）せざるを得なかった（第1図）。面積は1,750㎡である。これまでの調査の成果を昨年度も含め時期ごとに紹介する（第2図）。

・旧石器時代（Ⅰ期）　木葉形尖頭器4点が出土。出土地点は近いもののひとつのユニットを形成する確証は得られなかった。

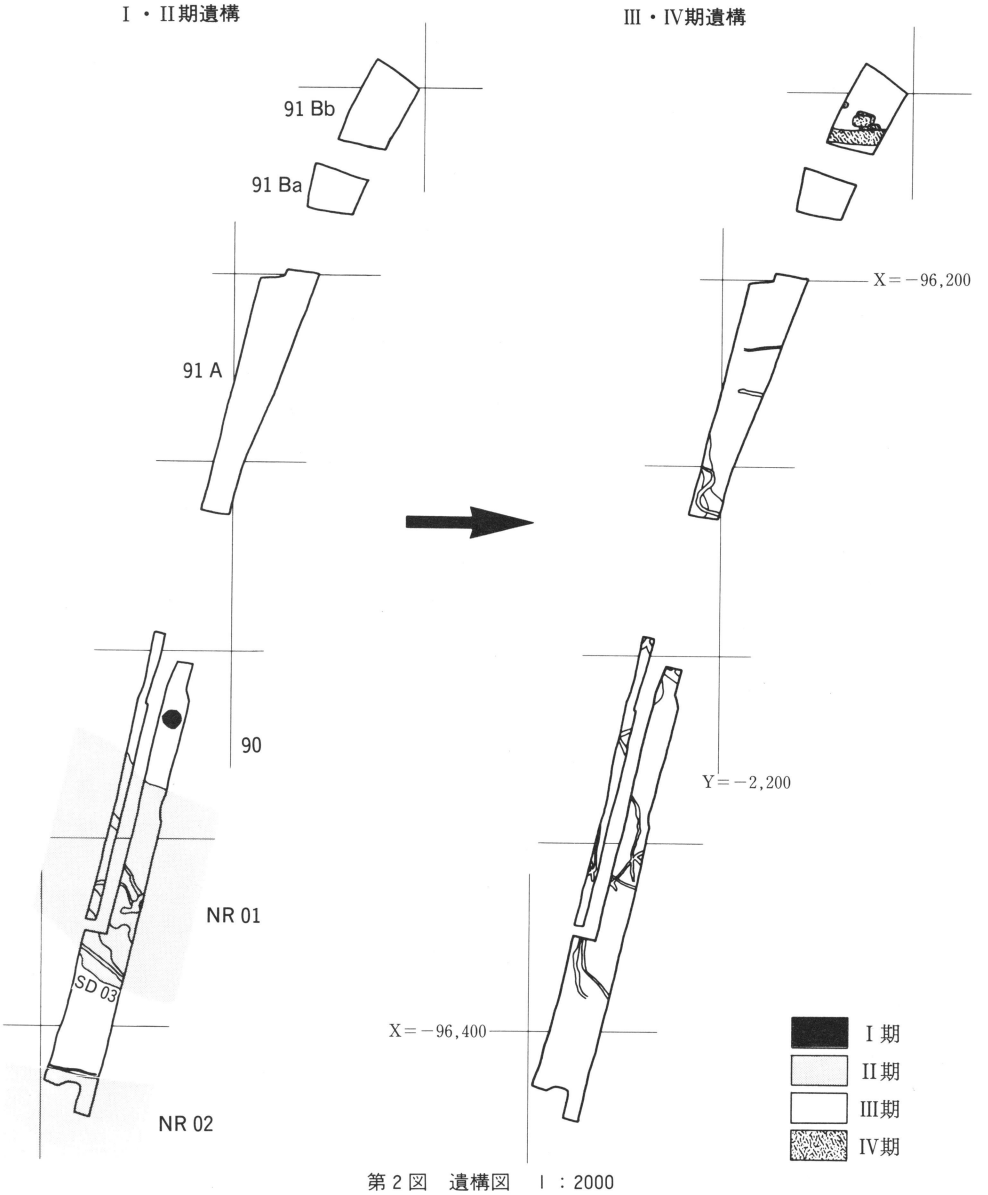


第Ⅰ図　伊保遺跡調査区位置図　1：10000

・弥生時代後期（II期）　自然流路２条（ＮＲ01・02)、溝１条（ＳＤ03）を検出。ＮＲ01はII期にほとんど流れを止めており、その代わりにＮＲ01南肩に沿ってＳＤ03を掘っている。ＮＲ02はIII期まで継続している。伊保遺跡東限と考えられる。

・奈良・平安時代（III期）　溝17条を検出。ただし、時期決定の資料が極めて少なく推測の域を出ない。

・鎌倉時代（IV期）　91Ｂｂ区において検出。集落の一部と思われる。調査途中のため詳細は摑めていない。　（岡本直久）



第２図　遺構図　I：2000

三斗目遺跡

調査の経過

三斗目遺跡は豊田市の東部、坂上町に所在する。

豊田市は矢作川が南流する沖積平野を市域の中央として、その周囲には丘陵地帯が展開している。その東部丘陵地帯を南北に流れる巴川に注ぐ仁王川の形成した開析谷の南斜面に三斗目遺跡は位置している。遺跡は仁王川沿いの谷を本谷としてそれに合流する支谷の形成するＹ字状をなす地区のちょうど合流部にあり、標高は約200ｍを測る。遺跡付近は水田が山裾まで造成され、しかも段差の大きいところも存在していたので、削平された部分のあることが予想された。

本調査は仁王川の改修工事に伴う事前調査として実施したもので、期間は平成３年11月から平成４年３月までの５ヵ月を要した。

調査の概要

三斗目遺跡はすでに『松平町誌』に縄文時代後期の遺跡として紹介されている。豊田市教育委員会による試掘では包含層の存在が確認されていたので、耕作土の表土はぎは注意深く実施した。

調査区の西側約３分の１は包含層はすでに削平されてなく、耕作土直下でベース面の検出となり、そこでは小穴の点在が確認された。東側３分の２では耕作土直下から河原石が露出し、一部は水田床土に突き出していた。河原石には集中地点が認められるとともに、包含層も20cmから30cmほど存在していた。調査区北縁では大量の縄文土器を含む黒褐色土と砂層がラミナを形成する旧河道が検出された。

調査は包含層中での遺構検出が困難であったので、土器・石器などの遺物は出土地点を記録しながら取り上げた。ところどころ集中地点はあったが、１月の厳冬期になると凍結・霜などによって遺物の損傷が著しくなったので、出土状態の記録をとることはきわめて困難であった。包含層は基本的には縄文時代後期に属すのであるが、中世陶器が包含層中に含まれている部分があり、一部中世に攪乱されている可能性を示した。

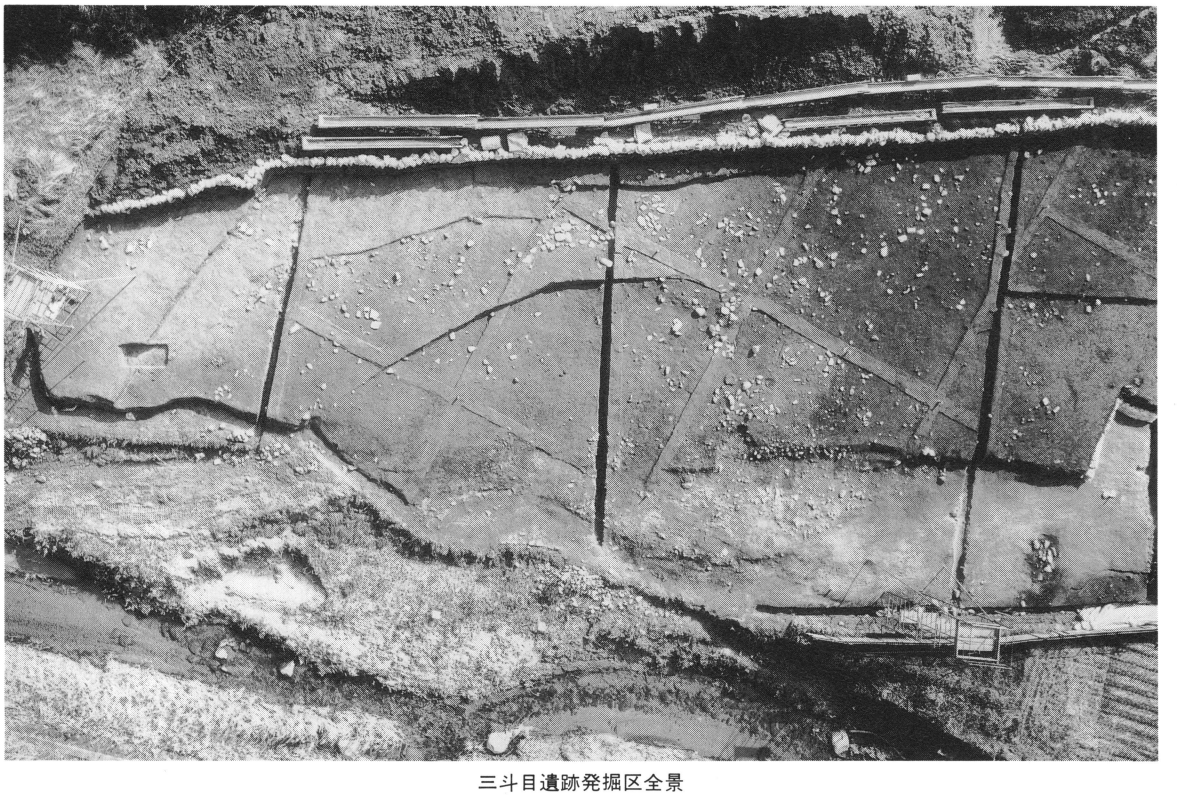
包含層中において検出した集石は、ベース面における掘り込みの有無を確認するまで除去しないで調査を進めた。その結果集石の下部では土坑の検出が相次ぎ、多くの集石が実は土坑埋土上部に置かれたものであることが判明した。しかし、そのことはかえって土坑を伴う集石に、縄文時代ではなく中世に築かれたものが含まれている可能性を生じることになった。実際中世陶器の椀・小皿が置かれた状態で出土した地点があり、包含層も二次

的に移動している部分もあることから、包含層中での遺物のありかたの検討が重要となった。

集石以外に検出された遺構には、包含層下部で検出された土坑、石囲炉および住居跡、ベース面直上に構築された石敷炉があり、これらは縄文時代後期であることが確認された。

ところでベース面は調査区の西部3分の1が砂礫混じりの粘土層、東部は黄灰色砂層であった。さらに深く断ち割った結果、ほぼ調査区に重なって旧河道が検出された。

以上概要を述べたが調査は終了してまもなく、来年度には報告書の刊行を予定しているのでそこで詳しく報告することになろう。　　（石黒立人）



三斗目遺跡発掘区全景

跡ノ口遺跡（あとのくち）

調査の概要

跡ノ口遺跡は稲沢市一色森山町に所在する。低平な尾張平野内に点在する微高地上に位置し、標高は約2mを測る。

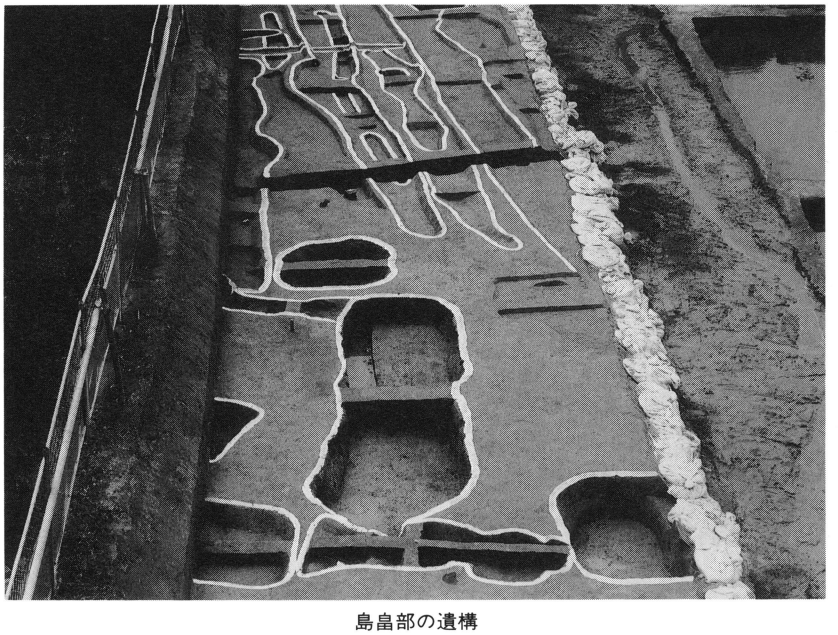
調査は県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、平成3年4月から7月にかけて実施した。

調査区はA・B・Cの三つに分かれ、いずれも島畑と水田の両者にまたがる部分である。このうちC区では何も検出されず、最近まで水田であったことが判明した。遺構・遺物はおもにA・B区で検出された。

A区では中世の大溝のほか古代から中世にかけての土坑が多数検出された。しかし、調査区の約3分の1は最近まで水田であり、そのためほとんど削平されていた。

B区ではおもに中世の土坑を検出した。しかし、ここも農業用水管の埋設や水田の拡張によって遺構が削平されていた。

遺跡付近の島畑は水田を埋め立てて設けたもののほかに、もともとの微高地を畑としていたもののあることがわかった。つまり、現在の島畑点在という景観は、自然堤防を寸断した結果である部分をも含んでいることになる。そして当初から島畑であった部分（微高地）において遺跡が削平を免れていたことが明らかになった。（服部俊之）



島畠部の遺構

一色長畑遺跡

調査の概要

跡ノ口遺跡の東方約500mにあり、付近には島畑が点在し、本遺跡も島畑下に存在する。遺跡の標高は約２ｍを測る。

調査は県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として平成３年６月から７月にかけて実施された。

調査区はＡ・Ｂの二つで、遺構・遺物はおもにＡ区で検出され、Ｂ区は水田造成による削平によって無遺構であった。

遺構・遺物は弥生時代中期末のほぼ一時期に限定され、竪穴住居跡５、土坑数基が検出された。調査区の約５分の１は水田造成によって削平されていた。

竪穴住居跡５棟のうち１棟は焼失家屋のようで、床面上には甕を主体とする土器群が炭化物・焼土とともに散乱していた。また、本住居跡東端の周壁際からは細片となって散らばった磨製石斧（伐採斧）片とチャートの石核などが集中して出土した。

稲沢市周辺は尾張平野の低地帯として沖積作用を強く受けたであろうことが想像できるけれども、今回島畑直下の比較的浅い地点から弥生時代の集落が検出されたことは、島畑の分布、島畑と水田の新旧関係の検討を含めて、改めて遺跡の分布を問う時期にきているように思える。

（服部俊之）



調査区全景



遺物出土状態

不馬入（めいらず）遺跡

調査の概要

不馬入遺跡は、額田郡幸田町大字須美字不馬入に所在する。遺跡は幸田町の西端、幡豆山塊の谷裾北向き斜面（標高約53m）に立地し、周辺には雑木林、果樹園、畑地、山林が広がっている。

調査は国道23号線バイパス建設工事に伴い、平成３年４月より６月まで実施した。調査区は旧畑地であったが、平坦面を確保する際削平された部分と盛られた部分がみられ、堆積状況は単純ではなかった。

基本層序を概観すると、調査区東側の低い部分には現代の客土が厚く盛られており、中央部では耕作土が、西側では礫混じりの整地層が堆積していた。削平された部分では黄褐色砂質シルト層、赤褐色シルト（通称「山砂」）層、岩盤層が検出でき、さらにこの平坦面を広く確保するために、低い部分には礫混じりの整地層が同時期平坦面として認められた。この面から検出された遺構は、土坑23基、溝３条、井戸２基、石列等であった。これらの遺構から検出された遺物は、いずれも18～19Ｃにかけての陶器、磁器などでありこの遺構面の造成時期を示唆している。

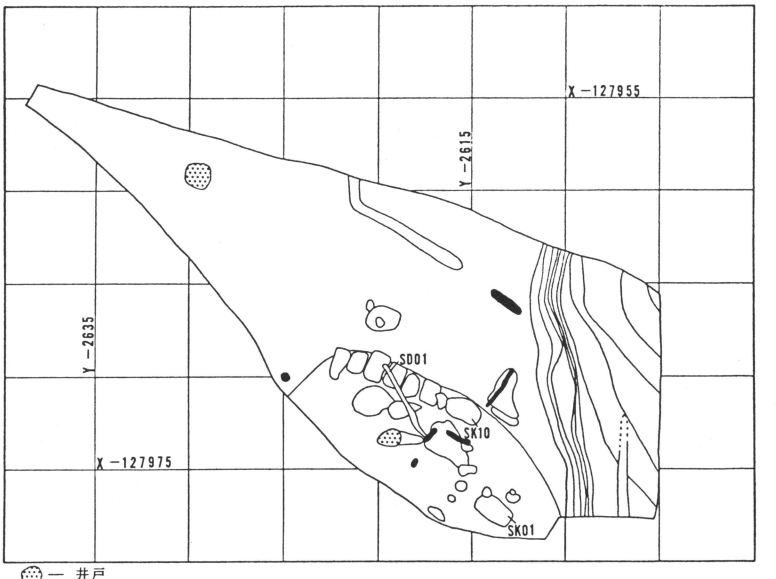
調査区は旧平坂街道沿いの集落からは離れた地点に位置しており、調査区内にみられる遺構、遺物とも考え合わせ、現在その性格を検討中である。　　（松田　訓）



作業風景



全景（南西より）



第１図　調査区遺構図

高樋（たかとい）遺跡

調査の概要

高樋遺跡は、豊田市東部の山間部、坂上町に所在し、矢作川の支流の巴川に注ぐ仁王川によって形成された南向きの斜面に立地している。仁王川の約１km下流には、ほぼ同時期に調査された三斗目遺跡・三本松遺跡がある。今回の調査は、県道坂上・花沢線の拡幅工事にともなう事前調査として実施された。

道路にそった細長い調査区の東端は水田を開くために削平され、西端は現代の耕作土の直下が旧河道となっている。これらの部分を除いて、地表から約80cmの部分に黒灰色土層があり、この層から縄文土器や石器が約500点ほど出土した。土器は早期のものが中心であったが、ほとんどが小さな破片であり、器形の復元は困難である。またこの包含層からさらに80cm下の、仁王川の氾濫によって堆積したと思われる灰白色砂質土の上面から、早期の押型文土器が１個体出土している。

遺構は、調査区の西の旧河道に接する部分で、土坑がひとつ発見されたのみであった。この土坑の埋土の最下層からも早期の押型文土器と石鏃などが数点出土している。土坑の全形はわからず、性格も不明である。

遺物の出土状態や地形から、この遺跡は斜面からの崩落による遺物の二次散布地でないかと思われるが、調査区の南の仁王川に面した平坦な水田の部分に遺構が広がっている可能性も考えられる。（余合昭彦）



調査区全景



石匙出土状況

三本松遺跡

調査の概要

三本松遺跡は、豊田市坂上町を東西に流れる仁王川に、南北から沢が流れ込む地点の近くに所在する。平成２年12月に仁王川の河川改修に先立つ豊田市教育委員会の試掘調査によって遺跡の存在が確認され、平成４年１月から３月にかけて本センターが事前調査として発掘を行った。調査面積は940㎡である。なお約500ｍ東には、ほぼ並行して調査された三斗目遺跡がある。



調査区遠景（北より）

調査区は、北向き斜面の山裾の部分にそって設定されており、仁王川によって形成された自然堤防と後背湿地にあたる。調査前の地目は水田である。後背湿地であった部分は粘質土が約１ｍ堆積し、山腹から崩落したと思われる石が散乱している。自然堤防上には、水田を開くために削平されて砂層が露出している部分を除いて、約30㎝の厚さで黒褐色シルトの遺物包含層がある。この包含層からは、縄文時代晩期の土器や石器の他に、中世の灰釉系陶器が出土している。包含層を取り除くと小型の土坑やピットが検出された。土坑の中には住居址かと思われるものもあるが、現時点でまだ調査は終了しておらず、詳細は不明である。

（余合昭彦）



調査区全景（東より）



石皿出土状況

坂口（さかぐち）遺跡

調査の概要

坂口遺跡は、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在する。遺跡は矢作川によって東西方向に形成された谷地形の左岸、河岸段丘高位面に位置し、川に向かう北向きの緩斜面（標高約114m）に立地している。調査は県道島崎豊田線拡幅工事の事前調査として、平成３年10月から平成４年１月まで行われた。

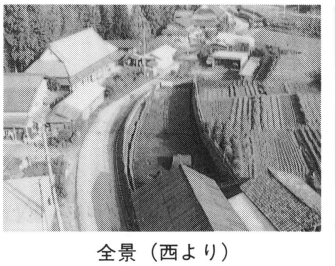
基本層序を概観すると、旧畑地の耕作土約30cmの下に明灰褐色粗粒砂層があり、この下に粗粒砂ブロックを多量に含む灰褐色シルト層が約30cm堆積している。このローリングを受けたと思われるシルト層の直下に、80～100cmの厚さで黒褐色シルト層が堆積しており、縄文早・前・中・後・晩期の土器、石器等がこの層に含まれている。この層内は肉眼による分層が不可能であり、遺構も検出し得なかった。したがって任意による分層（約10cm）でこの包含層を掘り下げた後、最終検出面では土坑状の落ち込み等を検出し得たが、遺構に伴う遺物は希少であった。

今回調査を行った坂口遺跡の遺構、遺物は、矢作川流域における縄文時代の文化動態を窺う上で貴重な資料になるものと思われ、古環境復元のための科学的分析も含め現在整理検討中である。

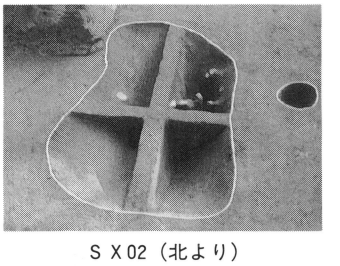
（松田　訓）



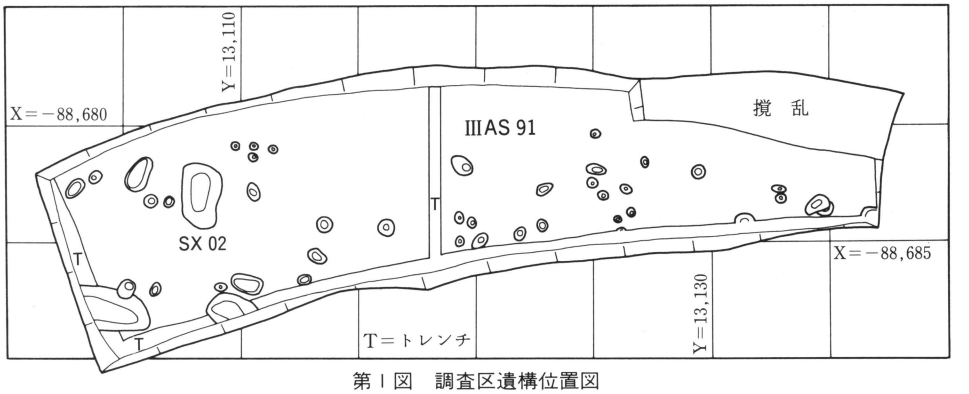
遠景（南東より）



全景（西より）

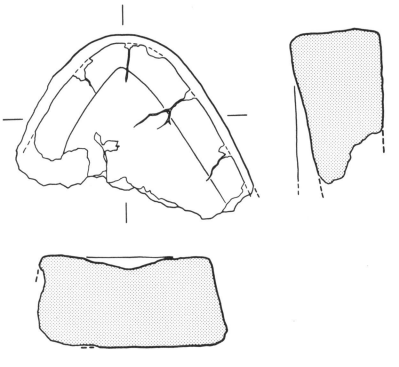


ＳＸ02（北より）



第Ⅰ図　調査区遺構位置図

愛知県西尾市
清水遺跡発掘調査報告
—90A・B区の概要—



清水遺跡90B区SK36出土挌先鋳型 I：8

例　言

1　本報告は、愛知県西尾市中畑町字清水に所在する清水遺跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査は、矢作川中畑橋の架け替えによる県道平坂・福清水線の付け替え工事に伴う事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた㈶愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、㈶愛知県埋蔵文化財センターの山田　基（調査課主査）尾野善裕（同嘱託員）が担当し、平成２年12月～平成３年３月に実施した。

4　調査に際しては、次の関係諸機関、諸氏の御指導・御協力を得た。
愛知県土木部・愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・西尾市教育委員会文化係松井直樹氏

5　調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。

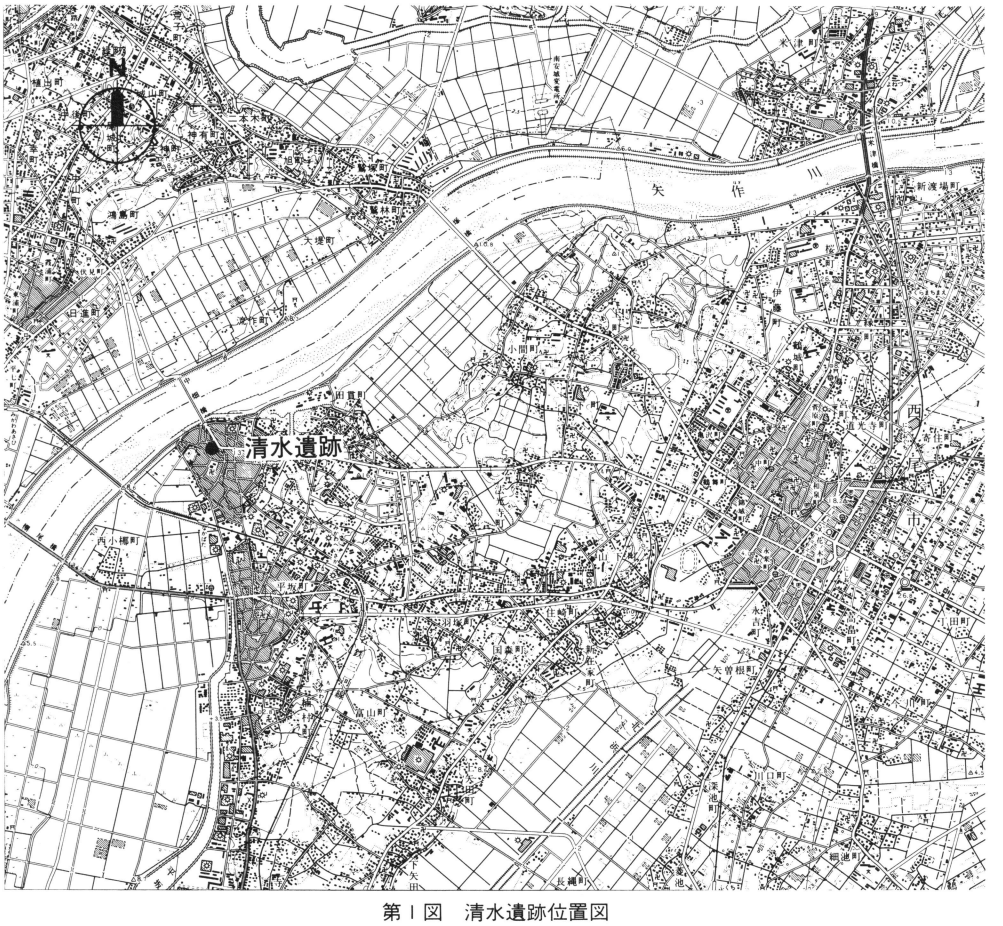
6　記録作成・遺物整理・製図にあたっては次の方々の協力を得た。
阿部小百合・都築睦美・鈴木香里・石川倫子・山本章子・志賀三津江
稲垣智子・伊佐治民子・加納かず子・斎藤夏美・新美厚子・久永弘子
堀田可代子・三輪はつえ・鋤柄智子・三浦由美・高橋美保・斎藤理
内山伸也・岩越園江

7　本報告は、調査課長加藤安信の指導の下、主としてⅠ・Ⅱを山田が、Ⅲ・Ⅳを尾野（現名古屋市見晴台考古資料館学芸員）が分担し、全体を山田が編集した。

8　調査記録は㈶愛知県埋蔵文化財センター、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター収蔵庫にて保管している。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

清水遺跡は西尾市の西部、西尾市中畑町字清水を中心とした地域に広がる。矢作川を挟んで碧南市に隣接し、矢作川の現河口まで約５kmの矢作川左岸、標高７mの碧海台地（洪積台地）の縁辺部に位置する（第１図）。中世以前は現在の油ヶ淵から西尾市米津町にかけての低地には海域が入り込んで狭い湾になっており、清水遺跡の立地する碧海台地の南北の縁辺は直接三河湾に面していたと考えられる。慶長十年（1605年）に流路の変更がなされ、矢作川は清水遺跡の位置する台地の縁辺を流れるようになった。その結果、矢作川の堆積作用が三河湾に向かって急速に進み台地の縁辺より海域は離れ、さらに江戸時代中期以降は新田開発が進み、海岸線は清水遺跡の乗る台地縁辺から遠のいていった。そして生産性の向上につれて台地上にはより大きな集落が形成されていき、こんにちみられる家並群につながってきているものと考えられる。



第Ⅰ図　清水遺跡位置図

II　発掘調査に至る経緯と調査の経過

1．調査にいたる経緯

清水遺跡は、愛知県西尾市中畑町字清水を中心とした地域に位置する。

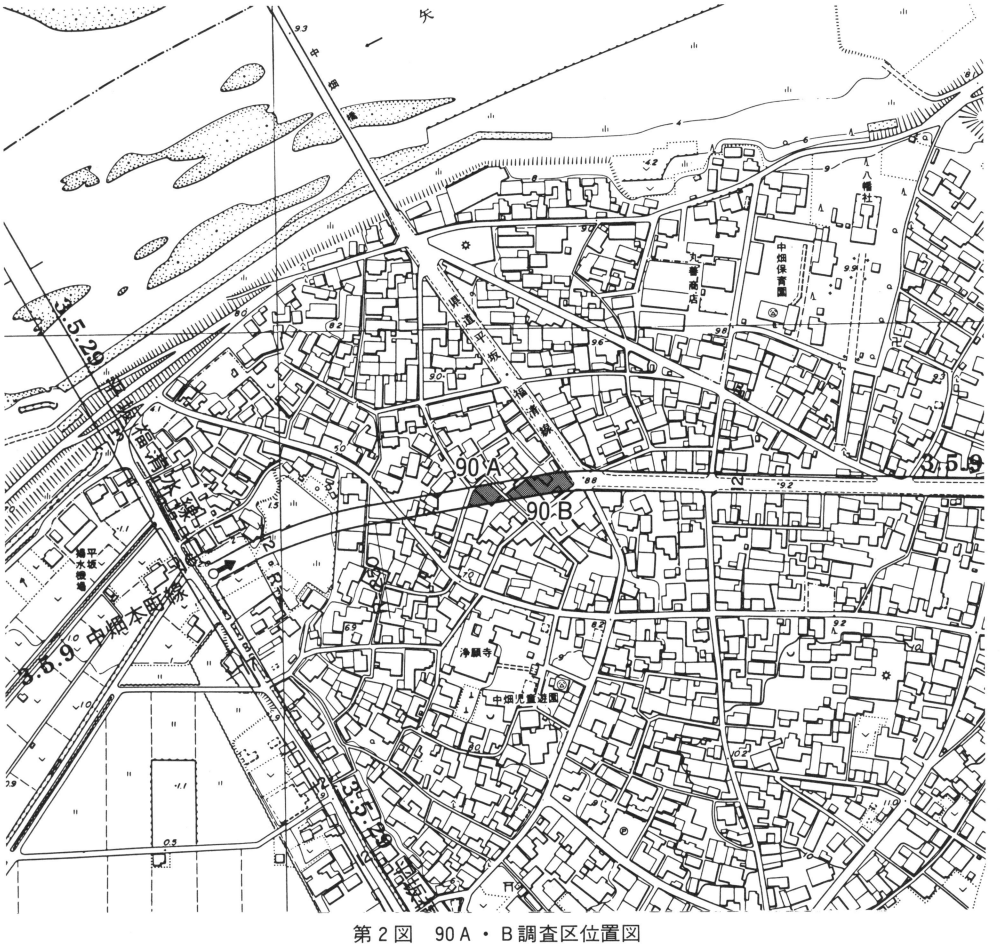
愛知県土木部は、西尾市と碧南市の境界を流れる矢作川にかかる中畑橋の老朽化と交通量緩和のために、中畑橋を下流に付け替え、新たに県道平坂福清水線と中畑本町線を建設することを計画した。この道路建設予定地の近くには、「清水貝塚」（県遺跡番号55049）として昭和20年代よりその存在が知られている遺跡があり、昭和25年及び31年には南山大学人類学研究所によって調査がなされ、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されている。こうした経緯から、道路建設予定地内にも遺跡が広がっていることが予想され、そのため遺跡範囲を確認する目的で愛知県教育委員会は、道路用地内において昭和63年12月に試掘調査を行った。この結果南山大学の調査地区の西側の沖積面において平安時代の遺物包含層を、若干距離の離れた東側の碧海台地直下の沖積面において縄文時代前期の遺物包含層を、また台地上において中近世とみられる貝層を確認した。これにより従来考えられていた範囲より遺跡は広がり、碧海台地上にも遺跡が存在することが予想されるにいたった。

これらの経緯を経て愛知県教育委員会を通じて県土木部からの委託を受けた㈶愛知県埋蔵文化財センターが平成元年11月から平成２年３月まで道路予定地内2600㎡の発掘調査を実施した。当初計画では試掘調査によって確認された3480㎡が調査範囲であったが、用地未買収となった台地東端の880㎡については、平成２年度まわしとなり、平成２年12月から平成３年３月までの期間で調査を実施した。平成元年度調査分2600㎡については、平成２年度事業として調査報告書（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第25集『清水遺跡』）を作成したが、880㎡の成果はこれに載せることができなかった。このため、その成果をここに報告するものである。

2．調査の経過

平成２年度調査区は、平成元年度の調査区89Ｂ・Ｃ区の東側に位置し、排土処理と生活排水路・生活道路確保の面から大きく90Ａ・Ｂの２区に分けて設定した（第２図）。

平成２年11月末に準備にとりかかり、12月に90Ａ区より表土はぎを実施し調査を開始した。各調査区の面積・調査期間は第１表のとおりである。



第2図　90A・B調査区位置図

調査区	調査面積	1990 11	1990 12	1991 1	1991 2	1991 3
90A	380m²		表土除去	調査	埋め戻し	
90B	500m²					

第1表　調査工程表

III　調査結果

1．90A区

(1)基本層序（第3図）

①表土・攪乱層、②近世整地層③地山層の3層に大別できる。②層はさらに細分が可能であり、近世を通じて幾度かの整地が繰り返されたことが窺われる。

遺構は、②層の中間、もしくは上面から掘り込まれているものが多く、②層の下面からの掘り込みと考えられる遺構は、SK17・144の2基のみであった。

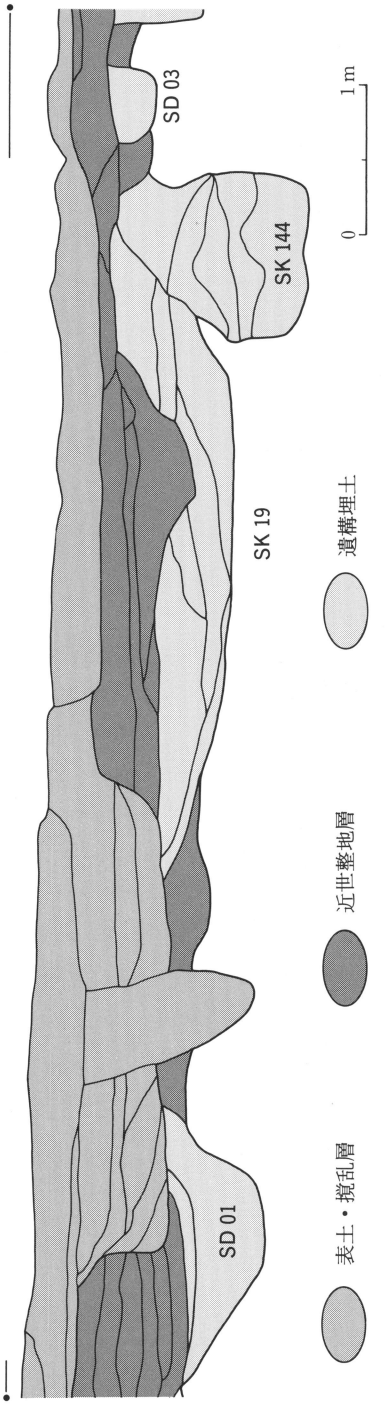
(2)遺構の概要（第4図）

溝5条・土坑約150基を検出した。

溝は、いずれもほぼN－40°－Wの方向性を有する点で共通する。土坑は大半が平面円形で直径0.2～0.8mの小土坑で占められているが、他に深さ1mを越えるSK17・31・144、平面形の長軸が1.5m以上のSK18・19などの大型土坑がある。

小土坑は、溝と同じN－40°－W、もしくはこれと直交するN－50°－Eの方向性で並ぶ傾向があり、溝となんらかの有機的関連があるものと考えられる。従って、これを溝によって区画された敷地内の掘立柱建物の痕跡と捉えることもあながち不当ではないと思われるが、明確な柱痕跡が検出されていないため断定は避けたい。

また、小土坑内に偏平な形状の石が埋設されているSK01・43・44・143およびSD03については、直線的な配列を示していることから、礎石建物の一部である可能性があるが、間隔が不



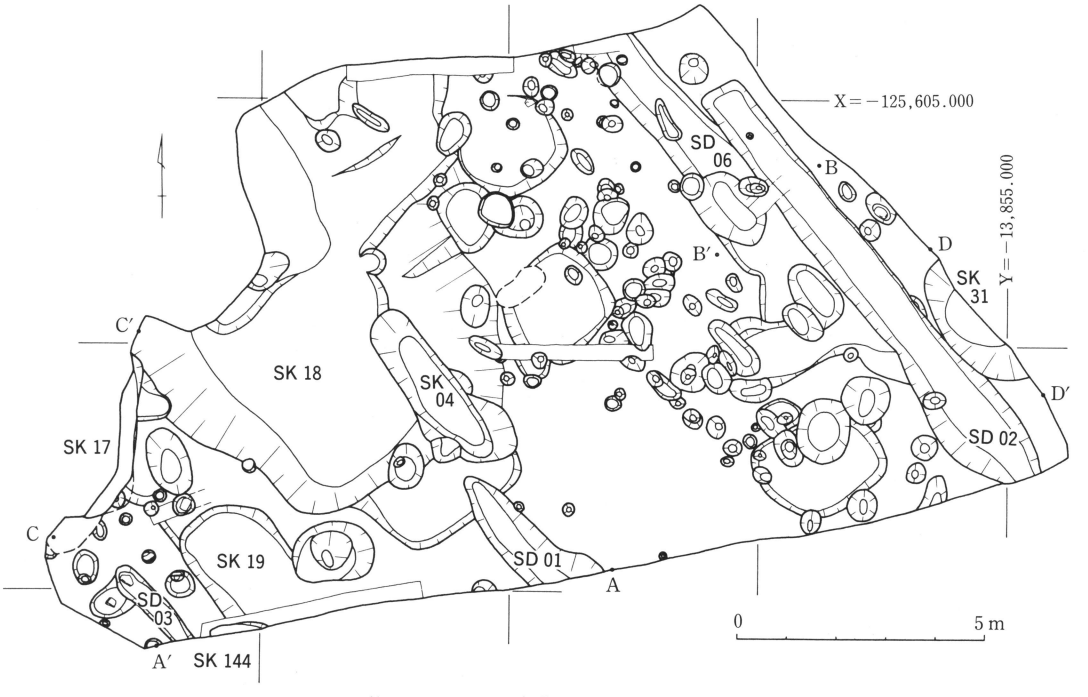
第3図　90A区南壁土層断面図　1：100

均等であり、レベルも一定していないため判断は留保しておきたい。

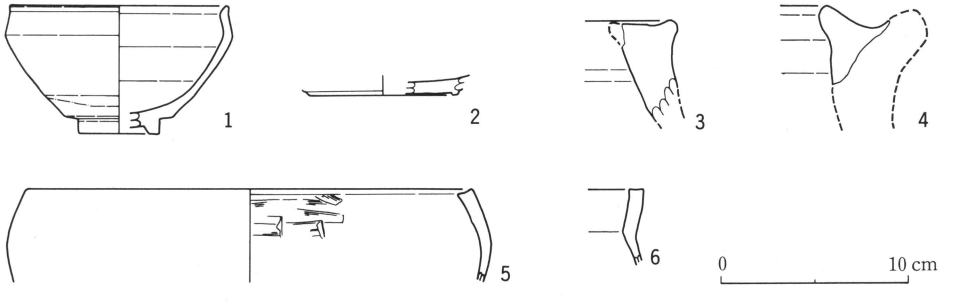
次に、主要遺構（溝・大型土坑）についてやや詳しく記す。

ＳＤ01（第５図）

最大幅1.0m、深さ0.4m。埋土は褐灰色土を少量交えるハマグリ・アサリ・カキ・サルボウ・ウミニナ科からなる貝層の単一層。掘り込み面は、先に述べた近世整地層の細分した最下層の上面であり、Ａ区の中では比較的古い時期に位置付けられる遺構である。瀬戸・美濃陶器の天目茶椀（１）・志野丸皿（２）、常滑焼の甕（３・４）、土師質土器の鍋（５・６）の他、鉄滓、被熱礫等が出土している。出土遺物の示す年代観は、概ね17世紀代の



第４図　90Ａ区遺構平面図　１：150

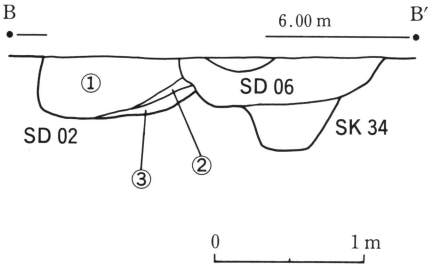


第５図　ＳＤ01出土遺物実測図　１：４

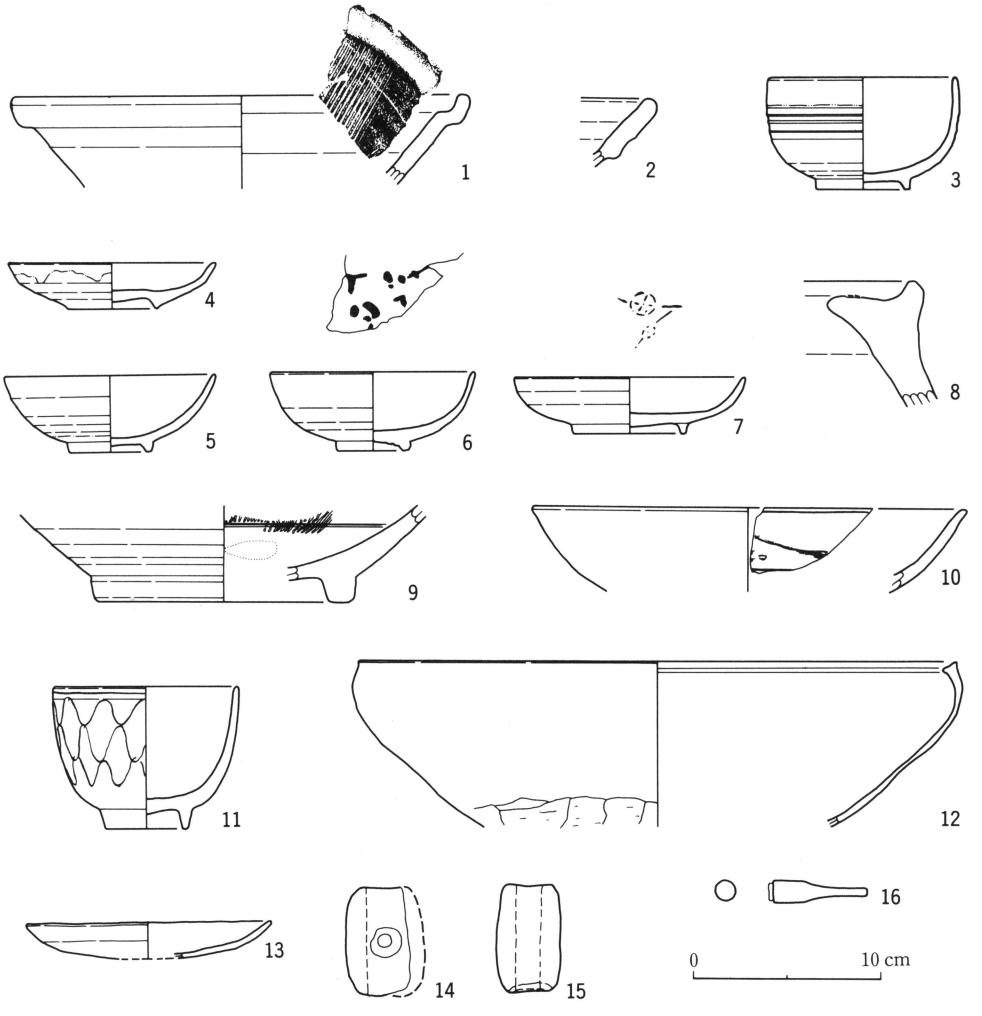
範囲に収まることから、遺構の埋没時期については17世紀後葉と考えたい。

ＳＤ02（第６・７図）

幅1.0m、深さ0.4m。断面形態は隅丸方形を呈し、西方の肩をＳＤ06に切られる。埋土はアサリを主体としてカキ、ウミニナ科の混じる混土貝層（第６図①）の上層と、にぶい黄橙色土層（同②）・灰褐色土層（同③）の下層に大別でき、遺物のほとんどが上層から拳の大きさ程度の礫と共に投棄された状態で出土している。



第６図　ＳＤ02土層断面図　Ｉ：50



第７図　ＳＤ02出土遺物実測図　Ｉ：４

人工遺物には瀬戸・美濃陶器の擂鉢（１・２）・腰錆茶椀（３）・鉄釉皿（４）・灰釉皿（５）・梅文皿（６）・御深井釉摺絵皿（７）、常滑焼の甕（８）、肥前系陶器（唐津）の鉢（９）、肥前系磁器（伊万里）の皿（10）・碗（11）、土師質土器の鍋（12）・炮烙・皿（13：非ロクロ成形）の他、管状土錘（14：常滑焼・15：土師質）、煙管（16）等がある。自然遺物としては、上記貝類の他に小獣骨（或いは鳥骨か？）が出土している。出土遺物の示す暦年代は、肥前系陶磁器が概ね18世紀代であるのに対して、瀬戸・美濃陶器では梅文皿等の存在から18世紀末～19世紀前半とやや新相となる傾向がある。

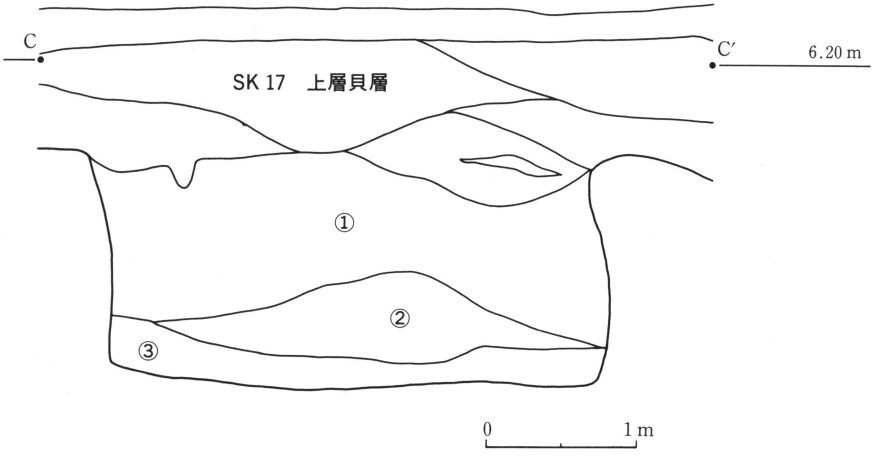
ＳＤ03

幅0.5m、深さ0.3m。埋土は黒褐色土が僅かに混じるハマグリ主体の貝層。人工遺物は全く出土していない。

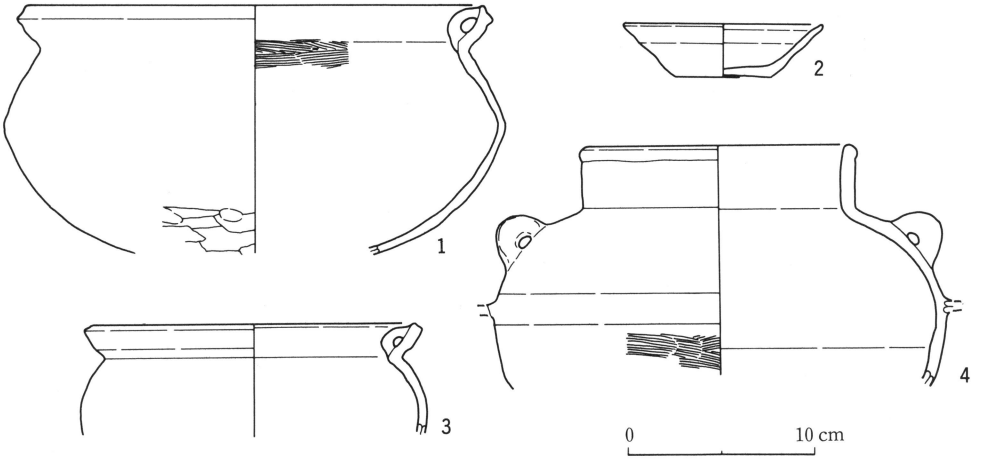
ＳＫ17（第８・９図）

遺構が調査区域外まで広がっているため、平面形の全体像を窺い得ないが、検出部分から推定すると一辺3.3m前後の隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さは1.6m。遺構上面を削平されている可能性もあるため、本来の掘り込み面は検出面よりさらに上位にあったことも考えられる。埋土は、上層から①灰黄褐色土層、②カキ・アサリ・ハマグリ・ウミニナ科から成る黒色土混じりの貝層、③黄褐色砂質土層の３層に分かれている。このうち①層は地山質のブロック土で、堆積状況から人為的な埋め戻し土と判断される。

出土した人工遺物は僅少で、①層（ＳＫ17中間層）から土師質土器の鍋（１・３）・茶釜形羽釜（２）・皿（４：ロクロ成形）が出土しているに過ぎない。③層は全くの無遺物層である。尚、①層より上位に堆積していた混土貝層をＳＫ17上層として遺物取り上げを行ったが、これはＳＫ17埋没後の整地層と考えられるため、ここでは除外しておく。



第８図　ＳＫ17土層断面図　１：50



第９図　ＳＫ17出土遺物実測図　１：４

ＳＫ17の性格については、②層に貝層が形成されており、一時廃棄物処理坑として利用されていたことが知られるが、埋土最下層の③層が無遺物層の自然流入土とみられることから、掘削した当初の目的は別にあったと考えられる。従って、ＳＫ17の開削から埋没に至る経過には少なくとも次の４段階があったものと推定される。

１．廃棄物処理以外の目的で開削

２．土砂の自然流入による③層の形成

３．廃棄物処理坑への転用（②層の形成）

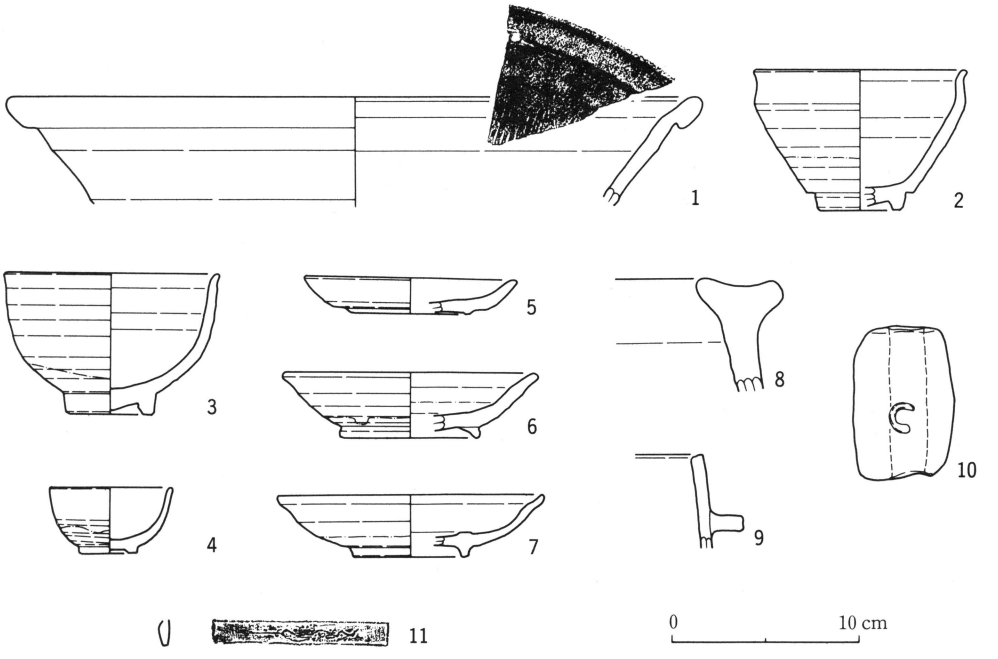
４．地山質土による人為的埋め戻し（①層の形成）

遺構の開削、埋没時期については、出土の人工遺物が未だ編年の確立していない土師質土器のみであるため不確定要素を多分に含むが、鍋の形状からみて戦国時代（16世紀前半）にまでさかのぼる可能性がある。

ＳＫ18（第10図）

平面不整形を呈する大型土坑。ＳＫ17や後述のＳＫ31・144と異なり、深さ0.8mと浅いが、広い面積を掘り込んでいる。埋土はアサリを主体とする混土貝層（ＳＫ18下層）である。埋土の上面には、赤褐色土層（ＳＫ18中間層）を介在して、さらに混土貝層（ＳＫ18上層）の堆積が認められたが、これは赤褐色土層と共にＳＫ18埋没後の整地層と考えられた。従って、赤褐色土層より下層の混土貝層（ＳＫ18下層）中の遺物のみが本来的にＳＫ18に伴うものと見なされる。

人工遺物としては、瀬戸・美濃陶器の擂鉢（１）・天目茶椀（２）・鉄釉丸椀（３）・鉄釉小椀（４）・志野丸皿（５）・輪禿皿（６・７）、常滑焼の甕（８）、土師質土器の羽釜（９）、管状土錘（10：常滑焼）、小柄の柄（11）等がある。出土遺物の年代観からみて、



第10図　ＳＫ18出土遺物実測図　Ｉ：４

遺構の埋没は、18世紀代と推定される。

ＳＫ19（第11・12図）

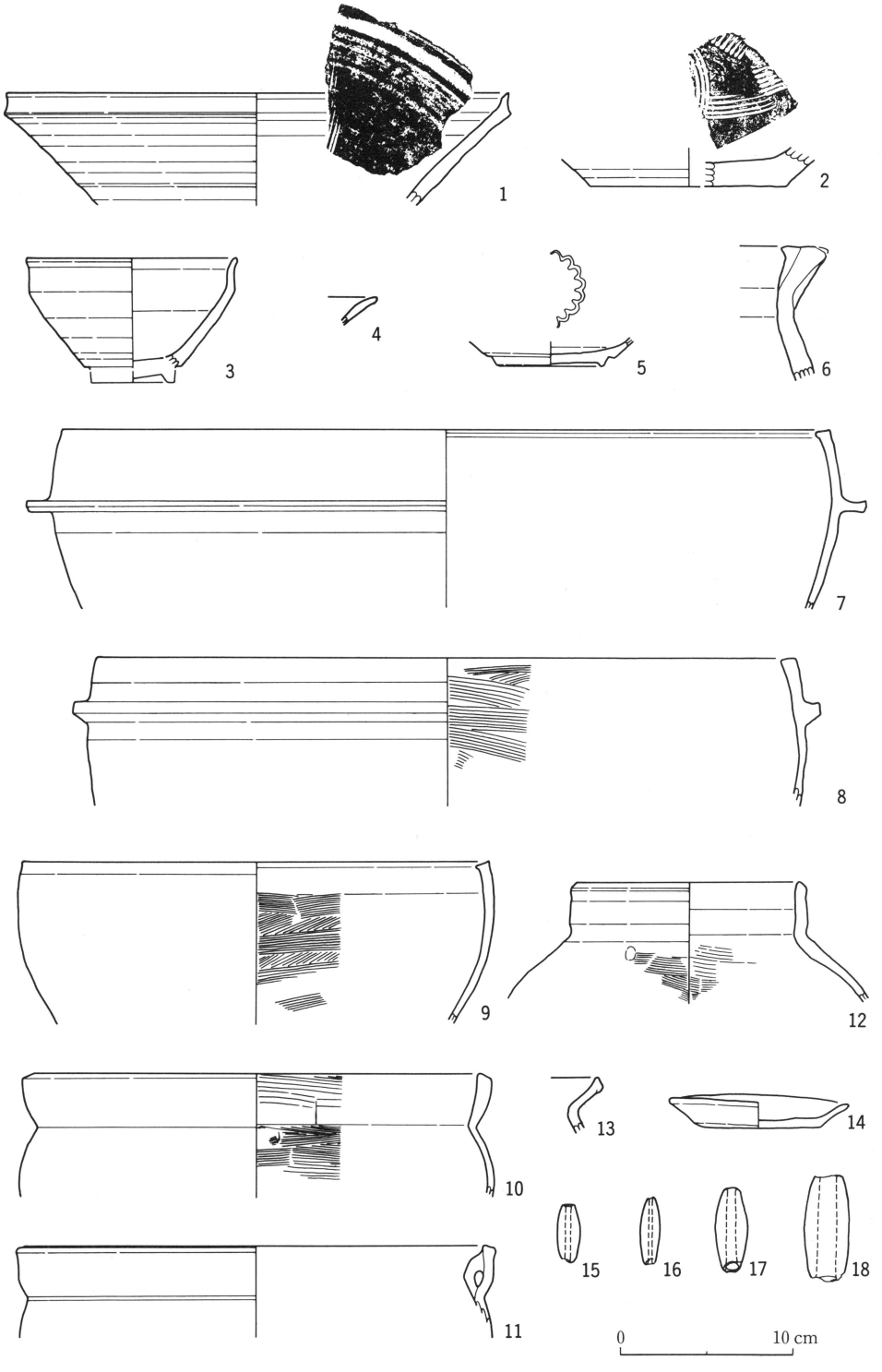
長径４ｍ以上、深さ0.7ｍの平面不整形土坑。埋土は、ハマグリ・カキ・アサリ・シオフキ・ウミニナ科から成る混土貝層の上層（第３図①）と、褐色系土層の下層（第３図②～⑥）に大別でき、下層は色調によりさらに細分が可能である。

遺物は、上層と下層に分けて取り上げを行っているが、いずれも焼土塊や被熱礫と共に投棄された状態で出土した。

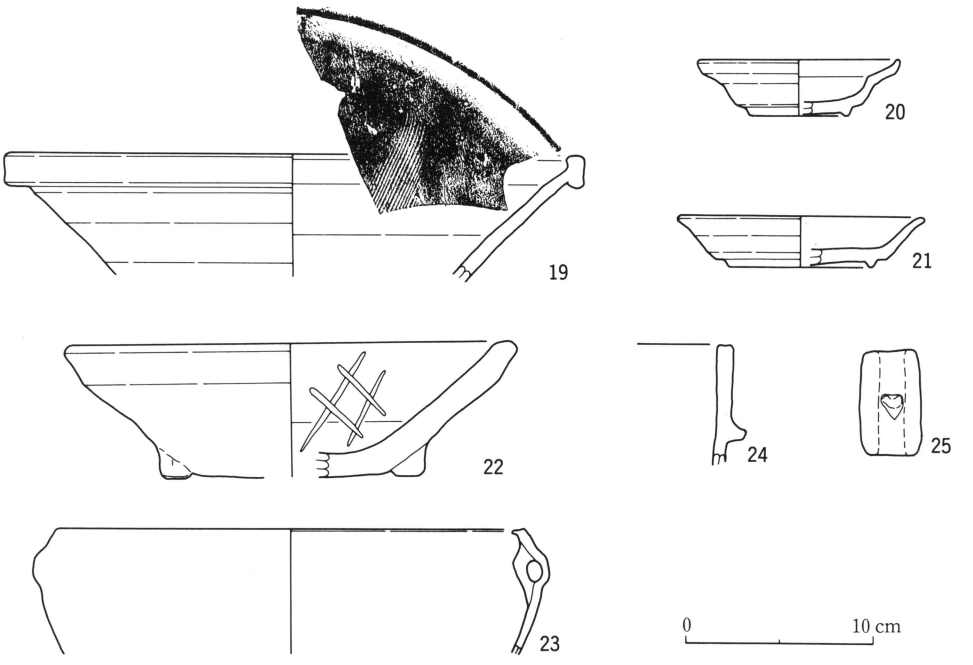
下層からは、瀬戸・美濃陶器の擂鉢（１・２）・天目茶椀（３）・稜皿（４）・志野丸皿（５）、常滑焼の甕（６）、土師質土器の羽釜（７・８）・鍋（９～12）・皿（14：非ロクロ成形）、管状土錘（15～18：土師質）、鉄滓等が出土している。

一方、上層出土の遺物には、瀬戸・美濃陶器の擂鉢（19）・志野折縁皿（20）・反り皿（21）、常滑焼の鉢（22）、土師質土器の鍋（23）・羽釜（24）、管状土錘（25：常滑焼）等の他、自然遺物として上記貝類以外に獣骨がある。

出土遺物には、下層の一部に16世紀代にさかのぼるものが少量あるものの、他は上・下層共17世紀代に収まっており、確実に18世紀代に下るものはない。従って、遺構の埋没時期は17世紀後半と考えられる。



第11図　ＳＫ19下層出土遺物実測図　１：４

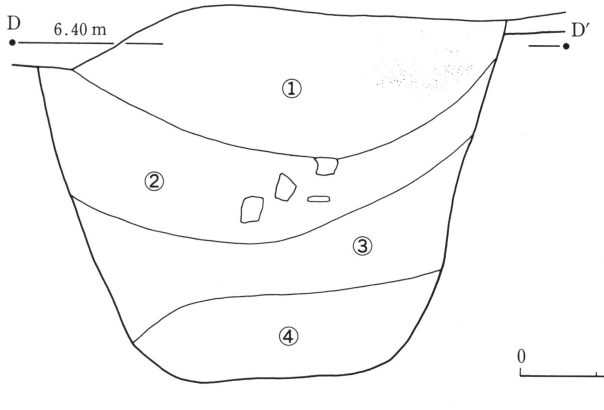


第12図　ＳＫ19上層出土遺物実測図　１：４

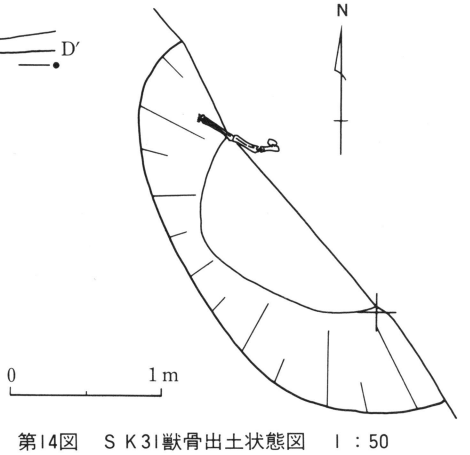
ＳＫ31（第13・14・15図）

深さ2.4mの大型土坑。埋土は上層から、①アサリを主体とし、カキ・マテガイ・ウミニナ科の混じる混土貝層、②黄褐色土層、③褐色砂質土層、④灰黄褐色砂質土層の４層に分かれる。このうち②層には、拳大～人頭大の礫多数が含まれており、獣骨・陶磁器類等遺物の多くがこの層から出土している。

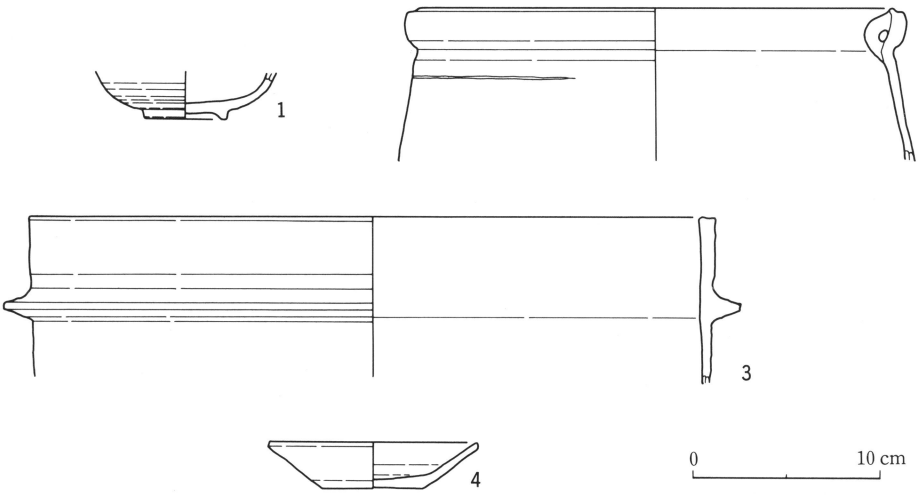
出土した人工遺物には、瀬戸・美濃陶器の腰錆茶椀（１）、土師質土器の鍋（２）・羽釜（３）・皿（４：ロクロ成形）、いぶし瓦等がある。出土遺物の年代観からみて、遺構の埋没時期は18世紀代と推定される。



第13図　ＳＫ31土層断面図　１：50



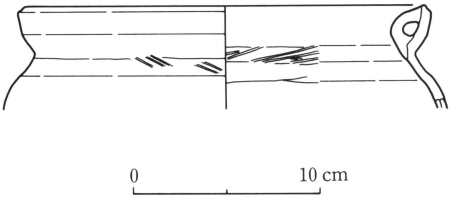
第14図　ＳＫ31獣骨出土状態図　１：50



第15図　ＳＫ31出土遺物実測図　１：４

ＳＫ144（第16図）

深さ1.3mの大型土坑。前述のＳＫ19に遺構上面を切られているため、本来の掘り込みはさらに深かった可能性が高い。埋土は上層から、①灰褐色～橙色を呈する地山質ブロック土層、②ハマグリを主体とし、カキ・アサリを含む混土貝層、③褐色土層の３層に大別できる。



第16図　ＳＫ144出土遺物実測図　１：４

人工遺物は、①層中から土師質土器の鍋（１）が出土しているのみである。

ＳＫ144は遺構の規模がやや小型である点を除くと、埋土・出土遺物のあり方共ＳＫ17に酷似しており、遺構の性格・時期が共通しているものと考えられる。

2． 90B区

(1)基本層序

調査区のほぼ全面にわたって、遺構検出面である地山面直下が表土・攪乱層で覆われており、90A区でみられた近世整地層は調査区東端で僅かに認められたに過ぎない。調査区域内の2ヶ所で、地山層に及ぶ重機掘削痕跡が検出されていることからみて、本調査区は近年の整地に伴って大規模に攪乱を受けたことにより、包含層（近世整地層）の大半が失われているものと考えられる。

(2)遺構の概要（第17図）

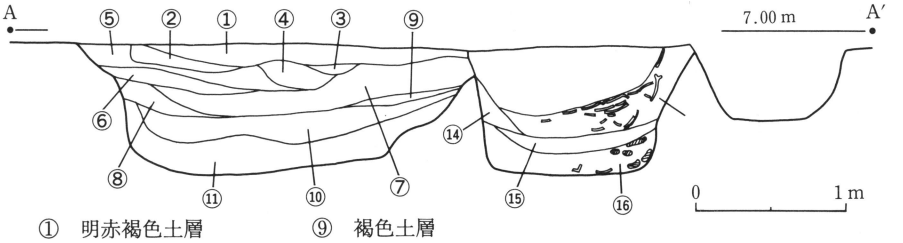
土坑約70基を検出しているが、このうち14基は明らかに明治期以降の遺物を含む攪乱である。また他の土坑についても、埋没時期が確実に近世以前にさかのぼると考えられるものは少なく、大半が幕末・明治期（19世紀第3四半期）若しくは時期不明である。

90B区においても、遺構はN－40°－W、あるいはN－50°－Wの方向性で並ぶ傾向が認められ、この点では90A区と類似した状況を示す。但し、90B区では、90A区と比較して小土坑が少なく、遺構の分布密度自体が低くなっている。これは、90B区側に元々遺構が少なかった可能性もある一方で、上述のように攪乱が深くまで達していることを考慮するならば、掘り込みの浅い遺構が削平されて消滅した結果と考えられよう。

以下、90B区で検討しえた数少ない近世遺構SK25・36について詳述する。

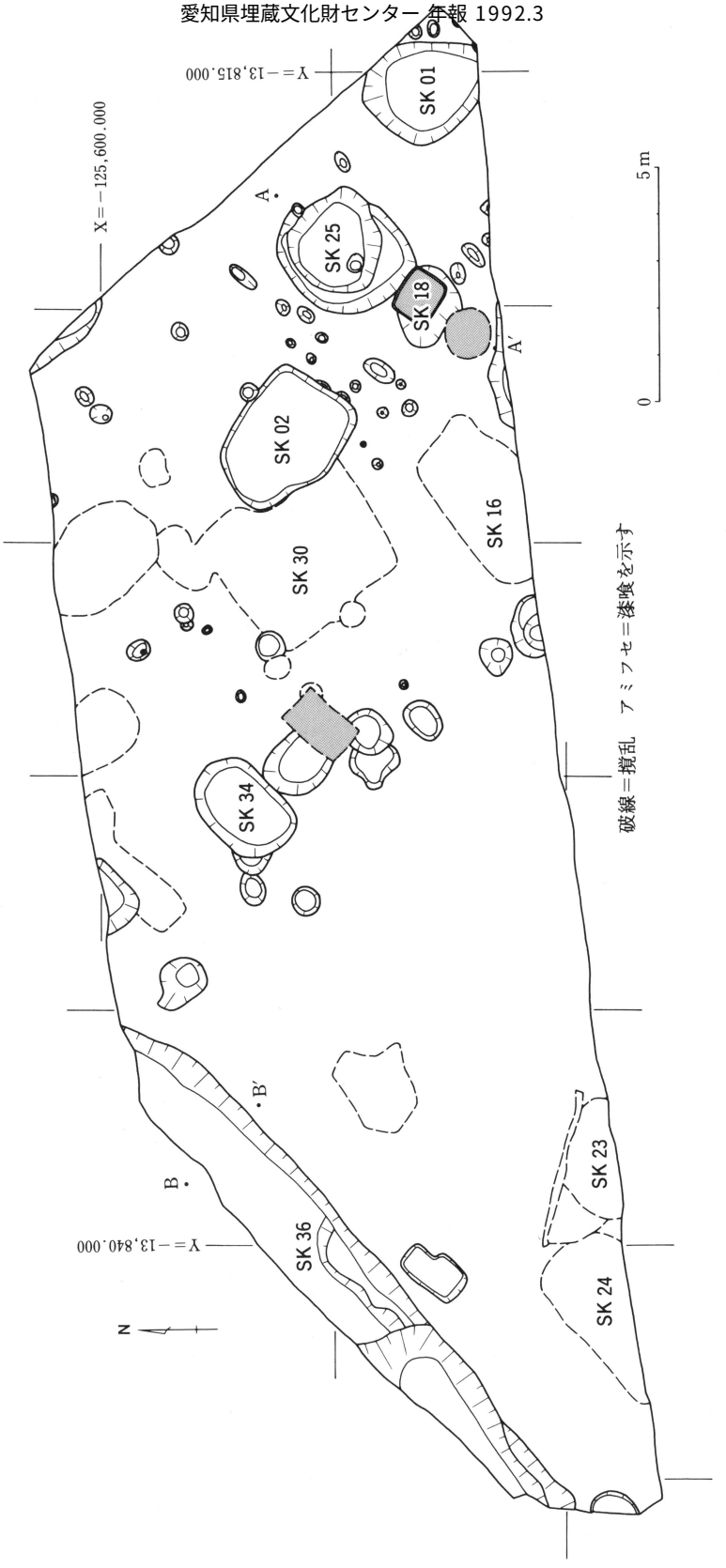
SK25（第18・19図）

長径3.0m、短径2.4mの不整円形プランを呈する土坑。深さ0.9m。西端を幕末ごろの土坑SK18に切られる。埋土は合わせて11層に細分が可能で、④・⑩層にはほぼハマグリの

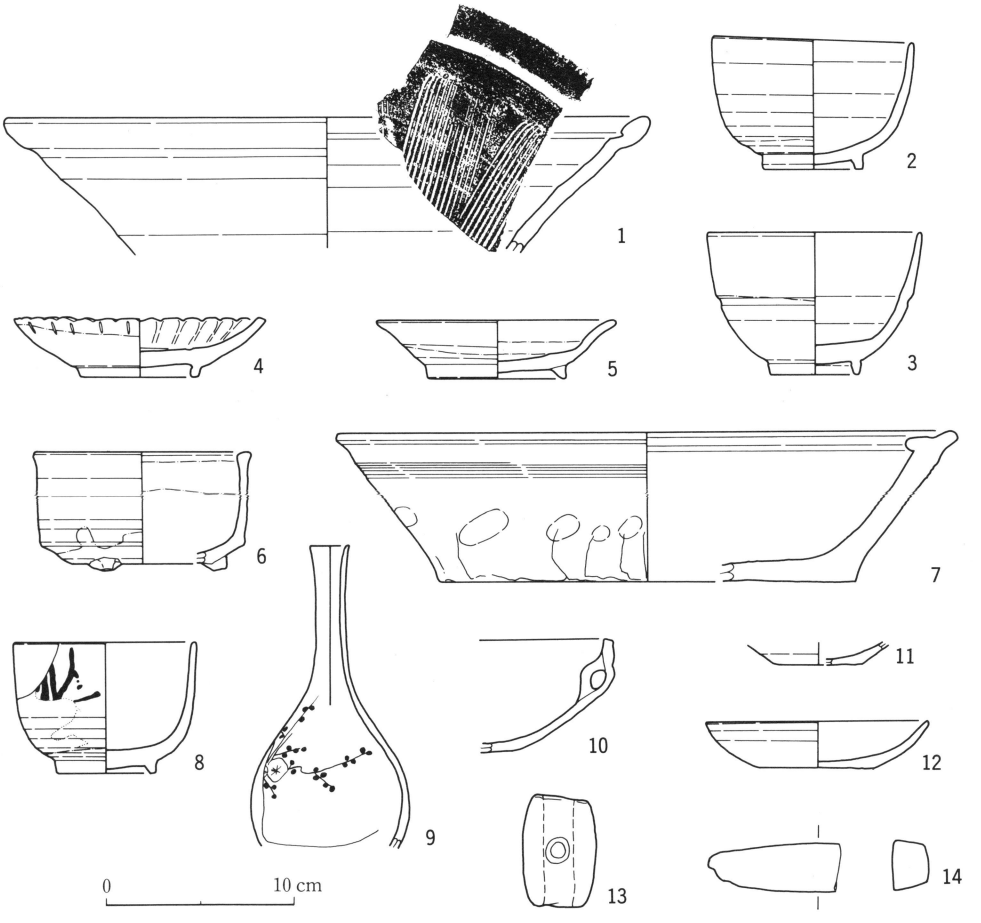


① 明赤褐色土層
② 明黄褐色土層
③ 褐灰色土層
④ 混褐灰色土貝層
⑤ 灰褐色土層
⑥ 黄橙色土層
⑦ 混褐灰色土貝層
⑧ 褐色土層
⑨ 褐色土層
⑩ 混褐色土貝層
⑪ 褐灰色土層
⑫ 灰褐色土層
⑬ 褐灰色土層（常滑焼甕片含）
⑭ 褐灰色土層（地山ブロック含）
⑮ 混黒褐色土貝層
⑯ 黒色土層

第17図　SK18・25土層断面図　1：50



第18図　90Ｂ区遺構平面図　1：150



第19図　ＳＫ25出土遺物実測図

みからなる貝層の形成も認められる。

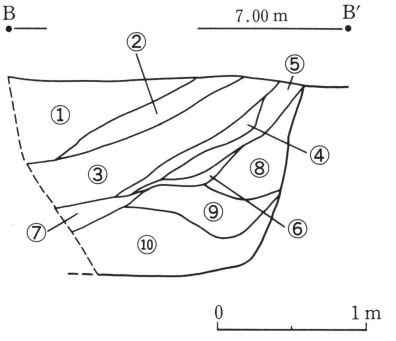
出土した人工遺物には、瀬戸・美濃陶器の擂鉢（１）・丸椀（２・３）・菊皿（４）・輪禿皿（５）・香炉（６）、常滑焼の鉢（７）、京焼風陶器の御室茶椀（８）、肥前系磁器（伊万里）の瓶（９）、土師質土器の鍋（10）・皿（11・12：ロクロ形成）、管状土錘（13：常滑焼）、砥石（14）等がある。

遺構の埋没時期は、出土遺物に所謂くらわんか手の肥前系磁器を欠くことや、瀬戸・美濃陶器の示す年代観から、17世紀末～18世紀前葉と考えられる。

ＳＫ36（第20・21・22・23図）

長径14.0m以上、短径2.0m以上、深さ1.8mの大型土坑。調査区域内では遺構の一部を検出したに過ぎず、平面形の全体像は窺い得ない。あるいは溝と見なすべきであるかもしれないが、本報告では調査時の遺構番号をそのまま用いている関係上、便宜的に土坑としておく。埋土は、B-B'断面で①混貝黒褐色土層、②混貝明褐色土層、③黒褐色土層、④混

黒褐色土貝層、⑤褐灰色土層、⑥混黒褐色土貝層、⑦褐色土層、⑧褐色土層（黒色土混じり）、⑨混灰褐色土貝層、⑩褐色土層の10層に細分でき、最下層の⑩層が砂質である他はいずれも僅かに粘性を有する。埋土の堆積状態は、⑧・⑨層が北東から南西方向へ傾斜していたのに対して、①～⑦層は南東から北西方向への傾きを示していた。

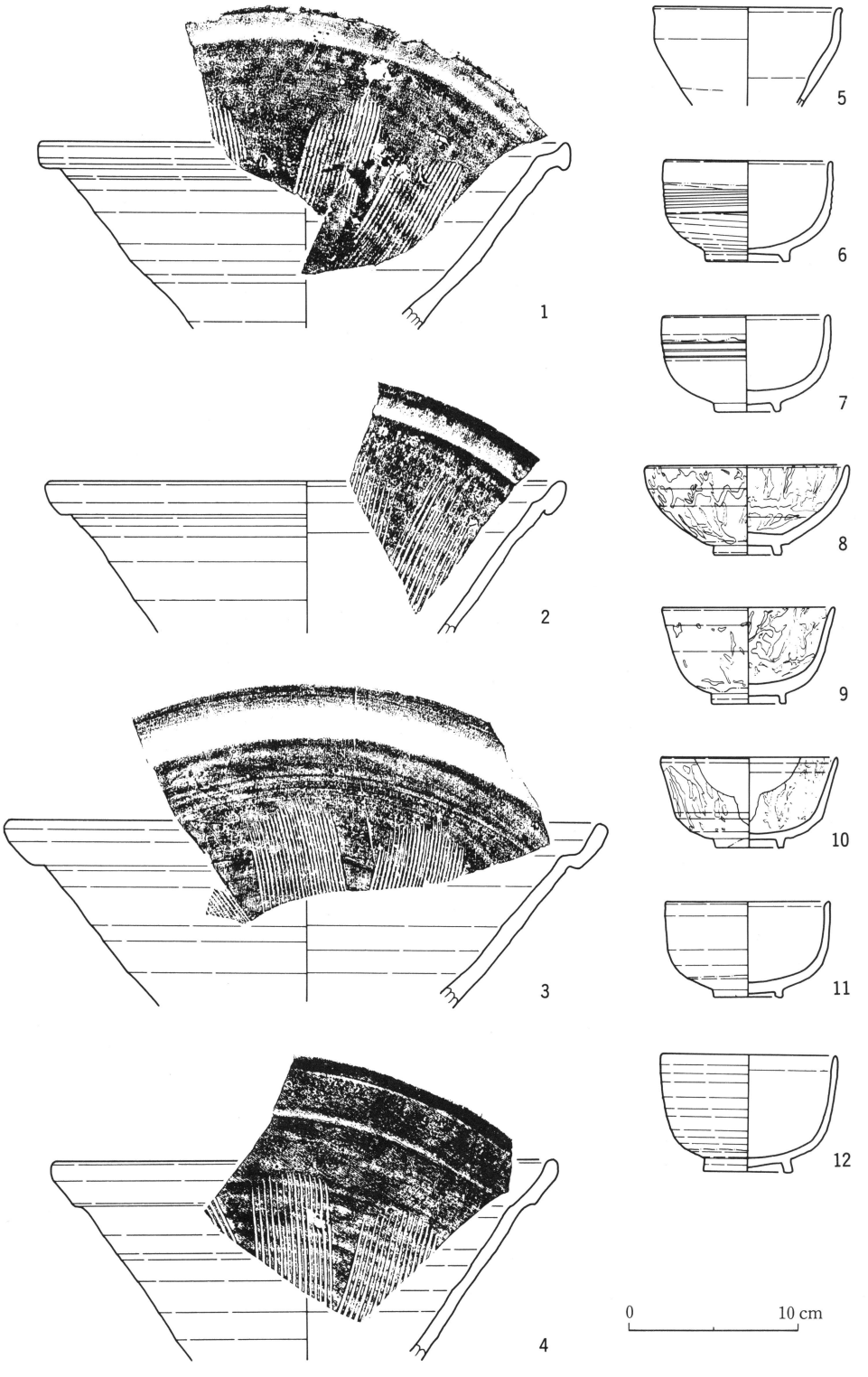


第20図　ＳＫ36土層断面図　Ⅰ：50

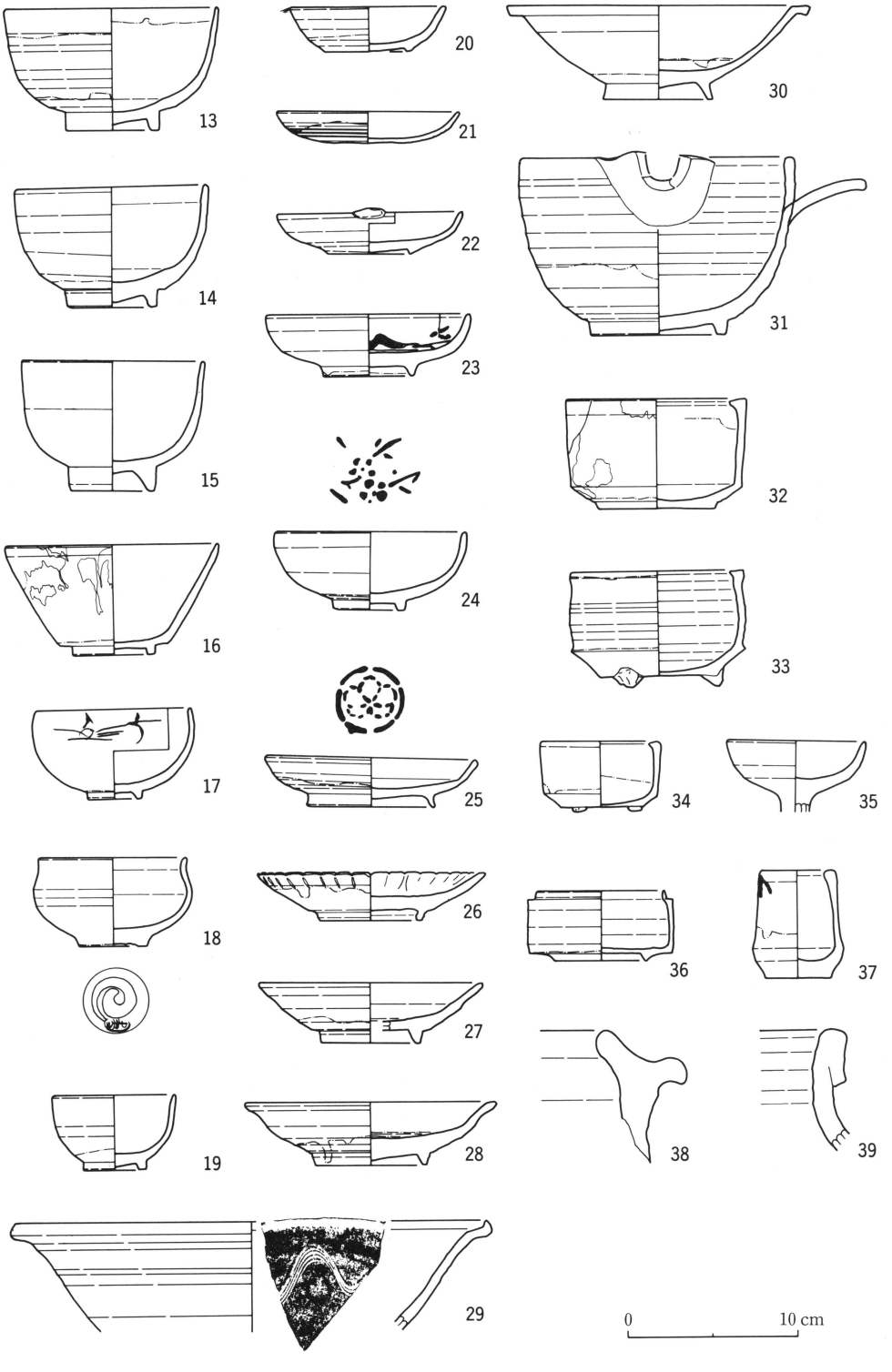
以上の所見から、ＳＫ36については、当初の構築目的は不明であるものの、後に廃棄物処理坑に転用されたものと考えられ、不要物の投棄は初期には北東側からであったものが、ある時点で南西側に変化していることが窺い知れる。

出土した人工遺物としては、瀬戸・美濃陶器の擂鉢（１～４）・天目茶椀（５）・腰錆茶椀（６・７）・刷毛目椀（８～10）・丸椀（11・12・14）・鉄絵湯呑（17）・小椀（19）・志野丸皿（21）・灯明皿（21・22）・染付皿（23）・梅文皿（24）・摺絵皿（25）・菊皿（26）・輪禿皿（27・28・30）・黄瀬戸鉢（29）・片口（31）・香炉（32～34）・仏餉具（35）・合子（36）、常滑焼の甕（38～41）・鉢（42）、肥前系陶器（唐津）の椀、肥前系磁器（伊万里）の椀（44～47）、京焼風陶器の呉器手椀（15）、土師質土器の鍋（48・49）・炮烙（50・51）・羽釜（52）・行平（53）・陶丸（54）、土人形（55）、いぶし瓦（56）、土錘（57：常滑焼・58：土師質）、砥石（59）、銅銭（皇宋通宝・寛永通宝）等の他、挌先鋳型（中表紙）、鉄滓等の鋳造関連遺物がある。

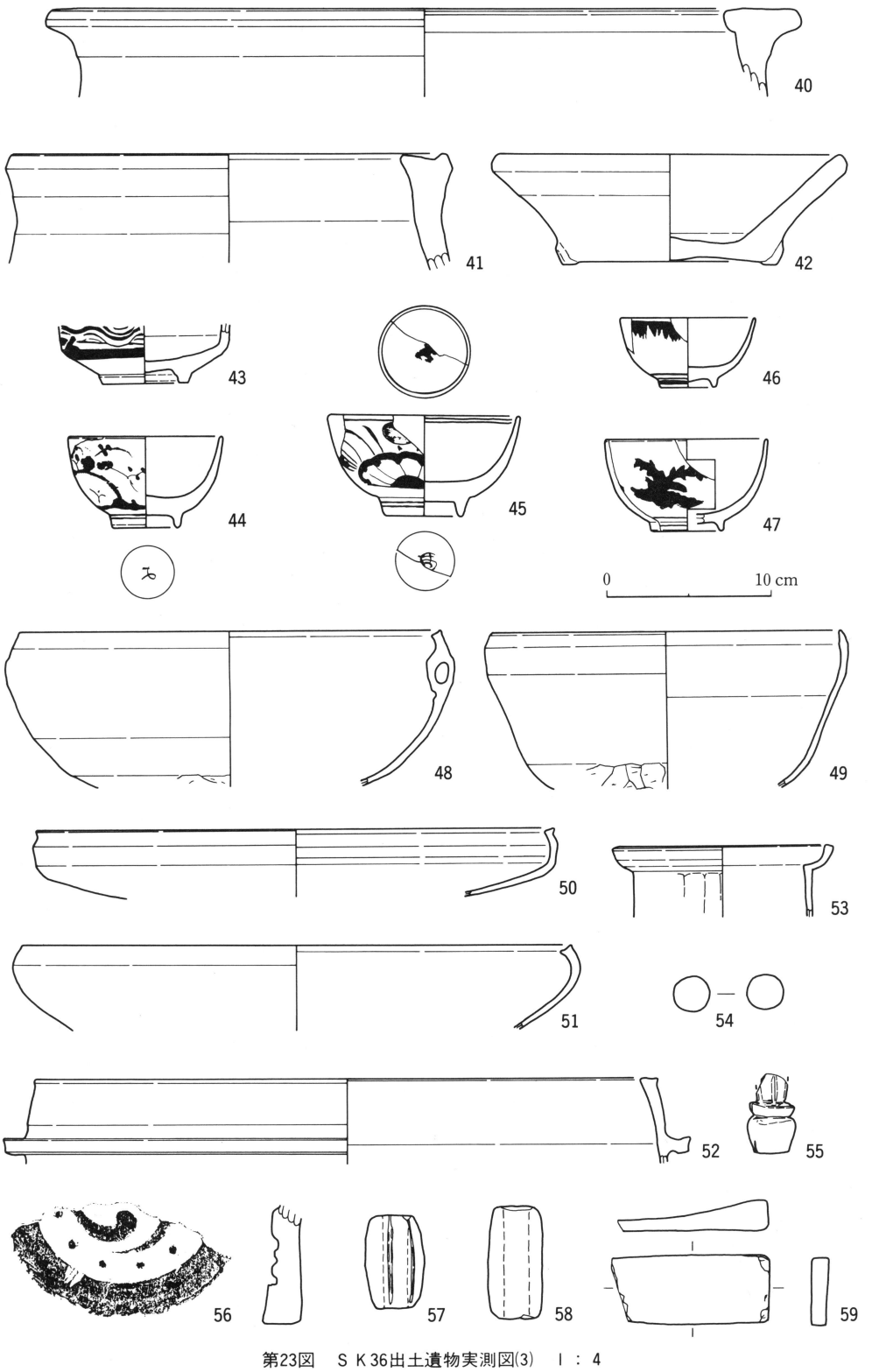
出土遺物の示す暦年代は、17・18世紀代にまでさかのぼるものも少なくないが、瀬戸・美濃陶器の中には擂鉢（４）・刷毛目椀（８～10）など19世紀前半まで降りるものがある。但し、19世紀第３四半期以降の瀬戸新製焼（瀬戸・美濃磁器）は認められないため、ＳＫ36は幕末以前に埋没していたと考えられる。



第21図　ＳＫ36出土遺物実測図(1)　１：４



第22図　ＳＫ36出土遺物実測図(2)　Ｉ：４



第23図　ＳＫ36出土遺物実測図(3)　Ｉ：４

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査では、戦国時代から近世の遺構をまとまって検出することができた。90Ａ・Ｂ区検出の遺構の性格については、既に昨年度年報でも若干言及したところではあるが[2]、整理作業を進めた結果、前稿の内容を一部修正する必要性も生じてきている。そこで、以下では、前章に記した調査概要を踏まえて、再度、清水遺跡90Ａ・Ｂ区の性格について考えてみることとしたい。

90Ａ・Ｂ区で検出した遺構は、①溝、②小土坑群、③大型土坑の３類に大別できる。このうち、①溝と②小土坑群については、それぞれ敷地の区画溝と掘立柱建物の柱穴と見なし得る可能性を前章で指摘した。一方、③大型土坑については、ａ不整形で平面的に広く掘り込み、全体の形状が皿型を成すもの（例えば90Ａ区ＳＫ18・19）、ｂ隅丸方形などの比較的整った平面形を有し、深さ１ｍ以上の深い掘り込みを伴うもの（例えば90Ａ区ＳＫ17・31・144、90Ｂ区ＳＫ36）の２種があり、前者は遺物の出土状況からみて廃棄物の処理坑（所謂廃棄土坑）とみなして支障ないと思われる。これに対して、後者は、埋土最下層が無遺物層であったり、地山質土での人為的埋め戻しが認められたりすることから、掘削当初から廃棄物の処理を目的としたものとは考えにくい。このため前稿では、今次調査で出土した鉄滓・挌先鋳型等の鋳造関連遺物とからめて、これらが鋳物砂の採掘坑である可能性を想定したのであった。しかるに、出土遺物の整理を進めたところ、鋳物砂採掘坑と考えたＳＫ17が16世紀代にまでさかのぼる可能性の高いことが判明した。これは古文献等から知られる当地（現西尾市平坂町・中畑町一帯）の鋳造業の開始[3]（17世紀後半）よりも古く、ｂ種大型土坑を鋳物砂の採掘坑とみなすことに対して否定的である。

事実、鋳造関連遺物（鉄滓・鋳型）の出土している遺構（90Ａ区ＳＤ01・ＳＫ19、90Ｂ区ＳＫ36）の埋没年代はいずれも17世紀後半以降であり、この点からも16世紀代にまでさかのぼる可能性のあるｂ種大型土坑と鋳造業の関連性は希薄と言わざるを得ない。

従って、ｂ種大型土坑の性格については、鋳物砂の採掘坑以外に求めなければならないと思われる。

翻って、今次調査に於ける出土遺物を概観してみると、人工遺物としては土器・陶磁器類、土錘、鉄滓、鋳型、銭貨など、自然遺物としては貝類、獣骨等から構成されている。このうち、土錘（漁網錘）や鉄滓・鋳型などの遺物は、直接的に当地に於ける漁業・鋳造業といった産業活動の形跡と見ることができようが、実はこれらが全遺物の中に占める割合はそれほど高いものではない。むしろ遺物の圧倒的多数は、人工遺物としては土器・陶

磁器類、自然遺物にあっては貝類であり、これらは産業活動よりもむしろ日常生活に伴う廃棄物としての性格が強いと思われる。これを検出遺構からみた「溝によって区画された建物群」というイメージと重ね合わせて考えるならば、“町屋”的空間を想定することが最も妥当かと考える。

現在のところ、県下近隣での近世町屋の発掘例は少ないため、近世に於ける当地方の町屋の一般的なあり方は判然としない。このため、上述の推定を裏付ける適当な比較事例を知らないが、若干性格の異なったところで、旧名古屋城下の下級武家屋敷地区にあたる名古屋市竪三蔵通遺跡のあり方と較べてみると、柱穴状の小土坑に混じって大型土坑が点在するあり方は極めて良く似ていると言える。従って、b種大型土坑についても竪三蔵通遺跡の同種の遺構と同様の性格を類推できそうであるが、残念ながら竪三蔵通遺跡に於いてもこれら大型土坑の性格については、一部が穴蔵かと推定されている他にはその性格が充分に明らかになっていないのが現状である。[4] このため本報告ではb種大型土坑の性格については、穴蔵となる可能性を留保しつつ、最終判断を避けておきたい。

註

1）本報告で攪乱として取り扱っている土坑の一部からは、明白な近代以降の遺物と共に、確実に近世後期にさかのぼると考えられる遺物が一括廃棄の状態で出土している。従って、近世末期の本遺跡を考える上で、これらを攪乱として無視することには問題もあろうが、ここでは紙幅の都合もあり、明治期以降の遺物を含む遺構については、すべて便宜的に攪乱としている。

2）尾野善裕「清水遺跡出土の鉄滓と三州平坂鋳物師」『愛知県埋蔵文化財センター年報』（平成2年度）1991

3）平坂の鋳造業の開始時期については諸説あるが、杉田公弘「平坂の鋳物業」『西尾市史三』1976に詳しく述べられている。

4）水野裕之『竪三蔵通遺跡－第11次調査の概要－』名古屋市教育委員会　1991

補注

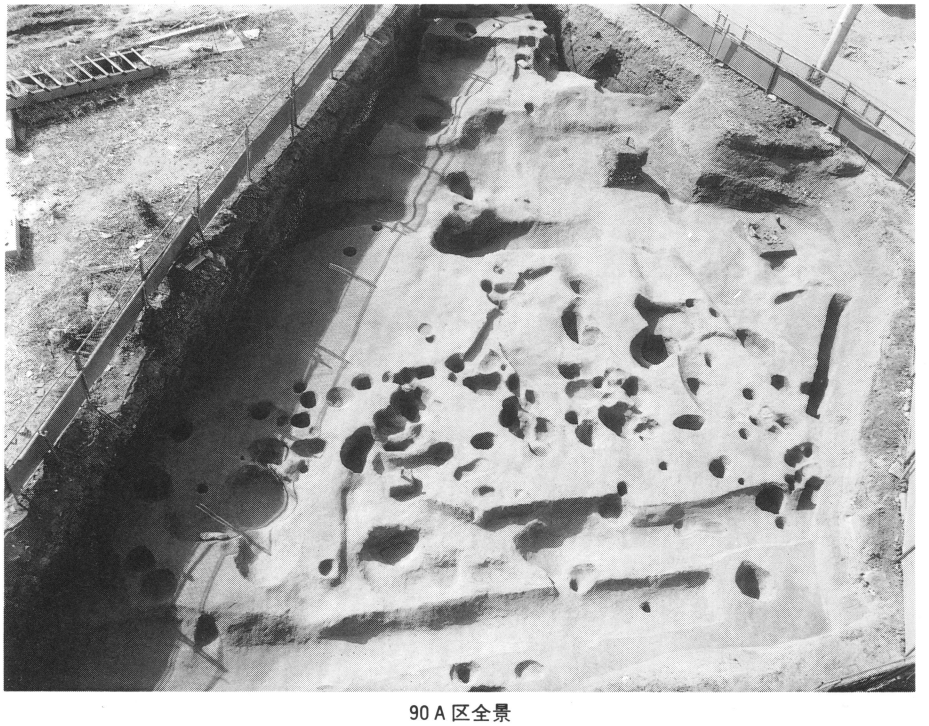
本報告で用いた出土遺物の年代観は、概ね下記文献に依拠している。

藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986

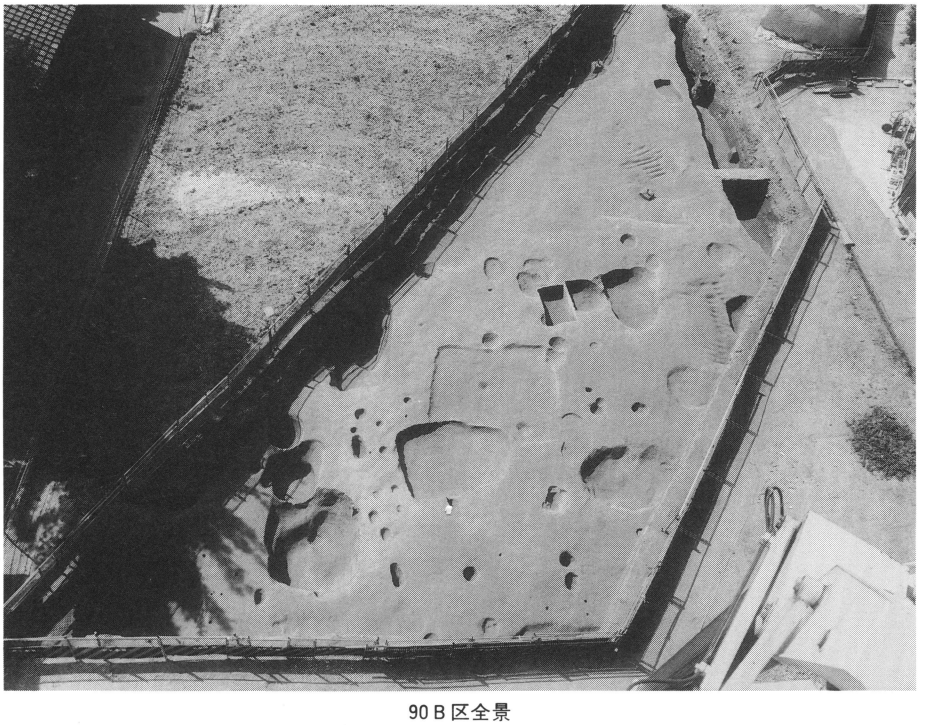
藤澤良祐「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ　1987～1989

中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料研究紀要』Ⅱ　1986

大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社　1989



90 A 区全景



90 B 区全景



90A区全景



90A区SD02



90A区SD02遺物出土状況



90A区SD03　SK01・44・143



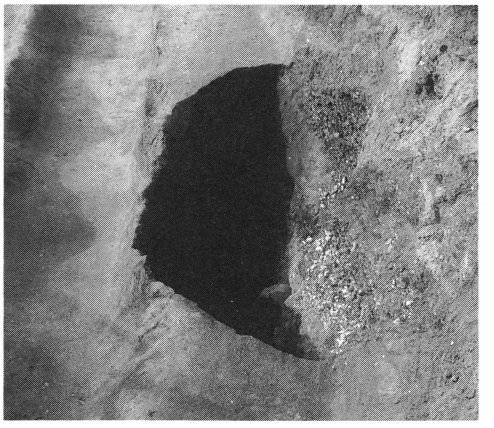
90A区SK17



90A区SK17遺物出土状況



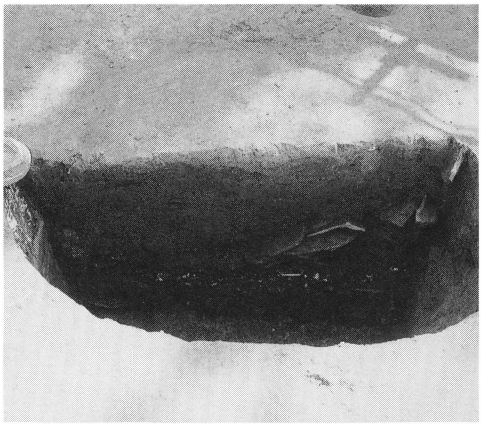
90A区SK19



90A区SK31



90A区SK31遺物出土状況



90B区SK18

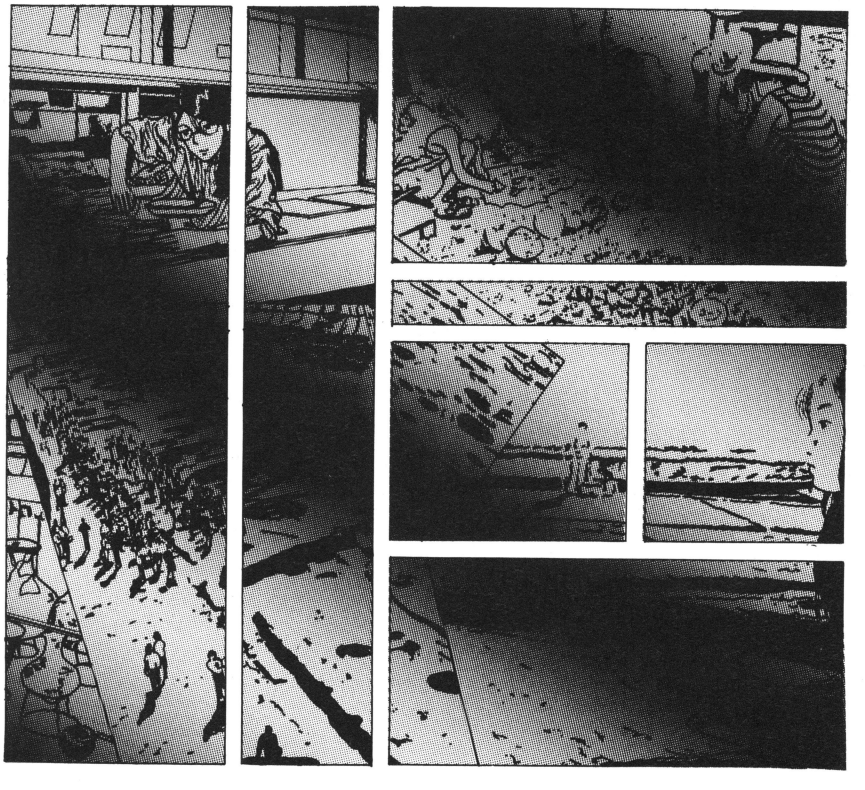


90B区SK25



90B区SK16土層断面

埋蔵文化財センターの活動



埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

埋蔵文化財展

	第　1　会　場	第　2　会　場
会場	西尾市資料館	愛知県埋蔵文化財調査センター
会期	7月22日(土)～8月4日(日) (7月29日を除く8日間)	8月12日(月)～8月25日(日) (14日間)
展示品	1．出土品（約300点） 山中遺跡……石器原石・剝片など（弥生時代） 阿弥陀寺遺跡……壺、甕、高杯など（弥生時代） 清洲城下町遺跡……噴砂、足跡、頭蓋骨、卒塔婆、柿経など（江戸時代） 朝日遺跡……銅鐸（弥生時代） 岩倉城遺跡……絵馬、呪符木簡、仏像など（室町時代） 名古屋城三の丸遺跡……陶器、磁器など（江戸時代） 西尾城跡……陶器、磁器など（江戸時代） 岡島遺跡……壺、甕、高杯、石斧など（弥生時代） 八王子遺跡……深鉢など（縄文時代） 枯木宮貝塚遺跡……深鉢、人骨など（縄文時代） 清水遺跡……製塩土器（弥生時代） 松崎遺跡……製塩土器（古墳時代） 伊保遺跡……尖頭器など（旧石器時代） 上万場遺跡……石鏃（縄文時代） 松久保遺跡……石鏃（縄文時代） 麻生田大橋遺跡……深鉢、石斧（縄文時代） 東光寺遺跡……壺、甕、高杯など（弥生時代） 志貴野遺跡……須恵器（奈良時代） 境川遺跡……須恵器（奈良時代） 2．パネル類（約100点）	
入場者	1290人	1250人
その他	入場者にパンフレット（B5判8頁）を配布	

埋蔵文化財講演会

	第　1　会　場	第　2　会　場
会　場	西尾市文化会館　小ホール	弥富町総合社会教育センター　ホール
開催日	8月3日(土)	8月25日(日)
講　師	国立歴史民俗博物館教授 白石太一郎氏	大阪府立弥生文化博物館長 天理大学教授 金関　恕氏
演　題	「断夫山古墳の造られた時代」	「弥生時代の心の暮し」
入場者	250人	200人

発掘調査技術等研修会

基礎研修会日程

8月22日　(木)	8月23日　(金)
開講式	「考古学資料のデータベース化」 (財)愛知県埋蔵文化財センター データベース研究会 (赤塚　次郎・鈴木　正貴・楯　真美子)
「埋蔵文化財の保護」 愛知県埋蔵文化財調査センター 所　長　伊藤　稔	閉講式
「埋蔵文化財発掘と法的手続き」 愛知県教育委員会文化財課 教育主事　梅本　博志	遺跡見学 「名古屋城三の丸遺跡」 (財)愛知県埋蔵文化財センター 主　査　鷲見　豊 調査研究員　遠藤　才文
「予算の組み立て方と補助金制度」 愛知県教育委員会文化財課 専門員　赤羽　一郎	

専門研修会日程

6月28日　(木)	11月29日　(金)
開講式	講義Ⅳ 「考古学のための写真技術」 〈その1〉 奈良国立文化財研究所　牛嶋　茂
講義Ⅰ 「条里制の研究」 文化庁調査官　井上　和人	
講義Ⅱ 「祭祀遺物の研究」 奈良国立文化財研究所 考古第1研究室長　金子　裕之	「考古学のための写真技術」 〈その2〉 奈良国立文化財研究所　牛嶋　茂
講義Ⅲ 「考古学と人類学」 名古屋大学教授　小谷　凱宣	閉講式

資料の貸出・提供

出土遺物

貸出先	目的	貸出資料	期間
新文化会館	愛知県図書館開館記念展示	名古屋城三の丸遺跡出土品 194点	3年4月15日 ～ 3年5月19日
住宅都市整備公団中部支社	瀬戸市都市計画事業 水野特定土地区画整理事業起工式	小田妻古窯跡出土品 15点	3年5月13日 ～ 3年5月17日
清洲貝殻山貝塚資料館	特別展「愛知の銅鐸」展示	朝日遺跡出土銅鐸 1点 岡島遺跡出土銅鐸形土製品 1点	3年9月20日 ～ 3年12月10日
愛知県陶磁資料館	企画展「愛知の古陶－新出土の古陶磁Ⅱ－」展示	吉田城遺跡出土品 40点	3年6月24日 ～ 3年8月31日
愛知県図書館	常設展示	名古屋城三の丸遺跡出土品 195点	3年5月21日 ～ 4年3月31日
岐阜市歴史博物館	特別展「信長・秀吉の城と都市」展示	清洲城下町遺跡出土品 25点 名古屋城三の丸遺跡出土品 1点	3年5月21日 ～ 4年3月31日
岐阜県博物館	特別展「ふるさとの哺乳動物」展示	朝日西遺跡出土人骨 1点	3年6月25日 ～ 3年9月17日
清洲町	複製品作製	朝日遺跡出土銅鐸 1点	4年3月25日 ～ 4年4月30日
名古屋市博物館	企画展「原始・古代をあそぶ」展示	朝日遺跡出土品 13点	3年9月9日 ～ 3年10月23日
名古屋大学考古学研究室	複製品作製	松崎遺跡出土製塩土器 2点	3年11月1日 ～ 3年12月31日
清洲町	「清洲城下町遺跡出土品展」展示	清洲城下町遺跡出土品 20点	3年9月20日 ～ 3年12月10日
名古屋市博物館	企画展「原始の狩・漁・採集」展示	朝日遺跡他出土品 89点	3年12月3日 ～ 4年2月6日
弥富町歴史民俗資料館	「尾張の焼き物展」展示	名古屋城三の丸遺跡他出土品 30点	3年10月1日 ～ 3年11月10日
元興寺文化財研究所	特別展「辛塔婆の世界」展示	朝日西遺跡出土品 7点	3年10月14日 ～ 3年11月15日
瑞浪陶磁資料館	企画展「名古屋城三の丸遺跡出土品」展示	名古屋城三の丸遺跡出土品 146点	3年10月7日 ～ 3年12月3日
名古屋市博物館	企画展「織田氏と尾張」展示	清洲城下町遺跡他出土品 76点	4年1月16日 ～ 4年3月15日
財団法人 四日市市文化新興財団	企画展「はきもの展」展示	清洲城下町遺跡出土品 2点	3年11月20日 ～ 3年12月9日
清洲町	「ふるさとのやかた」他で展示	清洲城下町遺跡出土品 7点	3年12月20日 ～ 4年3月31日
清洲貝殻山貝塚資料館	複製品作製	朝日遺跡銅鐸埋納土坑	3年12月20日 ～ 4年3月31日
東海市教育委員会	「古代の塩つくり展」展示	松崎遺跡出土品 2点	4年2月28日 ～ 4年3月17日

写真等資料

貸出先	目的	貸出資料	期間
株式会社メディアユニオン	講談社刊『吉野ヶ里と古代遺跡探訪』掲載	朝日遺跡 スライド 4点 北集落環濠・谷C内遺跡・逆茂木・杭群	3年5月24日 ～ 3年7月22日
春日井市教育委員会	「古代の勝川展」展示	勝川遺跡・町田遺跡 白黒ネガ 19点 スライド 3点	3年6月15日 ～ 3年7月1日
浜松市博物館	特別展「お茶とくらし」展示	名古屋城三の丸遺跡 白黒ネガ 出土遺物	3年7月1日 ～ 3年7月31日
浜松市博物館	『図説浜松の歴史』掲載	朝日遺跡 スライド 1点 杭群	3年7月18日 ～ 3年7月30日
株式会社メル プランニング	光文社刊行『グラフィティ日本謎事典②弥生』掲載	朝日遺跡 スライド 1点 逆茂木	3年8月8日 ～ 3年9月9日
清洲貝殻山貝塚資料館	『ぶんか』66号掲載	朝日遺跡 カラー写真 1点 出土銅鐸	3年8月20日 ～ 3年9月20日

貸出先	目的	貸出資料	期間
建設省中部地方建設局	『建設月報』掲載	名古屋城三の丸遺跡　白黒写真　4点 空撮写真・遺物	3年8月22日 ～ 3年9月20日
株式会社　小学館	『海と列島文化』第8巻掲載	朝日遺跡　白黒写真　1点 廻間遺跡　白黒写真　1点	3年8月22日 ～ 3年8月30日
株式会社　山川出版社	『愛知県の歴史散歩』掲載	朝日遺跡　スライド　2点 環濠・パレススタイル土器	3年9月6日 ～ 4年1月7日
株式会社　六興出版	『邪馬台国時代の東日本』掲載	朝日遺跡　白黒写真　2点 逆茂木・杭群	3年9月10日 ～ 3年10月31日
稲沢東小学校	学習スライド「弥生時代の人々のくらし」作製	朝日遺跡　スライド　10点 環濠・貝層・ヤナ・銅鐸他	3年9月10日 ～ 3年10月31日
名古屋市博物館	企画展「原始の狩・漁・採集」展示	朝日遺跡　白黒ネガ　1点 ヤナ出土状況	3年12月3日 ～ 4年2月6日
弥富町歴史民俗資料館	「尾張の焼き物展」展示	朝日遺跡他　パネル　10点	3年9月27日 ～ 3年11月12日
財団法人　角川文化振興財団	『角川日本姓氏歴史人物大辞典　愛知県版』掲載	朝日遺跡　スライド　1点	3年9月30日 ～ 3年10月30日
瑞浪陶磁資料館	企画展「名古屋城三の丸遺跡出土品」展示	名古屋城三の丸遺跡　スライド　2点 遺物出土状況	3年10月7日 ～ 3年12月9日
株式会社　集英社	集英社版『日本の歴史』第10巻掲載	清洲城下町遺跡　スライド　1点 発掘風景	3年11月7日 ～ 3年12月10日
株式会社　公文社	『週刊　宝石』掲載	清洲城下町遺跡　スライド　1点 発掘風景	3年12月9日 ～ 4年1月18日
株式会社　学習研究社	『6年の学習』5号別冊『日本の歴史（上）』掲載	朝日遺跡　白黒写真 逆茂木	3年12月18日 ～ 4年2月18日
株式会社新人物往来社	月刊『歴史読本』掲載	名古屋城三の丸遺跡　白黒写真　4点	3年12月27日 ～ 4年1月20日
財団法人　松山市生涯教育振興財団	特別展「分銅形土製品の謎」展示	廻間遺跡　スライド　1点 線刻文壺	4年1月10日 ～ 4年2月7日
清洲貝殻山貝塚資料館	朝日遺跡・清洲城下町遺跡紹介ビデオソフト作製	朝日西遺跡　スライド　3点、朝日遺跡　スライド　40点、清洲城下町遺跡　スライド　38点	4年3月10日 ～ 4年3月24日

現地説明会

現地説明会等開催状況

遺跡名（発掘区）	開催日	所在地	内容	参加者
堀之内花ノ木遺跡	91・7・20	稲沢市堀之内町	弥生後期の居住域。尾張国分寺跡の寺域南・西限を区画する溝。弥生土器、須恵器、瓦等の出土品を展示。	250名
室遺跡	91・8・10	西尾市駒場・室町	鎌倉・室町時代の溝区画による屋敷跡、建物・井戸跡。中世末の火葬施設。灰釉系陶器、中国陶磁等の展示。	237名
山中遺跡	91・3・16	一宮市大和町	弥生後期から古墳前期の方形周溝墓、古墳後期の円墳、溝、中世村落と墓域。弥生土器、須恵器、灰釉系陶器等の出土品を展示。	200名
名古屋城三の丸遺跡	91・12・14	名古屋市中区三の丸	江戸時代の武家屋敷跡、屋敷地を区画する溝、塀跡、井戸跡、地下室跡。陶磁器類、漆器、金ぱく、土人形などを展示。	400名
室遺跡	92・2・20	西尾市駒場・室町	平安時代中期の農業用かんがい施設である木樋3基に関する記者資料配布。	
清洲城下町遺跡	92・3・14	西春日井郡清洲町	1586年前後の礎石建物群をもつ屋敷地。施釉陶器、中国陶磁、狛犬等の出土品を展示。	400名

検　討　会

	開催日	内　容
第21回	91・5・16	『年報・調査研究編の発表』 1．古代尾張の土師器－6世紀後半から11世紀の様相－　城ヶ谷　和広 2．天正地震下層の出土遺物－清洲城下町遺跡90D区出土遺物の検討－　鈴木　正貴 3．一宮市山中遺跡出土の石器について　金子　健一 4．岩倉城遺跡下層出土の遺構と遺物－平成元年度調査を中心として－　服部　信博 5．岩倉城遺跡出土の陶磁器　松原　隆治
第22回	91・6・14	Ⅰ.『平成2年度　調査報告』 1．西上免遺跡の調査　赤塚　次郎 2．松久保遺跡の調査　松田　訓 3．名古屋城三の丸遺跡下層遺構について－那古野城とその周辺－　金子　健一 Ⅱ.『研修報告』 1．シンポジウム「考古学とコンピューター」　楯　真美子 2．日本文化財科学会第8回大会　宮腰　健司
第23回	91・7・16	『発掘調査に伴う資料のデータベースシステムについて』　調査課データベース研究会
第24回	91・9・17	Ⅰ.『平成3年度前半期発掘調査の検討』 1．堀之内花ノ木遺跡　4．室遺跡 2．跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡　5．不馬入遺跡 3．外町遺跡・清洲城下町遺跡 Ⅱ.『研修報告』 奈良国立文化財研究所　文化財写真課程　松原　隆治
第25回	91・10・16	『土器以外の"もの"を考える－1－』 1．木製農耕具の地域色とその変遷(その2) －ナスビ形農耕具の出現から終末まで－　樋上　昇 2．清洲城下町遺跡出土の木製品－中・近世木製品の諸問題－　鈴木　正貴
第26回	91・11・15	『朝日遺跡・自然科学編について』 朝日遺跡の自然環境をめぐる諸問題 層序および分析地点の概観　森　勇一 1．縄文時代の古環境 A．朝日遺跡から産した珪藻遺骸群集　森　勇一・前田　弘子 B．花粉分析からみた朝日遺跡の環境変遷　吉野　道彦・萬谷　さつき C．朝日遺跡の昆虫化石相について　森　勇一 D．朝日遺跡産の泥炭層の年代について　中村　俊夫 2．弥生時代における朝日遺跡の環境 A．朝日遺跡から産した植物遺体　此松　昌彦 B．有機物分析・プラントオパールからみた朝日遺跡　杉山　真二 C．弥生時代中・後期の汚濁性珪藻　前田　弘子 D．朝日遺跡における特筆すべき昆虫化石　森　勇一 3．材質・技法、弥生人の交流 A．朝日遺跡出土の土器胎土　永草　康次 B．朝日遺跡から産した磨製石斧の材質について　楯　真美子
第27回	91・12・16	『土器以外の"もの"を考える－2－』 1．朝日遺跡出土の骨角器　宮腰　健司 2．朝日遺跡出土の木製品　石黒　立人
第28回	92・1・16	『土器以外の"もの"を考える－3－』 1．朝日西遺跡出土の石製品　小澤　一弘 2．名古屋城三の丸遺跡出土の鉄製品・石製品　金子　健一
第29回	92・2・14	『漆器について』　講師　北野　信彦 『バジリク王墓発掘調査について』　(元興寺文化財研究所　保存科学研究室)
第30回	92・3・16	『平成3年度後半期発掘調査の検討』 1．堀之内花ノ木遺跡・舟橋宮裏遺跡・西上免遺跡　5．坂口遺跡 2．清洲城下町遺跡(五条川改修関連調査)　6．岡島遺跡 3．伊保遺跡　7．室遺跡 4．高樋遺跡・三斗目遺跡・三本松遺跡

付篇



受贈図書目録 （平成3年1月～平成3年12月）

※報告書

〔北海道〕

牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡	㈶北海道埋蔵文化財センター
美沢川流域の遺跡群XⅣ	〃
上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡	〃
滝里遺跡群Ⅰ	〃
高岡E遺跡	苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター
静川9遺跡	〃
静川37遺跡発掘調査（第二次）概要報告書	〃
内園3遺跡（深川市）	深川市教育委員会

〔岩手県〕

岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ	岩手県教育委員会
〃 Ⅱ	〃
岩崎城西遺跡発掘調査報告書	㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
月館跡・八幡館跡発掘調査報告書	〃
明神遺跡発掘調査報告書	〃
比爪館跡発掘調査報告書	〃
馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書	〃
葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書	〃
間館Ⅰ遺跡発掘調査報告書	〃
物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書	〃
上村貝塚発掘調査報告書	〃
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成2年度分）	〃
上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書	〃
高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書	〃
柳之御所跡	〃

〔宮城県〕

仙台平野の遺跡群X	仙台市教育委員会
郡山遺跡11	〃
南小泉遺跡	〃
柏木遺跡Ⅱ	多賀城市埋蔵文化財調査センター
山王遺跡	〃
市川橋遺跡	〃
里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ	東北歴史資料館
馬場壇B遺跡・大原B遺跡	〃

〔秋田県〕

片山館コ遺跡発掘調査報告書	秋田県教育委員会
大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	〃
宝竜堂遺跡発掘調査報告書	〃
七窪遺跡発掘調査報告書	〃
遺跡詳細分布調査報告書	〃
秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	〃
東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ	〃
〃 Ⅷ	〃
〃 Ⅸ	〃
〃 X	〃
〃 XI	〃
国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ	〃
〃 Ⅴ	〃
和田遺跡発掘調査報告書	〃

〔福島県〕

東北横断自動車道遺跡分布調査報告1	福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
〃 2	〃
東北横断自動車道遺跡調査報告7	〃
〃 8	〃
〃 9	〃

東北横断自動車道遺跡調査報告11（法正尻遺跡　上巻）	福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
〃　11（　〃　中巻）	〃
〃　11（　〃　下巻）	〃
福島空港用地内埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ	〃
福島空港関連道路遺跡分布調査報告１	〃
福島空港関連遺跡発掘調査報告Ⅲ	〃
国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ	〃
〃　Ⅸ	〃
相双地区遺跡分布調査報告Ⅰ	〃
真野ダム関連遺跡発掘調査報告14	〃
〃　15	〃
三春ダム関連遺跡分布調査報告Ⅰ	〃
三春ダム関連遺跡発掘調査報告３	〃
〃　4	〃
原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ	〃
国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅹ	〃
相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ　－１．本文－	〃
〃　－２．実測図－	〃
〃　－３．写真－	〃
母畑地区遺跡分布調査報告14	〃
〃　15	〃
〃　28	〃
〃　29	〃
〃　30	〃
矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅹ	〃
矢吹地区遺跡発掘調査報告６	〃
〃　8	〃
大畑Ｅ遺跡	福島県いわき市教育委員会・㈶いわき市教育文化事業団・福島県小名浜港湾建設事務所
戸田条理遺跡	〃　・㈶いわき市教育文化事業団・福島県いわき農地事務所
久世原館	〃　・㈶いわき市教育文化事業団・福島県いわき市立総合磐城共立病院

〔茨城県〕

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20　桜山古墳	㈶茨城県教育財団
茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書　石山神遺跡	〃
研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡（上）	〃
〃　〃　〃　（下）	〃
一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　西郷遺跡他	〃
一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　二の宮貝塚他（上）	〃
〃　〃　（下）	〃
一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　神谷森遺跡	〃
一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　五平遺跡他	〃
都市計画道路３・４・２鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　烟田城跡・烟田川波遺跡	〃
主要地方道結城野田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　和尚塚古墳	〃
武田Ⅳ　－1990年度武田遺跡群発掘調査の成果－	㈶勝田市文化・スポーツ振興公社・文化振興文化財調査係
向野Ⅰ	〃
鹿の子遺跡発掘調査報告書	山武考古学研究所
西大塚遺跡	〃
久保遺跡発掘調査報告書	〃
玉造城跡	〃
茨城県福田（神明前）貝塚	㈶古代學協会・古代學研究所

〔栃木県〕

三王山車塚古墳群	栃木県教育委員会
下野国分寺跡Ⅶ	〃
自治医科大学周辺地区　平成元年度埋蔵文化財発掘調査概報	㈶栃木県文化振興事業団
蟹が入遺跡　－栃木県二宮町－	日本窯業史研究所
館之前遺跡　－栃木県佐野市－	〃

仲の内遺跡　－栃木県小川町－	日本窯業史研究所
北原６号墳　－栃木県壬生町－	〃
結城道東１号・２号塚　－栃木県鹿沼市－	〃
益子の近代陶業遺跡	国士館大学文学部考古学研究室
古代窯業遺跡群Ⅰ	〃

〔群馬県〕

下境Ⅰ・天神	群馬県教育委員会
矢田遺跡Ⅱ	群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
田篠中原遺跡	〃
仁田遺跡・暮井遺跡	〃
飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡	〃　・建設省
荒砥北三木堂遺跡Ⅰ（本文・図版編）	〃
〃　（遺物観察表編）	〃
有馬条里遺跡Ⅱ	〃
〃　（遺物観察表）	〃
上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)　本文編	〃
〃　写真図版編	〃
〃　図表編	〃
下淵名塚越遺跡（第一分冊）本文編	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
〃　（第二分冊）遺物観察表編	〃
〃　（第三分冊）写真図版編	〃
三ツ寺Ⅱ遺跡　本分編	〃
〃　資料編１	〃
〃　資料編２	〃
〃　写真図版編	〃
熊野堂遺跡(2)　遺構編１	〃
〃　遺構編２	〃
〃　遺物編１	〃
〃　まとめ編	〃
融通寺遺跡　第１分冊	〃
〃　第２分冊	〃
野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡	〃
下小鳥遺跡	〃
成塚石橋遺跡Ⅱ	〃
石原東・中村日焼田遺跡	群馬県渋川市教育委員会
中里遺跡群・西芝・中道・押出・薬師遺跡・毘沙門遺跡(1)	群馬県群馬町教育委員会
寺屋敷Ⅰ・蓋・鶴巻遺跡	〃
寺屋敷Ⅱ遺跡	〃
古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡	山武考古学研究所
妙義東部遺跡群（Ⅱ）	〃
宇田城址	〃
花立遺跡	〃
妙義町の遺跡(1)	〃
専光寺付近遺跡	〃
古海松塚古墳群	〃

〔埼玉県〕

北島遺跡Ⅱ（第９・10・11地点）	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮町遺跡Ⅰ	〃
〃　Ⅱ	〃
山王裏・中原遺跡	〃
小沼耕地遺跡	〃
塚の越遺跡Ⅲ	〃
樋詰・砂田前Ⅱ	〃
児沢北遺跡	〃
竹之花・下大塚・円阿弥遺跡Ⅰ	〃
北島遺跡（12・13地点）	〃
堂山下遺跡	〃
馬場北遺跡（第15次）・松本遺跡（第12次）	浦和市教育委員会・浦和市遺跡調査会
松木北遺跡（第５次）・馬場北遺跡（第16次）	〃
白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書（第２次）	浦和市遺跡調査会
大久保条理遺跡発掘調査報告書（第４次）	〃
三室西宿南遺跡発掘調査報告書（第２次）	〃

木村遺跡発掘調査報告書	浦和市遺跡調査会
馬場東遺跡発掘調査報告書	〃
和田北遺跡発掘調査報告書（第４次）	〃
子野上遺跡発掘調査報告書（第３次）	〃
稲荷越遺跡発掘調査報告書（第２次）	〃
白鍬遺跡発掘調査報告書	〃
馬場東・馬場小室山遺跡発掘調査報告書	〃
円正寺遺跡発掘調査報告書	〃
大谷場下町遺跡発掘調査報告書（第２次）	〃
原山東原遺跡発掘調査報告書（第３次・第４次）	〃
松木・馬場小室山遺跡発掘調査報告書	〃
白幡本宿遺跡発掘調査報告書（第６次）	〃
本太三丁目・本太四丁目（第２次）・本太五丁目・原山東原（第２次）・原山北原遺跡発掘調査報告書	〃
松木遺跡発掘調査報告書	〃
松木北・松木遺跡発掘調査報告書	〃
坂戸市遺跡群発掘調査報告書　第Ⅲ集	坂戸市教育委員会
お伊勢山遺跡の調査	早稲田大学

〔千葉県〕

主要地方道成田松尾線Ⅵ	㈶千葉県文化財センター・千葉県土木部
君津郡市遺跡発掘調査報告書	〃
銚子市余山貝塚	〃
八日市場市小高遺跡	〃
多古町南借当遺跡	〃
袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡	〃
千葉市荒久遺跡松(3)	㈶千葉県文化財センター・千葉県都市部
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ	〃　・千葉県企業庁・住宅・都市整備公団千葉開発局
東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区３）	〃　・日本道路公団東京第一建設局
佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡（本文）	㈶千葉県文化財センター・千葉県土地開発調査公社
〃　（表）	〃
〃　（図版）	〃
四街道市内黒田遺跡群　第１分冊	㈶千葉県文化財センター・千葉県住宅供給公社
〃　第２分冊	〃
千葉県中近世城跡研究調査報告書　第11集	㈶千葉県文化財センター
富里町吉川窯跡確認調査報告書	〃
千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書　平成２年度	〃
八千代市白幡前遺跡　本文編	〃
〃　図版編	〃
〃　図面編	〃
千原台ニュータウンⅣ　本文編	〃
〃　図版編	〃
子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡	千葉市教育委員会・㈶千葉市文化財調査協会
立木南遺跡	〃
千葉市へたの台貝塚	〃
千葉市辰ヶ台・住吉・東住吉遺跡	〃
千葉市山ノ神遺跡	㈶千葉市文化財調査協会・㈱熊谷組横浜支店
平川遺跡群	㈶千葉市文化財調査協会・㈱北葉地所
千葉市馬場塚遺跡	〃　・㈱中立電気
千葉市高台向遺跡	〃　・㈱大研
千葉市広南遺跡	〃　・㈱山池
千葉市古山遺跡	〃　・㈱阿彌陀寺
千葉市砂子遺跡	㈶千葉市文化財調査協会・黒川洸
千葉市芳賀輪遺跡	〃
千葉市迎山遺跡	㈶千葉市文化財調査協会
芳賀輪遺跡・太田アラク遺跡	〃
千葉市餅ヶ崎遺跡	〃
稲荷台１号墳出土の「王賜」銘鉄剣概要発表要旨	市原市

市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡	市原市教育委員会
小田部新地遺跡	㈶市原市文化財センター・㈱京場機材
市原市北旭台遺跡	〃 ・㈱矢口建材加工
市原市郡本遺跡	〃 ・市原信用組合
第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨（平成2年度）	〃
成田市内遺跡発掘調査報告書（平成2年度）	成田市教育委員会
東金市内遺跡群発掘調査報告書（平成2年度）	東金市教育委員会
大畑台遺跡群確認調査報告書	木更津市教育委員会
木更津市内遺跡発掘調査報告書	〃
請西遺跡群発掘調査報告書Ⅲ	〃
千束台遺跡群確認調査報告書Ⅱ	〃
内裏塚古墳群発掘調査報告書	富津市教育委員会
富津市内遺跡発掘調査報告書	〃
南口遺跡	㈶君津郡市文化財センター・富津市
宮花輪遺跡	〃
町田いせき群	〃
寒沢遺跡・向萩原遺跡・向山野遺跡	㈶君津郡市文化財センター・袖ケ浦町
広町遺跡	〃
未園崎遺跡	〃
請西遺跡群Ⅰ	㈶君津郡市文化財センター・木更津市請西第二区画整理組合
下谷古墳・下谷遺跡	〃 山王不動産
天神台遺跡発掘調査報告書	〃 ・石井み弥
植ノ台遺跡	〃 ・㈱セイシン産業
向台Ⅱ遺跡	㈶印旛郡市文化財センター・松戸市
河原子台遺跡	〃 白井市
麿拝塚1号墳・宮前古墳・南常盤野馬土手	〃 八街町
富里町中木戸・北台溜袋地区野馬土手	〃 富里町
龍腹寺1号塚・天王前遺跡発掘調査報告書	〃 本埜村
臼井田小笹台遺跡	〃 ・㈱ファーストリアルエステート株式会社
曲輪ノ内遺跡	〃 ・㈱伊藤忠石油販売
武西千駄苅遺跡確認調査報告書	〃 ・㈱中銀観光
天神台・ヤジダ遺跡発掘調査報告書	〃 ・㈱東京電力
六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書	〃 ・㈱建興社
囲護台遺跡発掘調査報告書	〃 ・㈲はやし
岩戸城跡内岩戸市場遺跡	〃 ・㈶西福寺
獅子穴Ⅱ遺跡	〃
長田和田遺跡	〃
長田雉子ケ原遺跡・長田香花田遺跡	〃
東内野遺跡	〃
神楽場遺跡・五反目遺跡	〃
和良比御屋敷遺跡発掘調査報告書	〃
柴名坂横穴墓	㈶長生郡市文化財センター・㈲古鬼総業
打手遺跡	〃 ・千葉県茂原土地改良事務所
長南城跡	〃 ・㈱かねもと
大台遺跡群	㈶山武郡市文化財センター・㈱宮門城カントリー倶楽部
大台遺跡群－図版－	〃 〃
中林遺跡	㈶山武郡市文化財センター
胡摩手台古墳群	〃
芝山町内遺跡群発掘調査報告書	芝山町教育委員会
印内台遺跡	船橋市遺跡調査会

〔東京都〕

小笠原諸島他遺跡分布調査	東京都教育委員会・小笠原諸島他遺跡分布調査会
港区No.91遺跡	南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査会
日野市栄町遺跡	日野市栄町遺跡調査会
石畑狭山嶺遺跡調査報告書	石畑狭山嶺遺跡調査会
武蔵台東遺跡発掘調査概報1（武蔵国分尼寺北方地区）	都営川越道住宅遺跡調査会
武蔵国府関連遺跡調査概報	日本製鋼所遺跡調査会
〃 Ⅱ	〃

法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡	東京大学遺跡調査室
医学部附属病院地点	〃
山上会館・御殿下記念館地点－第1分冊－	東京大学埋蔵文化財調査室
〃 －第2分冊－	〃
〃 －第3分冊－	〃
〔神奈川県〕	
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ	小田原市教育委員会
小田原城焔硝曲輪	〃
小田原城三の丸　山本内蔵邸跡第Ⅴ・第Ⅵ地点	〃
浜諸磯遺跡	三浦市教育委員会
鴨居原遺跡発掘調査報告	横浜市埋蔵文化財センター
中耕地遺跡	〃
都筑自然公園予定地内遺跡群(2)	〃
大塚遺跡	〃
茅ヶ崎城	〃
虚空蔵山遺跡－横浜市緑区－	日本窯業史研究所
赤田の古墳　〃	〃
下鶴間甲一号遺跡	下鶴間甲一号遺跡調査団
東海大学校地内遺跡調査団報告2	東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団
〔新潟県〕	
杉明遺跡	新井市教育委員会
新井市遺跡確認調査報告書（平成元年度）	〃
〃 （平成2年度）	〃
御金蔵跡発掘調査報告書	出雲崎町教育委員会・山武考古学研究所
小木城下館跡発掘調査報告書	〃
〔富山県〕	
東海北陸自動車道関連発掘調査概報(2)	(財)富山県文化振興財団
能登滝・柴垣製塩遺跡群	富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会
〔石川県〕	
宮永市遺跡発掘調査報告	石川県立埋蔵文化財センター
倉部	〃
松任市一塚イチノツカ遺跡	〃
松任市北安田北遺跡　Ⅲ	〃
押野西遺跡	〃
浄水寺墨書資料集	〃
戸津古窯跡群Ⅰ	小松市教育委員会
那谷桃の木山古窯跡	〃
〔福井県〕	
鳴鹿手島遺跡	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〔山梨県〕	
天狗沢瓦窯跡	中巨摩郡敷島町教育委員会
湯之奥金山遺跡第2次調査概報	湯之奥金山遺跡学術調査会・湯之奥金山遺跡学術調査団
〔長野県〕	
篠ノ井遺跡群Ⅲ	長野市教育委員会
松本市南中島遺跡	松本市教育委員会
松本市生妻遺跡	〃
松本市弥生前遺跡	〃
薄町・石上・鎌田遺跡	〃
松本市トウコン原遺跡	〃
市内遺跡発掘調査報告書1990	佐久市教育委員会
金井城跡（第一分冊　遺構編）	佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター
金井城跡（第二分冊　遺物・考察・写真図版編）	〃
川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書	御城田町教育委員会
上の山遺跡Ⅲ	辰野町教育委員会
田中洞Ⅱ	大滝村教育委員会
〔岐阜県〕	
千畳敷	岐阜市教育委員会
〃 Ⅱ	〃
金屋遺跡	可児市教育委員会

〔静岡県〕

国道１号線潮見バイパス（湖西地区）宿南No.１・No.２遺跡確認調査報告書	静岡県教育委員会・湖西市教育委員会・建設省中部地方建設局
吉美中村遺跡	湖西市教育委員会・静岡県西部農林事務所
山口第17地点古窯跡発掘調査報告書	〃
加賀山第１～３地点・古見第14・16地点古窯跡発掘調査調査報告書	〃
大知波峠廃寺II	湖西市教育委員会
〃　（平成元年度）	〃
清水柳北遺跡発掘調査報告書その１	沼津市教育委員会
〃　その２	〃
清水柳北遺跡　石器計測表	〃
広合遺跡（b・C・d区）・広合南遺跡発掘調査報告書	〃
大谷津遺跡発掘調査報告書	〃
雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ｉ－遺構編－	〃
〃　－遺物編－	〃
大久保・高山古墳群発掘調査報告書	磐田市教育委員会
坂上遺跡・藤上原３遺跡（昭和63年度）	〃
匂坂上４遺跡発掘調査報告II（昭和63年度）	〃
寺谷遺跡発掘調査報告書（本篇）	〃
〃　（遺物一覧表）	〃
国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書（昭和63年度）	〃
〃　第57次発掘調査報告書	〃
安久路２・３号墳の写真集	〃
国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書（平成２年度）	〃
中原Ｃ古墳群発掘調査報告書	〃
匂坂下原古墳群発掘調査報告書	〃
池之谷古墳群発掘調査報告書	〃
堂山古墳（平成２年度）	〃
丸ケ谷戸遺跡	富士宮市教育委員会
瓦屋西古墳群	浜松市教育委員会
伊場遺跡遺物編５	〃
瓦屋西Ｃ古墳群・瓦屋西II遺跡・地蔵平Ａ・Ｂ古墳群・地蔵平遺跡	(財)浜松市文化協会・有玉西土地区画整理組合
松東遺跡発掘調査報告書	(財)浜松市文化協会
浜松市曕東遺跡発掘調査報告書	〃
滝峯才四朗遺跡発掘調査報告書	細江町教育委員会
〃　銅鐸	〃
三ツ谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書	新居町教育委員会・三ツ谷土地区画整理組合
寺の谷３号墳発掘調査報告書	小笠町教育委員会
姫宮遺跡	山武考古学研究所

〔愛知県〕

県道半田南知多公園線関係埋蔵文化財調査報告書	愛知県
県立児童総合遊園内埋蔵文化財調査報告	〃
知多半島道路埋蔵文化財調査報告	愛知県教育委員会・日本道路公団
埋蔵文化財調査報告	愛知県教育委員会
矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告	〃
大渕遺跡	(財)愛知県埋蔵文化財センター
松崎遺跡	〃
麻生田大橋遺跡	〃
森岡遺跡・淡洲神社北遺跡	〃
土田遺跡II	〃
池下古墳	〃
清水遺跡	〃
朝日遺跡Ｉ	〃
境川遺跡	〃
黄金堤発掘調査報告	〃
Ｈ－101 号古窯跡発掘調査報告	名古屋市教育委員会
揚羽町古窯群発掘調査報告書	〃
美晴台遺跡第Ｉ・II・Ⅲ次発掘調査概報（39・40年度）	〃
見晴台遺跡　第Ⅸ次発掘調査の記録	美晴台遺跡発掘調査団
同者遺跡発掘調査報告書	浅井古墳群発掘調査会

東畑廃寺跡発掘調査報告書（Ⅲ）	稲沢市教育委員会
旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告書（Ⅰ）	〃
篠岡古窯址群	小牧市教育委員会
桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ	〃　・愛知県建築部
穴田古墳群（第２集）	瀬戸市教育委員会・愛知県企業局
瀬戸市四ツ谷三号古墳	〃　・瀬戸市役所
かぶと山遺跡　第一次調査報告	東海市教育委員会
東海市かぶと山遺跡　第二次調査報告	〃
大木之本遺跡発掘調査報告書	〃
毘沙クゼ古窯址群	常滑市教育委員会
山洞二号・三号墳発掘調査報告書	豊田市教育委員会
豊田市埋蔵文化財調査集報　第三集	豊田市郷土史研究会・豊田市教育委員会
〃　第五集	豊田市郷土史研究会
梅坪遺跡第４次調査概要報告	豊田市教育委員会
太夫塚古墳	岡崎市教育委員会
八ツ面山北部遺跡Ⅰ	西尾市教育委員会
三河国分尼寺跡	豊川市教育委員会
前通遺跡	〃
牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書	豊橋市教育委員会・豊橋市美術博物館
山崎遺跡	田原町教育委員会
段林遺跡試掘調査報告書	一宮町教育委員会
欠山遺跡	小坂井町教育委員会
岩場古墳	幡豆郡吉良町
考古資料ソフテックス写真集　第６集	名古屋大学文学部考古学研究室

〔三重県〕

昭和63年度　農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊	三重県教育委員会
平成２年度　〃	三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ	〃
一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅶ	〃
一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ	〃
一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ	〃
近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　第２分冊１	〃
〃　（勢和～伊勢）埋蔵文化財調査報告　第５分冊	〃
寺原Ｂ遺跡発掘調査概要	〃
鳥戸遺跡発掘調査報告－松阪市伊勢寺町所在－	三重県埋蔵文化財センター
南山遺跡・南山６号墳	鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
埋蔵文化財発掘調査報告書－五輪山古墳群，上相田遺跡，曲遺跡－	松阪市教育委員会
小野城跡	亀山市教育委員会
伊勢国分寺跡	鈴鹿市教育委員会
糸川橋遺跡	名張市遺跡調査会
嬉野町埋蔵文化財調査概要　平成元年度	嬉野町教育委員会
町道小山・宮古線建設工事に伴う試掘調査報告	〃
縄生廃寺跡発掘調査報告	朝日町教育委員会
〃　Ⅰ	〃
天王平遺跡発掘調査報告	多度町教育委員会
南小山廃寺発掘調査報告	〃
柚井城跡測量の概要	〃
智積廃寺・土丹遺跡	四日市市遺跡調査会
上野遺跡	〃
史跡斎宮跡　平成２年度発掘調査概報	斎宮歴史博物館

〔滋賀県〕

文化財調査出土調査遺物仮収納保管業務　平成２年度発掘調査概要	滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
大東遺跡（Ⅰ）	〃
寺倉遺跡	〃
五斗井遺跡・太田市館遺跡・宮ノ後遺跡	〃
金剛寺遺跡	〃
金剛寺・後川遺跡	〃
〃　発掘調査報告書Ⅱ	〃
大宮遺跡発掘調査報告書	〃
中北遺跡発掘調査報告書	〃
国友遺跡	〃

北落古墳群（旧称　塚原古墳群）	〃
金剛寺遺跡	〃
服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ本本編	滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会・守山市教育委員会
〃　図版編	〃
守山市文化財調査報告書　第37冊	守山市教育委員会
〃　第38冊	守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター
〃　第43冊	〃
中主町内遺跡分布調査（Ⅱ）概要報告書　平成２年度	中主町教育委員会

〔京都府〕

京都府遺跡調査報告書　第14冊	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
京都府遺跡調査概報　第40冊	〃
〃　第41冊	〃
〃　第42冊	〃
〃　第43冊	〃
〃　第44冊	〃
〃　第45冊	〃
京都府埋蔵文化財論集　第２集	〃
平安京右京三条三防	㈶京都府埋蔵文化財研究所
仁和寺境内発掘調査報告	〃
京都市内遺跡試掘立会調査概報	京都市文化観光局
鳥羽離宮跡発掘調査概報	〃
平安京跡発掘調査概報	〃
北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報	〃
向日市埋蔵文化財調査報告書　第19集	向日市教育委員会・㈶向日市埋蔵文化財センター
〃　第29集	〃
〃　第30集	〃
〃　第31集	〃
〃　第32集	〃
長岡京市文化財調査報告書　第27冊	長岡京市教育委員会
福知山市文化財調査報告書19集	福知山市教育委員会
同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化財の調査	同志社高等学校・同志社大学校地学術調査委員会

〔大阪府〕

図録　大阪城跡の調査１	㈶大阪文化財センター
大阪市立埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	大阪市教育委員会・㈶大阪市文化財協会
難波宮跡・大阪城跡発掘調査中間報告Ⅱ	㈶大阪市文化財協会
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1990年度	豊中市教育委員会
嶋上郡衙跡　他関連遺跡発掘調査報告書・15	高槻市教育委員会
柏原市所在遺跡発掘調査概報1990年度	柏原市教育委員会
高井田横穴群Ⅲ	〃
柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1990年度	〃
貝塚市埋蔵文化財調査報告　第20集　加治神前畠中遺跡発掘調査概要	貝塚市教育委員会
貝塚市埋蔵文化財調査報告　第21集　加治神前畠中遺跡発掘調査概要	〃
貝塚市遺跡群発掘調査概要ⅩⅢ	〃
三軒屋遺跡89-4区の調査	泉佐野市教育委員会
〃　89-6区の調査	〃
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅹ（平成元年度）	〃
河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅴ	河内長野市教育委員会
泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ	泉南市教育委員会
東郷遺跡	㈶八尾市文化財調査研究会
㈶八尾市文化財調査研究会事業報告平成２年度	〃
宣振遺跡発掘調査報告書	〃
鏡伝池遺跡	㈶枚方市文化財研究調査会
藤阪東遺跡　発掘調査概要報告	〃
蛍池東遺跡発掘調査報告書	蛍池東遺跡調査会
近大山賀遺跡Ⅱ	近畿大学
子若江遺跡（第５次調査）・山賀遺跡（第４次調査）	〃
堺－柳之町	堺・柳之町遺跡調査会・大手前女子学園考古資料室
西堤遺跡	西堤調査団・学校法人　村上学園

〔兵庫県〕

松原千畳敷遺跡　試掘調査報告書	西淡町教育委員会・淡神文化財協会
柳杭遺跡発掘調査報告書	五色町教育委員会・淡神文化財協会
元町遺跡発掘調査概報	淡神文化財協会
市原・熊野神社裏遺跡	妙見山麓遺跡調査会
社・吉馬－古窯跡群等の発掘調査報告書－	大谷女子大学資料館
社・牧野社－古窯跡群等の発掘調査報告書－	〃
郡家遺跡	大手前女子大学史学研究所文化財調査室

〔奈良県〕

平城宮跡発掘調査部発掘調査概報（1990年度）	奈良国立文化財研究所
飛鳥・藤原宮発掘調査概報21	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
高塚遺跡第２次発掘調査概要報告書	奈良県教育委員会
発掘された宇陀の古代文化	奈良県立橿原考古学研究所編
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成２年度	奈良市教育委員会
平城京東市跡推定地の調査Ⅸ	〃
平城京右京八条二坊十一坪（西市跡推定地）発掘調査概要報告書	大和郡山市教育委員会
若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書	〃
高月遺跡　第１次発掘調査概要報告書	〃
治道遺跡	〃
天理市埋蔵文化財発掘調査概要報告（1990年度）	天理市教育委員会
赤土山古墳　第３次調査概報	〃
発掘調査20年	埋蔵文化財天理教調査団
平等坊松ノ木遺跡発掘調査報告	〃
唐古・鍵遺跡　第21・23次発掘調査概報	田原本町教育委員会
唐古・鍵遺跡　第32・33次発掘調査概報（昭和62・63年度）	〃
内牧カラト遺跡発掘調査報告書	榛原町教育委員会
大宇陀町所在　前方後円墳実測調査報告書	宇陀郡大宇陀町教育委員会・花園大学考古学研究室

〔広島県〕

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ（本文編）	㈶広島県埋蔵文化財調査センター
〃　（図版編）	〃
東広島ニュータウン遺跡群Ⅰ（本文編）	〃
〃　（図版編）	〃
賀茂学園都市開発整備事業地内（西高屋地区）遺跡群Ⅴ	〃
浅谷山東Ａ地点遺跡	〃
三段畑遺跡	〃
福正寺北遺跡群	〃
本郷遺跡・焼け遺跡	〃
備後国府跡	〃
明官地廃寺跡（第５次発掘調査概報）	〃
小林遺跡Ａ・Ｂ地点遺跡発掘調査報告	広島市教育委員会
毘沙門台東遺跡発掘調査報告	〃
草戸千軒町遺跡－第42・43次発掘調査概要－	〃
〃　－第44・45次発掘調査概要－	〃
湯谷たたら	比婆郡東城町教育委員会・広島大学文学部考古学研究室

〔香川県〕

埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度	香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　第一分冊	香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
〃　〃　第二分冊	〃
四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　延命遺跡	香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
〃　第９冊　永井遺跡　本文編	〃
〃　〃　〃　附編他	〃

〔愛媛県〕

四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
〃　Ⅳ	〃
文京遺跡第10次調査	愛媛大学埋蔵文化財調査室
江口遺跡第１次調査	愛媛大学法文学部考古学研究室

〔高知県〕

昭和63・平成元年度高知県遺跡詳細分布調査概報	高知県教育委員会
土地国衛跡発掘調査報告書　第９集	〃
〃　第10集	〃
〃　第11集	〃
後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書II	〃
岡豊城跡	〃
比江廃寺跡発掘調査概報	〃
十川駄場崎遺跡発掘調査報告書	〃
原南遺跡発掘調査報告書	高知県文化財団
ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書	土佐山田町教育委員会
稲荷前遺跡発掘調査報告書	〃
大塚遺跡発掘調査報告書	土佐山田町教育委員会
和田城跡	原町教育委員会

〔福岡県〕

福岡城跡・Ⅳ	福岡市教育委員会
今宿五郎江遺跡II	〃
太田遺跡Ⅰ	〃
梅林古墳	〃
影ヶ浦古墳群１	〃
徳永遺跡	〃
三苫京塚古墳	〃
博多16	〃
〃 17	〃
〃 18	〃
〃 19	〃
〃 20	〃
〃 21	〃
〃 22	〃
〃 23	〃
〃 24	〃
那珂遺跡３	〃
〃　4	〃
比恵遺跡群(10)	〃
大塚遺跡	〃
上月隅遺跡	〃
飯倉Ｃ遺跡	〃
藤崎遺跡６	〃
〃　7	〃
四箇遺跡群24次調査（SIKA RUINS 24th）	〃
箱崎遺跡２	〃
野多目Ａ	〃
有田・小田部　第12集	〃
〃　第13集	〃
〃　14　原遺跡５	〃
東光寺剣塚古墳	〃
入部II	〃
脇山II	〃
鴻臚館跡Ⅰ	〃
県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告II	豊前市教育委員会
〃　Ⅲ	〃

〔佐賀県〕

佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書９	佐賀県教育委員会
志波屋六本松乙遺跡	〃
都谷遺跡	〃
特別史跡　名護屋城跡並びに陣跡６	〃
吉野ヶ里遺跡	〃
木村遺跡	〃
赤絵町	有田町教育委員会
向ノ原窯・天神山窯・ムクロ谷窯・黒牟田新窯	〃

〔熊本県〕

城・馬場遺跡・高城跡Ⅶ郭	熊本県教育委員会
天道ヶ尾遺跡（II）	〃

上片町水田遺跡	〃
鞠智城後	〃
大江東原遺跡（II）	〃
北谷城(1)	熊本大学文学部考古学研究室
神園山瓦窯址	〃
〔大分県〕	
宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報III	大分県教育委員会
日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（一般国道210号）	〃
若杉遺跡・十文字原遺跡・ふいが城遺跡	〃
飯田二反田遺跡・小原南遺跡・井手ノ原遺跡・上ノ原遺跡	〃
植田市遺跡III	〃
久末京徳遺跡	安岐町教育委員会
松山遺跡（第２次発掘調査）	別府大学付属博物館
〔宮城県〕	
えびの市埋蔵文化財調査報告書　第５集　広畑遺跡	えびの市教育委員会
〃　第７集　〃	〃
原田・上江遺跡群　六部市遺跡	〃
長江浦遺跡群　内丸・弁財天・馬場田遺跡	〃

※年　報

調査年報３　平成２年度	㈶北海道埋蔵文化財センター
年報３　昭和63年度	多賀城市埋蔵文化財調査センター
年報４　平成元年度	〃
東北大学埋蔵文化財調査年報３	東北大学埋蔵文化財調査委員会
払田柵跡調査事務所年報1990	秋田県教育委員会
秋田県埋蔵文化財センター年報９　平成２年度	秋田県埋蔵文化財センター
いわき市教育文化事業団年報１　昭和53年度～平成元年度	㈶いわき市教育文化事業団
年報10　平成元年度	㈶茨城県教育財団
栃木県埋蔵文化財保護行政年報　平成元年度	栃木県教育委員会
埋蔵文化財センター年報第１号（平成３年度）	㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
栃木県文化振興事業団年報　平成２年度	㈶栃木県文化振興事業団
年報８	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
年報11　平成２年度	㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
千葉県文化財センター年報No.16　平成２年度	㈶千葉県文化財センター
千葉市文化財調査協会年報１　昭和60・61年度	㈶千葉市文化財調査協会
財団法人印旛郡市文化財センター年報５　昭和63年度	㈶印旛郡市文化財センター
〃　6　平成元年度	〃
君津郡市文化財センター年報No.８　平成元年度	㈶君津郡市文化財センター
〃　No.９　平成２年度	〃
長生郡市文化財センター年報No.５　平成元年度	㈶長生郡市文化財センター
事業報告Ｉ　昭和63年度・平成元年度	㈶香取郡市文化財センター
市原市文化財センター年報　昭和61年度	㈶市原市文化財センター
〃　昭和62年度	〃
山武考古学研究所年報No.８	山武考古学研究所
日本考古学年報42　1989年度版	日本考古学協会
港郷土資料館館報９　平成２年度版	港区立港郷土資料館
明治大学考古学博物館館報No.６	明治大学考古学博物館
考古学研究室彙報第25号	立正大学文学部考古学研究室
埋蔵文化財年報(2)	㈶富山県文化振興財団
石川県立埋蔵文化財センター年報第９号　昭和62年度	石川県立埋蔵文化財センター
〃　第10号　昭和63年度	〃
長野県埋蔵文化財センター年報６　1989	㈶長野県埋蔵文化財センター
〃　7　1990	〃
岐阜市歴史博物館年報No.５　平成２年度	岐阜市歴史博物館
各務原市文化財年報	各務原市教育委員会文化課
大垣市歴史民俗資料館・美濃国分寺史料館年報　平成２年度	大垣市歴史民俗資料館
浜松市博物館館報III	浜松市博物館
焼津市歴史民俗資料館年報４	焼津市歴史民俗資料館
㈶愛知県埋蔵文化財センター年報　平成２年度	㈶愛知県埋蔵文化財センター
名古屋市博物館年報　平成元年度	名古屋市博物館
〃　平成２年度	〃

瀬戸市埋蔵文化財年報　昭和63・平成元年度	瀬戸市教育委員会
知立市歴史民俗資料館年報　昭和62・63年度	知立市歴史民俗資料館
〃　平成元年度	〃
〃　平成２年度	〃
蟹江町歴史民俗資料館年報第11冊	蟹江町歴史民俗資料館
三重県埋蔵文化財センター年報２　平成２年度	三重県埋蔵文化財センター
四日市市文化財保護年報１　平成元年度	四日市市教育委員会
斎宮歴史博物館年報　平成元年度	斎宮歴史博物館
〃　平成２年度	〃
中主町内遺跡発掘調査年報　平成元年度	中主町教育委員会
埋蔵文化財発掘調査年報　1990年度	㈶栗東町文化体育振興事業団
都城No.２	㈶向日市埋蔵文化財センター
長岡京市埋蔵文化財センター年度　平成元年度	㈶長岡京市埋蔵文化財センター
大阪市立博物館報No.30	大阪市立博物館
枚方市文化財年報Ⅹ　1989	㈶枚方市文化財研究調査会
八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度	㈶八尾市文化財調査研究会
正倉院年報第13号	宮内庁正倉院事務所
奈良国立文化財研究所年報　1989	奈良国立文化財研究所
〃　1990	〃
田原本町埋蔵文化財調査年報１　1988・1989年度	田原本町教育委員会
岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
広島県埋蔵文化財（平成元年度）	広島県教育委員会
年報Ⅴ　昭和63年度	㈶広島県埋蔵文化財センター
年報Ⅵ　平成元年度	㈶広島県埋蔵文化財調査センター
財団法人香川県埋蔵文化財センター年報　平成元年度	㈶香川県埋蔵文化財センター
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成元年度	㈶香川県埋蔵文化財調査センター
徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.２　1990 年度	㈶徳島県埋蔵文化財センター
福岡市埋蔵文化財年報Vol.４　1989 年度	福岡市教育委員会
鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵ　平成２年度	鹿児島大学埋蔵文化財調査室

※紀　要

紀要11　平成２年度	㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第６号	秋田県埋蔵文化財センター
いわき市教育文化事業団研究紀要第１号　1991	㈶いわき市教育文化事業団
研究紀要８	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
千葉県文化財センター研究紀要12	㈶千葉県文化財センター
君津郡市文化財センター研究紀要Ⅳ	㈶君津郡市文化財センター
東京大学文学部考古学研究室研究紀要第９号	東京大学文学部考古学研究室
金沢市文化財紀要85（金沢市新保本町東遺跡）	金沢市教育委員会・中島製紙株式会社・他
〃　86（金沢市千木ヤキシダ遺跡・Ⅱ）	〃　・金沢市疋田第二土地区画整理組合
〃　87（金沢市寺中Ｂ遺跡Ⅰ）	〃
〃　88（　〃　Ⅱ）	〃
〃　89（金沢市佐奇森遺跡）	〃　・石川アサヒ運送株式会社
〃　90（金沢市遺跡地図・改訂版）	〃
〃　91（瓢箪町遺跡）	金沢市・金沢市教育委員会
〃　92（桜田・示野中遺跡）	金沢市教育委員会・㈱一光
〃　93（金沢市埋蔵文化財調査年報　平成２年度）	〃
長野県埋蔵文化財センター紀要２　1988	㈶長野県埋蔵文化財センター
〃　3　1989	〃
愛知県陶磁資料館研究紀要９　1990	愛知県陶磁資料館
愛知学院大学文学部紀要第20号（創設20周年記念号）	愛知学院大学文学部
紀要第４号　1990・12	㈶滋賀県文化財保護協会
古代學研究所研究紀要第１輯	㈶古代學協會
奈良市埋蔵文化財調査センター紀要　1990	奈良市教育委員会

※雑　誌

研究連絡誌　第31・32号	㈶千葉県文化財センター
研究報告　１巻３号	千葉県立中央博物館
国立歴史民俗博物館研究報告　29～34集	国立歴史民俗博物館
教育愛知　第38巻10号～12号・第39巻１号～９号	愛知県教育委員会

愛知県埋蔵文化財情報６　平成元年度	㈶愛知県埋蔵文化財センター
歴史研究（愛知教育大学歴史学会）36・37合併号	愛知教育大学歴史学会
古代人52	名古屋考古学会
京都府埋蔵文化財情報39～42号	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
研究論集Ⅸ	奈良国立文化財研究所
大阪文化財研究　創刊号	㈶大阪文化財センター
歴史読本　第16巻別冊　第５号	㈱新人物往来社

※展示図録・目録

鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録	皇学館大学史料編纂所
大阪市立博物館館蔵品目録	大阪市立博物館
黒川古文化研究所収蔵品目録　第18	㈶黒川古文化研究所
〃　第19	〃
水戸で暮らした弥生時代の人々	水戸市立博物館
古墳出現のなぞ　－激動の世紀に迫る－（第34回企画展）	栃木県立博物館
出土品展　－平成２年度－	埼玉県立埋蔵文化財センター
音のかたち	埼玉県立博物館
昔むかしの上総	㈶君津郡市文化財センター
お江戸八百八町地下探検	東京都教育委員会・朝日新聞社
展示図録（明治大学考古学博物館）	明治大学考古学博物館
縄文晩期の世界	〃
平成３年度　特別企画展　貝塚	富山市埋蔵文化財センター
特別展　躍動する若狭の王者たち	福井県立若狭歴史民俗資料館
信長・秀吉の城と都市	岐阜市歴史博物館
特別展　山と里「もの」のくらべっこ	可児市教育委員会・可児郷土歴史館
東濃西部歴史民俗資料館　瑞浪陶磁資料館1991	瑞浪陶磁資料館
特別展　荻之島焼	〃
洛中出土の桃山陶器　－特別展－	土岐市美濃陶磁歴史館
お茶とくらし	浜松市博物館
名古屋城三の丸遺跡出土品展	愛知県図書館
福井のやきもの　－企画展－	愛知県陶磁資料館
陶器の流れ　－須江器から渥美・常滑・瀬戸－（特別展）	名古屋市博物館
うつわの美　－特別展－	〃
風景を着る	一宮市博物館
木製品の世界	知立市教育委員会
安城市歴史博物館　－常設展示案内－	安城市歴史博物館
再発見　安城の文化財　－かたちに託すこころの世界－	〃
三河と足利氏（企画展）	〃
明治の三大用水	〃
斎宮歴史博物館　総合案内	斎宮歴史博物館
大来皇女と壬生の乱	〃
天神信仰と太宰府	〃
レトロ・レトロの展覧会（平成２年度調査埋蔵文化財展）	滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
京都発掘調査91	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
先史時代の北白川	京都大学文学部博物館
収蔵品図録Ⅲ－中米土器－	大谷女子大学　資料館
南方熊楠とその時代	和歌山市立博物館
弥生の美－開館記念特別展－	大阪府立弥生文化博物館
卑弥呼の世界	〃
平城京展－再現された奈良の都－	朝日新聞大阪本社企画部
タイの土器作り	淡神文化財協会
長屋王「光と影」展－長屋親王宮の発見－	日本経済新聞社大阪本社
瀬戸内の中国陶磁（平成三年度春の企画展）	広島県立歴史博物館
備後表（秋の企画展）	広島県立歴史博物館友の会
中世の民衆とまじない（春の企画展）	〃
展示解説　第１集	徳島県立博物館
甦る埋蔵文化財－第４集－	㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
弥生古鏡を掘る	北九州市立考古博物館
古代シリア文明展－海のシルクロード－	NHK　・NHK　サービスセンター
南京博物院名宝展－中華人民共和国－	名古屋市博物館・中日新聞社
古代エジプト展－オランダ国立ライデン古代博物館所蔵－	東京新聞

黄河文明展	中日新聞社
マヤ文明展	毎日新聞社・毎日放送
エトルリヤ文明展	朝日新聞社

※分布地図

小牧市遺跡分布地図	愛知県小牧市教員委員会社会教育課社会教育係
〃 (II)	〃
広島市遺跡分布地図	広島市教育委員会
高知県遺跡地図	高知県教育委員会文化振興課

※文化財関係

ふなばしの歴史と文化財	船橋市教育委員会
音羽の文化財	音羽町教育委員会
柏原市の遺跡と指定文化財	柏原市教育委員会

※資料その他

弥富町誌　資料編1	弥富町
考古遺物資料集　第11集	㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
秋田県埋蔵文化財センター10年のあゆみ	秋田県埋蔵文化財センター
栃木県文化振興事業団10年のあゆみ	㈶栃木県文化振興事業団
躍動する地域社会	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
10年のあゆみ－設立10周年記念誌－	㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
図説　埼玉のあゆみ　原始・古代編	埼玉県立埋蔵文化財センター
10年のあゆみ	㈶君津郡市文化財センター
「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究	筑波大学
筑波大学　先史学・考古学研究　第1号	筑波大学　歴史・人類学系
〃　〃　第2号	〃
	〃
古墳測量調査報告書1	立正大学学園
考古資料図録	小田原市教育委員会
史跡石垣山	石川考古学研究会
石川県城館跡分布調査報告	松本市教育委員会
針塚古墳の発掘	㈶由良大和古代文化研究協会
朝鮮三国時代　陶質土器の研究	律令祭祀研究会
律令期祭祀遺物集成	日本窯業史研究所
小砂焼	㈶千葉県文化財センター
古墳時代(1)　－房総考古学ライブラリー5－	愛知県
愛知の稲	㈶東海財団
東海の自然史	名古屋大学年代測定資料研究センター・天然放射性元素測定小委員会
名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（II）	安城市教育委員会
西蓮寺文書	〃　安城市歴史博物館内文化財課
安城の中世	田原町農業協同組合
むかしの田原	大阪府立弥生文化博物館
弥生文化－日本文化の源流をさぐる－	牧方市教育委員会・㈶牧方市文化財研究調査会
牧方の鋳物師（一）	奈良国立文化財研究所・㈱吉川弘文館
平城京　長屋王邸宅と木簡	㈱講談社
日本全史	〃
吉野ヶ里と古代遺跡探訪	㈱集英社
倭人争乱	㈱光文社
弥生	㈱柏書房
都市考古学の研究	㈱小学館
伊勢と熊野の海	㈱新人物往来社
古代豪族と朝鮮	㈱雄山閣出版
政治Ⅰ（原始・古代・中世）	彦坂登喜二（踏青）・大島静雄
踏青夜話（やとみ昔ばなし）	廣田典夫
土佐の須恵器	

美濃の後期古墳－シンポジウム－	岐阜市歴史博物館
東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器（Ⅰ）	東海埋蔵文化財研究会
〃 （Ⅱ）	〃
〃 （Ⅲ）	〃
大阪府下埋蔵文化財研究会（第24回）資料	㈶大阪文化財センター普及係
第９回近畿地方埋蔵文化財研究会資料	㈶大阪文化財センター
藤ノ木古墳と古代の河内	㈶八尾市文化財調査研究会
新池遺跡－発掘調査報告会	高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター
卑弥呼とその時代－第３回歴史の華ひらく泉南シンポジウム－	泉南市・泉南市教育委員会
考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状	帝塚山考古学研究所　堅田直
第２回考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状	〃　〃
第３回　〃	〃　〃
第４回　〃	〃　〃
横穴式石室を考える	帝塚山考古学研究所

年　報　平成３年度

平成４年３月

編　集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
発　行

印　刷　株式会社　クイックス